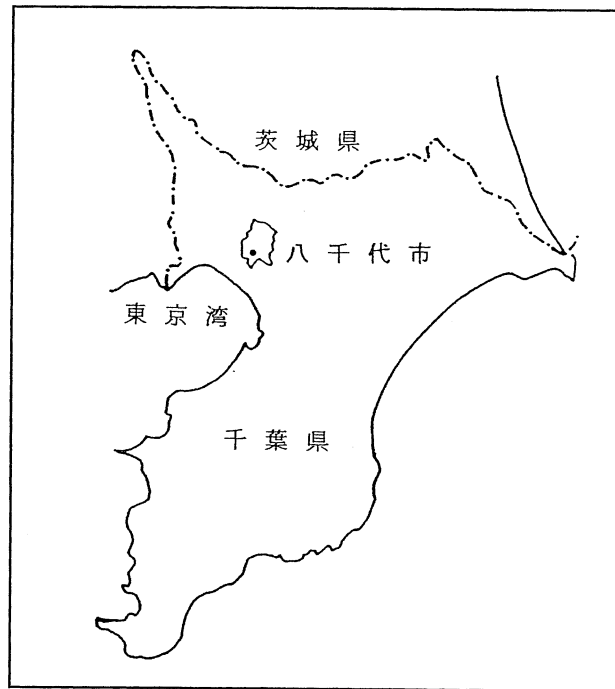


千葉県八千代市

内込遺跡 b 地点発掘調査報告書

－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査－



2003

八千代市遺跡調査会

序 文

八千代市は千葉県北西部に位置し、印旛沼と新川周辺に広がる台地上や低地の地の利を得て、農業を中心として成長してきました。他面、首都30キロ圏に位置していることから、昭和30年代以降は経済の高度成長化に伴い、首都圏の住宅都市としての性格を強めてきました。本市は、都心や近郊都市への通勤エリアとして京成電鉄線、第3セクターの東葉高速鉄道等の交通網が整備され、また大学の誘致と周辺に住宅を整備した文教都市としての事業も、成果をあげつつ更に進められています。一方、市中央部を南北に貫流する新川を中心とした河川を市民の憩いの場とする目的で、遊歩道の整備や新川千本桜植栽事業として川沿いに桜を植樹する計画も進められています。

今回の発掘調査の契機となった宅地造成事業は、市域南部の京成大和田駅に至近の位置にある八千代台北17丁目に、住宅を供給する事業が計画されたため調査を実施しました。

調査の結果、古墳時代後期を中心として平安時代前期の集落跡を発見することができました。遺物は、縄文時代中期前半の土器、古墳時代後期の竪穴住居跡からの一括資料等良好な状態で出土しました。

本書を刊行するにあたり、この報告書が八千代市の原始・古代を考古資料を通じて考えるきっかけになっていただければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまでご指導・ご協力いただいた千葉県教育庁文化財課、八千代市教育委員会、岩井富久氏、岩井稔氏をはじめ、関係諸機関の皆様に対して深く感謝いたします。また、市街地の発掘調査での苦勞を共にわかちあっていただいた調査員・調査補助員の方々、期間の限られた中での整理作業に従事いただいた整理補助員の皆様にもあわせてお礼申し上げます。

平成15年12月22日

八千代市遺跡調査会
会長 三浦幸子

凡 例

- 1 本書は、千葉県八千代市八千代台北17丁目1622番に所在する、内込遺跡b地点の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、土地所有者岩井富久氏の委託を受け、八千代市遺跡調査会が平成13.14年度に実施した。
- 3 発掘調査・本整理作業は以下のとおり実施した。

確認調査

期 間 平成13年12月7日～平成14年1月8日
面 積 236 m² / 2,013m²
担 当 朝比奈竹男
備 考 平成13年度国庫県費補助事業

本調査

期 間 平成14年2月1日～平成14年5月9日
面 積 1,500 m²
担 当 朝比奈竹男・森竜哉
備 考 八千代市遺跡調査会委託事業

本整理作業


期 間 平成15年9月1日～平成15年12月26日
担 当 森竜哉
備 考 八千代市遺跡調査会委託事業


- 4 本書の編集・執筆は、森竜哉が行った。
- 5 現地での遺構・遺物出土状況写真は調査員の川口貴明が、報告書掲載の遺物写真は森竜哉が撮影した。
- 6 本書の作成・刊行については、下記の整理補助員と森が協力して行い、森が統括した。
〔整理補助員〕小林孝彰 小弓場直子 立松紀代美 寺澤洋子 野中則子 日向洋子 細川麻里
山下千代子
- 7 出土遺物、実測図等の資料は、八千代市教育委員会において保管している。
- 8 本書の遺構番号は、発掘調査時のまま使用している。
- 9 遺構・遺物の縮尺は下記のとおり統一しているが、位置図、全体図等の特殊なものについては別記している。

〔遺構〕 竪穴住居跡 (D)1/80 掘立柱建物跡 (H)1/80 ピット (P)1/40

〔遺物〕 土器・石器・土製品・鉄器1/4 石鏃2/3 小型土製品1/2

- 10 遺物実測図中の土器断面のヒゲ線は、切離しないしへら削り調整の範囲を表している。
- 11 土器実測図の中軸線サイドの空きは、復元実測をしたことを示したものである。
- 12 遺構・遺物のスクリーン・トーンは下記のとおり統一している。

 焼土・赤色塗彩

 カマド袖・須恵器・黒色処理

- 13 本書使用の地形図は、下記のとおりである。

第2図 国土地理院発行 1/50,000「佐倉」(NI-54-19-14)

第3図 参謀本部陸軍部測量局発行 1/20,000 第一軍管区地方迅速測図(明治15年発行)

第4図 八千代市発行 1/2,500 八千代都市計画基本図

- 14 発掘調査から整理作業において下記の諸氏・機関にご指導、ご協力いただきました。記して感謝いたします。(敬称略)

岩井富久 岩井稔 田中裕 松田礼子 松本太郎 千葉県教育庁文化財課 八千代市教育委員会

本文目次

序文 凡例

第1章 序説

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第3節 遺跡の位置と環境	1

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代	6
第2節 古墳時代	8
第3節 平安時代	30
第4節 掘立柱建物跡	36
第5節 ピット・溝状遺構	38

第3章 まとめ

第1節 縄文時代	41
第2節 古墳時代	41
第3節 平安時代	41
第4節 中・近世以降	41
第5節 内込遺跡 a,b 地点における遺構の変遷について	41
第6節 内込遺跡 b 地点における2期から6期の遺物について	42

挿図目次

第1図 グリッド配置図	3
第2図 周辺の遺跡分布図（市域水系図）	3
第3図 遺跡周辺の地形	4
第4図 遺跡位置図	4
第5図 内込遺跡 b 地点遺構配置図	5
第6図 内込遺跡 a, b 地点遺構配置合成図	5
第7図 202P・205P 遺構実測図	7
第8図 縄文時代出土遺物	7
第9図 08D 遺構実測図（1）平面図・遺物分布図・遺物出土状況図	9
第10図 08D 遺構実測図（2）炭化材出土状況図・カマド平面図	10
第11図 08D 出土遺物	11
第12図 09D 遺構実測図（1）平面図・土層断面図	13
第13図 09D 遺構実測図（2）遺物分布図・カマド平面図	14
第14図 09D 出土遺物（1）	15
第15図 09D 出土遺物（2）	16
第16図 19D 遺構実測図	17
第17図 19D 出土遺物	18
第18図 20D 遺構実測図	19
第19図 20D 出土遺物	20
第20図 23D 遺構実測図（1）平面図・遺物分布図	22
第21図 23D 遺構実測図（2）カマド平面図	23
第22図 23D 出土遺物	24
第23図 24D 遺構実測図（1）平面図・遺物分布図・遺物出土状況図	25
第24図 24D 遺構実測図（2）カマド平面図	26
第25図 24D 出土遺物（1）	27
第26図 24D 出土遺物（2）	28
第27図 25D 遺構実測図 平面図・出土遺物	29
第28図 21D 遺構実測図 平面図・遺物分布図・カマド平面図	31

第29図	2 1 D出土遺物	32
第30図	2 2 D遺構実測図 平面図・遺物分布図・カマド平面図	33
第31図	2 2 D出土遺物 (1)	35
第32図	2 2 D出土遺物 (2)	36
第33図	0 8 H・0 9 H遺構実測図	37
第34図	2 0 3 P・2 0 4 P遺構実測図	38
第35図	溝状遺構実測図	39
第36図	溝内出土遺物	40
第37図	内込遺跡 a,b 地点遺構変遷図	43
第38図	内込遺跡 b 地点2期遺物集成図	45
第39図	内込遺跡 b 地点3,4期遺物集成図	46
第40図	内込遺跡 b 地点5,6期遺物集成図	47

表 目 次

第1表	縄文時代遺物観察表	6	第13表	2 4 D遺物観察表 (3)	26
第2表	0 8 D遺物観察表 (1)	8	第14表	2 4 D遺物観察表 (4)	28
第3表	0 8 D遺物観察表 (2)	10	第15表	2 4 D遺物観察表 (5)	29
第4表	0 9 D遺物観察表 (1)	12	第16表	2 5 D遺物観察表 (1)	29
第5表	0 9 D遺物観察表 (2)	14	第17表	2 5 D遺物観察表 (2)	30
第6表	1 9 D遺物観察表 (1)	16	第18表	2 1 D遺物観察表 (1)	30
第7表	1 9 D遺物観察表 (2)	18	第19表	2 1 D遺物観察表 (2)	31
第8表	2 0 D遺物観察表 (1)	19	第20表	2 1 D遺物観察表 (3)	32
第9表	2 0 D遺物観察表 (2)	20	第21表	2 2 D遺物観察表 (1)	34
第10表	2 3 D遺物観察表	21	第22表	2 2 D遺物観察表 (2)	36
第11表	2 4 D遺物観察表 (1)	23	第23表	溝内遺物観察表	40
第12表	2 4 D遺物観察表 (2)	24			

写真図版目次

図版1	遺跡全景	図版9	2 4 D
図版2	0 8 D		2 4 D完掘状況 カマド左袖脇遺物出土状況
	0 8 D完掘状況 壁際遺物出土状況		No.31内坏類出土状況 カマド全景
	カマド全景 遺物出土状況拡大部		カマド右袖脇 No.28,29出土状況
図版3	0 9 D	図版10	2 5 D・0 8 H・0 9 H・2 0 4 P
	0 9 D完掘状況 遺物出土状況		2 5 D床硬化面及び遺物出土状況
図版4	0 9 D・1 9 D		0 8 H完掘状況 0 9 H完掘状況
	0 9 Dカマド脇遺物出土状況 カマド全景	図版11	ピット
	1 9 D完掘状況 遺物出土状況		2 0 2 P完掘状況 2 0 2 P土層堆積状況
図版5	1 9 D・2 0 D		2 0 3 P完掘状況 2 0 5 P完掘状況
	1 9 D No.2出土状況 1 9 D No.3出土状況	図版12	縄文時代の遺物
	2 0 D完掘状況	図版13	0 8 D遺物 (1)
図版6	2 1 D	図版14	0 8 D遺物 (2)・0 9 D遺物 (1)
	2 1 D完掘状況 カマド全景	図版15	0 9 D遺物 (2)・1 9 D遺物
	カマド内 No.9 遺存状況 No.4 出土状況	図版16	2 0 D・2 1 D遺物
図版7	2 2 D	図版17	2 2 D遺物
	2 2 D完掘状況 カマド全景	図版18	2 3 D遺物・2 4 D遺物 (1)
	遺物出土状況	図版19	2 4 D遺物 (2)・2 5 D遺物
図版8	2 3 D	図版20	溝内遺物
	2 3 D完掘状況 カマド全景		
	遺物出土状況		

第1章 序 説

第1節 調査に至る経緯

平成13年10月、岩井稔氏から宅地造成のため当該地にかかる埋蔵文化財の有無について、八千代市教育委員会宛て照会文書が提出された。これを受け市教育委員会が現地踏査を実施した。照会地は周知の遺跡範囲内であり、照会地内でも土師器等の遺物が散布している状況であった。また、東側隣接地において平成9年に本調査を実施し、古墳時代後期の竪穴住居跡を中心に遺構が検出された。遺構は今回照会地にも及んでいることから、岩井氏に遺跡が所在する旨を回答した。

岩井氏との協議では、氏が事業を進めていきたい旨の判断があり、市教育委員会ではこれを受けて、記録保存として発掘調査を実施することとなった。確認調査は、事業計画が整い土木工事にかかる発掘の届出を待って平成13年12月7日～平成14年1月8日にかけて実施した。調査の結果、当初の想定どおり古墳時代後期と奈良・平安時代の遺構、遺物を検出することができた。

第2節 調査の方法と経過

確認調査の成果から、耕作土下がソフトロームという基本層序だったため、遺物包含層については考慮せずにソフトローム層上面を確認面とした。

調査区の設定は、公共座標系に沿って20m方眼を設定し1グリッドとした。1グリッド内を5m毎に分割して小グリッドとした。1グリッドは16に分割される。呼称方法は東西にアルファベット、南北にローマ数字とし、遺構外出土遺物や遺構位置は小グリッド名をもって扱った。(第1図参照)

調査の経過は、平成14年2月1日～5月9日の期間をもって実施した。2月1日～7日重機による表土剥ぎ、8日～13日遺構プラン確認作業、2月14日～3月15日20D,22D～24D、ピット等遺構調査、3月18日～4月4日08D,09D,19D,21D遺構調査、4月5日～26日ピット、溝状遺構、カマド調査、遺構平面実測図作成を行う。その後、遺跡全景撮影、住居・カマド掘り方等補足調査を行った。この間に遺物洗浄、注記等を実施し、最終的に5月9日をもって現場撤収を完了し現場における全作業を終了した。

第3節 遺跡の位置と環境

八千代市は千葉県の北半を占める下総台地上に位置する。台地の標高は20～50mであるが、市域では20～30mを測る。市内での標高の最高点は南西部の39.1m、最低点は北部の神崎川と新川の合流地点の1.1mである。おおまかに南西部で高く、東から北に向けて高度を減じていく台地の形状となっている。このため、河川の流れる方向も東ないし北となる傾向が見られる。台地を開析する河川は、市域中央を北流していた新川を核として、東流して新川に合流する神崎川、桑納川、高津川、北流して花見川と新川の分水嶺付近に至る勝田川、北流して印旛沼南岸に至る井野川に分類される(水系図参照)。また、台地はおおむね3枚の段丘から成り、標高25～30mの下総上位面、標高20～25mの下総下位面、標高11～15mの千葉段丘面に分けられる。5m以下は沖積地である。市内の遺跡はこの3枚の段丘上に位置し、内込遺跡は高津川南岸の千葉段丘面に占地している。

市内の遺跡について、時代毎に概観していくこととする。

旧石器時代では、萱田遺跡群が圧倒的にその調査例が多い。その内、北海道遺跡(37)でブロック63カ所、白幡前遺跡(40)でブロック56カ所と多く、他では30カ所程度である。また、新川東岸の村上遺跡群(18)でⅢ層の礫群が、その南の沖塚遺跡では環状ブロックが検出されている。吉橋の高本地区や大和田新田芝山遺跡(30)、仲ノ台遺跡(31)、高津新山遺跡(2)でブロック、遺物集中地点が検出された。概観すると新川の萱田・村上地区、桑納川南岸奥部、高津川南岸に集中が認められる。

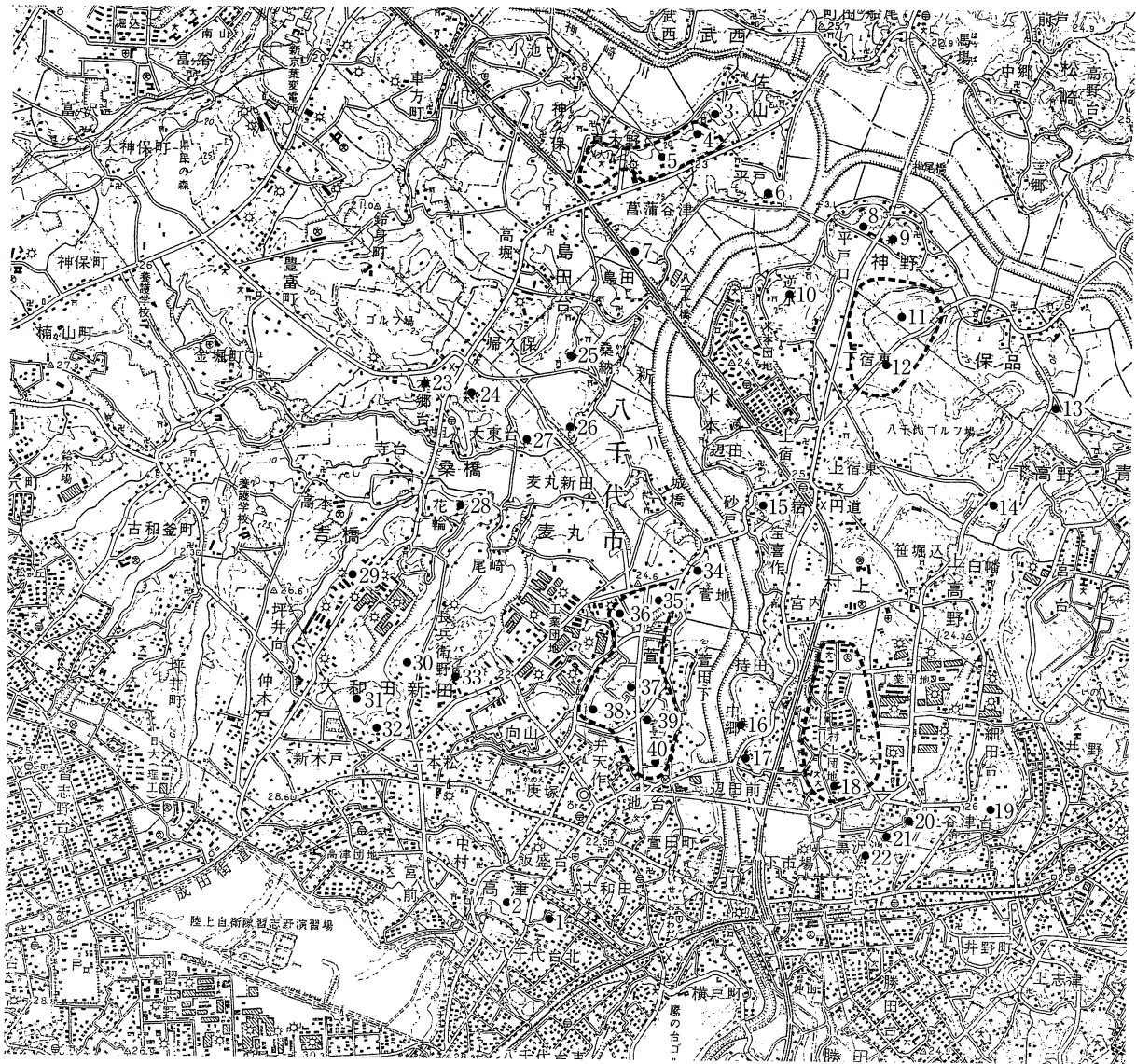
縄文時代では、市内最南部の八千代台南に所在する大請遺跡で早期前半(夏島式)の竪穴住居跡が単

独で検出されている。早期後半では、北部遺跡群中（4.5）の真木野向山遺跡と瓜ヶ作遺跡で101基、上谷遺跡（12）で200基を超える炉穴が検出されている。他には下高野新山遺跡（14）で炉穴群が検出されている。前期半ば（黒浜式）では、仲ノ台遺跡（31）、ライノ作南遺跡（32）で黒浜式期の竪穴住居跡が比較的まとまって検出された。前期後半では、上高野地区南側に所在する新林遺跡（21）を主体として、上谷津台南遺跡（19）、二重堀遺跡（20）、黒沢池上遺跡（22）がある。新林遺跡では同時期の竪穴住居跡、竪穴状遺構15基、土坑111基が検出された。北部遺跡群中（4.5）の真木野向山遺跡と瓜ヶ作遺跡で同時期の竪穴住居跡17軒が検出された。中期では前半については上谷遺跡（12）、黒沢池上遺跡（22）、西内野遺跡（29）に遺構が希薄に分布する程度だが、後半については北部遺跡群中（4.5）の真木野向山遺跡、東山久保遺跡、佐山台遺跡（5）や新林遺跡（21）、黒沢池上遺跡（22）、追分遺跡（23）、桑納前畑遺跡（25）、長兵衛野南遺跡（33）、高津新山遺跡（2）と小規模だが市域全体に広がっていく傾向が見られる。後期では佐山貝塚（3）、神野貝塚（9）といった貝塚が形成されるが、その他では大和田新田芝山遺跡（30）やライノ作南遺跡（32）北側のライノ作遺跡で単独の竪穴住居跡が検出されているのみである。晩期は佐山貝塚（3）、高津新山遺跡（2）等に遺物が出土するのみで遺構は検出されていない。

弥生時代では、中期後半において市域北側に遺跡が展開している。田原窪遺跡（4）では環濠内に竪穴住居跡41軒、逆水遺跡（10）では四隅にブリッジを持つ方形周溝墓6基、栗谷遺跡（11）では竪穴住居跡群と方形周溝墓群がセットで検出された。後期には遺跡数が増大する。萱田遺跡群では、権現後遺跡（35）、北海道遺跡（37）で竪穴住居跡が各々73軒、東部遺跡群中の栗谷遺跡（11）、上谷遺跡（12）においてもまとまりをもって検出された。その他では、逆水遺跡（10）4軒、浅間内遺跡（17）16軒、村上遺跡群（18）14軒、桑橋新田遺跡（27）3軒、新川西岸の萱田町地区に所在する川崎山遺跡、上ノ山遺跡等から竪穴住居跡が検出された。桑納川南岸の吉橋・大和田新田地区、井野川西岸の下高野・上高野地区を除いて、遺跡が展開している。

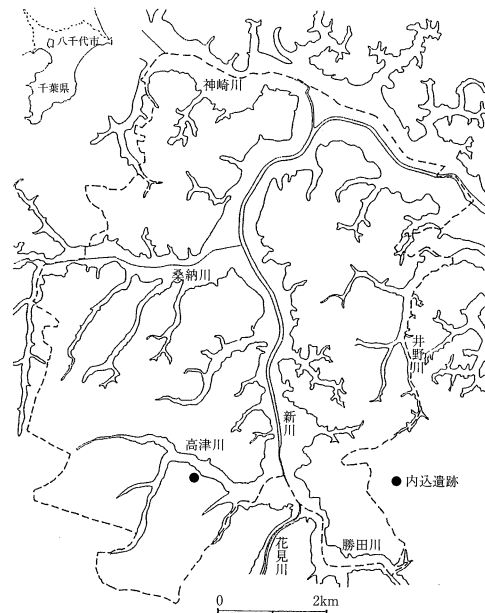
古墳時代では、弥生時代終末～古墳時代初頭にかけてはヲサル山遺跡（36）で34軒、新川西岸の萱田町地区に所在する川崎山遺跡において29軒が検出された。前期では遺跡数が増加する。佐山台遺跡（5）では229軒、桑橋新田遺跡（27）では確認調査段階だが170軒を超える。その他では北部遺跡群（4.5）中の田原窪遺跡（4）で29軒、真木野向山遺跡・東山久保遺跡・瓜ヶ作遺跡・松原遺跡では20軒単位で検出された。島田込ノ内遺跡（7）で12軒、栗谷遺跡（11）、上谷遺跡（12）、南谷遺跡（13）、浅間内遺跡（17）、作ヶ谷津遺跡（24）、高津新山遺跡（2）に検出例がある。中期では遺跡数、遺構数共に少ない。萱田遺跡群中の権現後遺跡（35）で5軒、北海道遺跡（37）で22軒、菅地ノ台遺跡（34）で6軒、新川西岸の萱田町地区に所在する川崎山遺跡において31軒、その他内込遺跡（1）、栗谷遺跡（11）、上谷遺跡（12）から数軒程度の規模で検出された。後期では内込遺跡（1）で20軒、北部遺跡群中の田原窪遺跡（4）で13軒、その他下高野新山遺跡（14）、持田遺跡（16）、菅地ノ台遺跡（34）、権現後遺跡（35）等に小規模に分布する。遺跡の時期的変遷からみると、弥生時代終末～古墳時代初頭に新川中流域に人の居住が認められ、前期中葉～後半に市域全体に遺跡数が増加し、中期では萱田地区周辺に石製模造品工房跡を主体とした集落が営まれるが規模は縮小する。後期は、中期より集落の規模は大きいが前期の比ではない。時期的には6世紀後半～7世紀代に集中している。古墳については、「内込遺跡発掘調査報告書」2001 八千代市遺跡調査会に詳細を掲載しているので参照されたい。

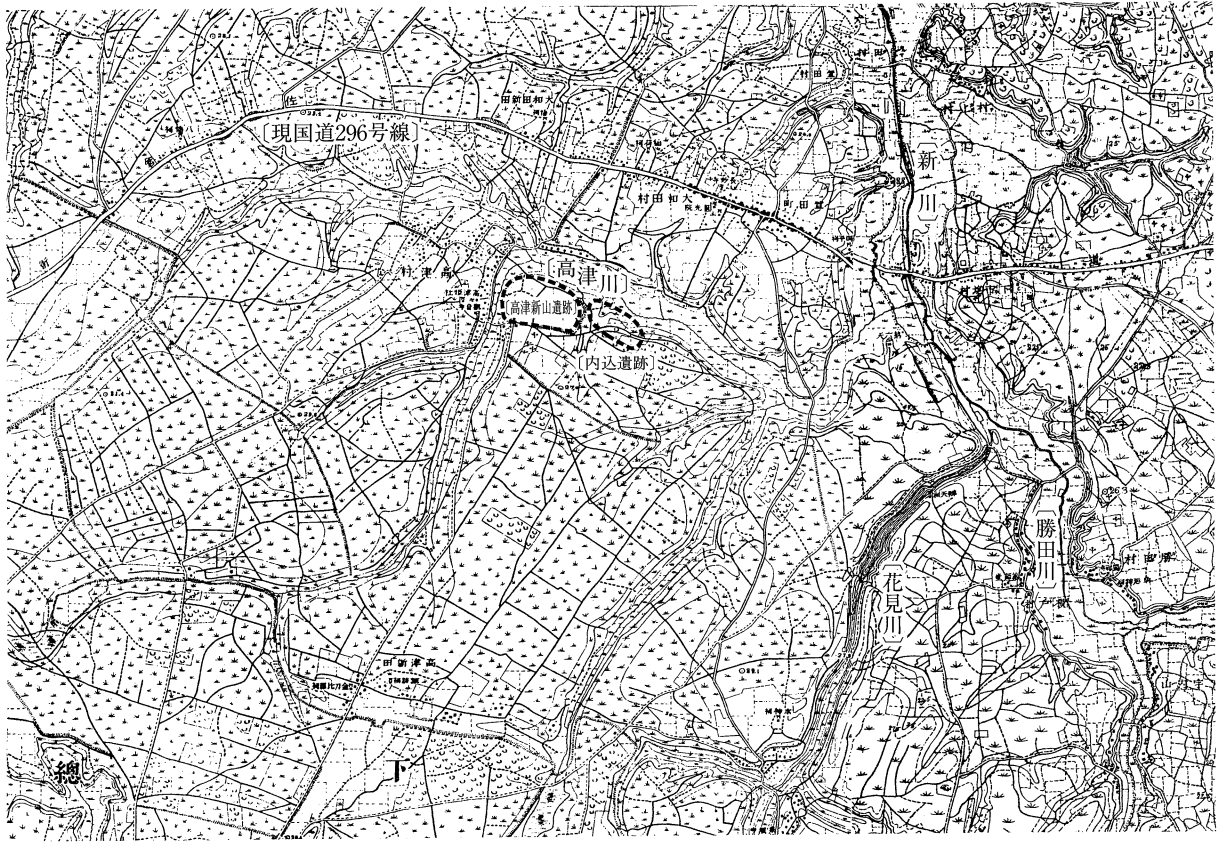
奈良・平安時代では、古墳時代前期より更に遺跡数と遺構規模の拡大が見られる。時期的には7世紀末葉～8世紀半ばまでは遺構が少なく、8世紀後半～9世紀半ばないし後半に画期的に増大し、それ以降減少していく傾向にある。遺跡では高津新山遺跡（2）、栗谷遺跡（11）、上谷遺跡（12）、村上遺跡群（18）、



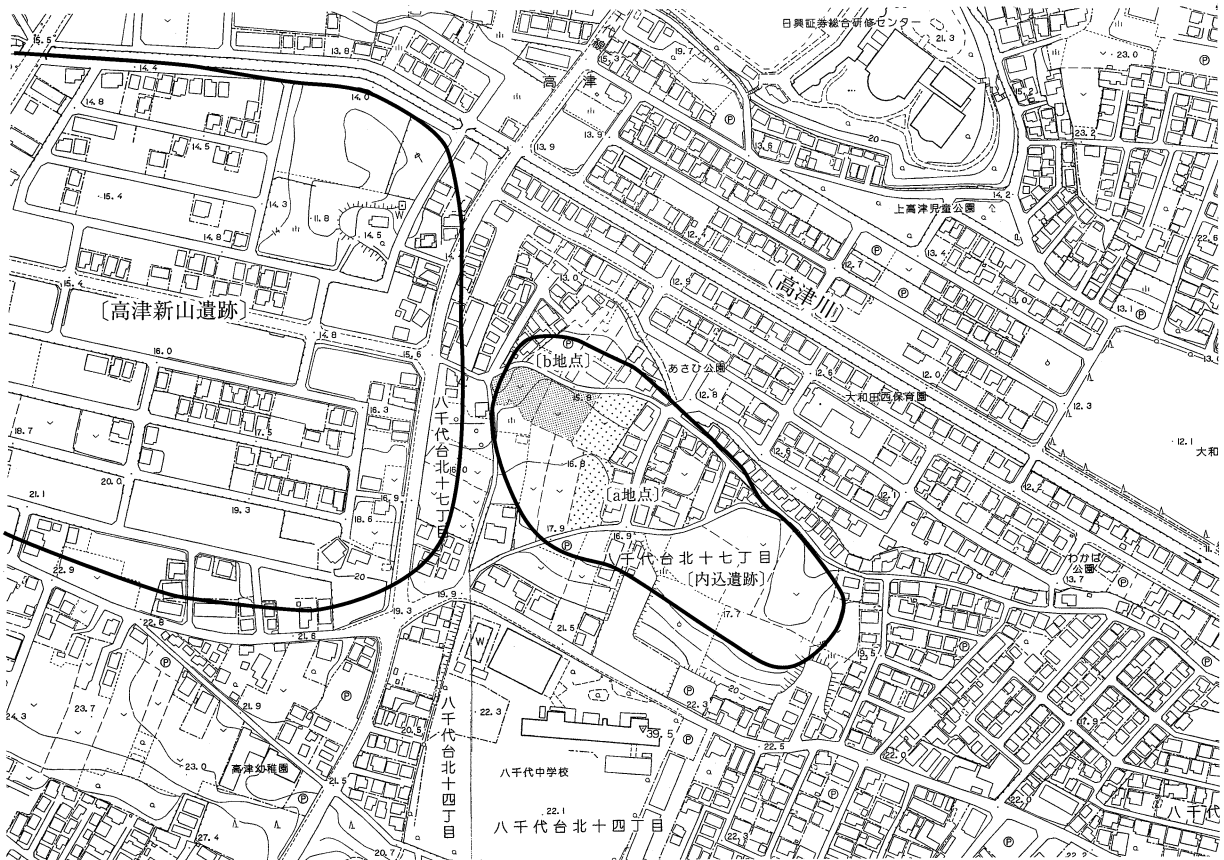
第2図 周辺の遺跡分布図 (S = 1:60,000)

1. 内込遺跡 (縄文・古墳・平安)
 2. 高津新山遺跡 (縄文・古墳・奈良・平安)
 3. 佐山貝塚 (縄文後期)
 4. 田原窪遺跡 (弥生中期)
 5. 佐山台遺跡 (古墳前期)
 6. 平戸台古墳群 (古墳後期)
 7. 島田込ノ内遺跡 (古墳前期・奈良・平安)
 8. 神野芝山古墳群
 9. 神野貝塚 (縄文)
 10. 逆水遺跡 (弥生中, 後期・中近世)
 11. 栗谷遺跡 (縄文・弥生中, 後期・奈良・平安)
 12. 上谷遺跡 (縄文早期・奈良・平安)
 13. 南谷遺跡 (弥生・古墳前期)
 14. 下高野新山遺跡 (縄文・古墳)
 15. 米本城跡 (中世)
 16. 正覚院館跡・持田遺跡 (古墳後期・中世)
 17. 浅間内遺跡 (縄文・弥生・奈良・平安)
 18. 村上遺跡群 (旧石器・弥生・古墳・奈良・平安)
 19. 上谷津台南遺跡
 20. 二重堀遺跡
 21. 新林遺跡
 22. 黒沢池上遺跡 (縄文早, 前, 中期)
 23. 追分遺跡 (縄文中期・平安)
 24. 作ヶ谷津遺跡 (縄文・古墳・平安)
 25. 桑納前畑遺跡 (縄文中期・奈良・平安)
 26. 桑納古墳群 (古墳後期)
 27. 桑橋新田遺跡 (縄文中, 後期・弥生・古墳前期)
 28. 吉橋城跡 (中世)
 29. 西内野遺跡 (縄文前, 中期)
 30. 大和田新田芝山遺跡 (旧石器・縄文前, 後期・奈良・平安)
 31. 仲ノ台遺跡 (旧石器・縄文前期・平安)
 32. ライノ作南遺跡 (縄文前期)
 33. 長兵衛野南遺跡 (縄文中期)
 34. 菅地ノ台遺跡 (弥生・古墳中期・奈良・平安)
 35. 権現後遺跡 (旧石器・弥生・古墳・奈良・平安)
 36. ヲサル山遺跡 (旧石器・弥生・古墳・奈良・平安)
 37. 北海道遺跡 (旧石器・弥生・古墳・奈良・平安)
 38. 坊山遺跡 (旧石器・縄文)
 39. 井戸向遺跡
 40. 白幡前遺跡 (旧石器・弥生・古墳・奈良・平安)
- ゴシック体は主体となる時代を示す。4.5は北部遺跡群, 11.12は東部遺跡群, 18は村上遺跡群, 35~40は萱田遺跡群を表す。

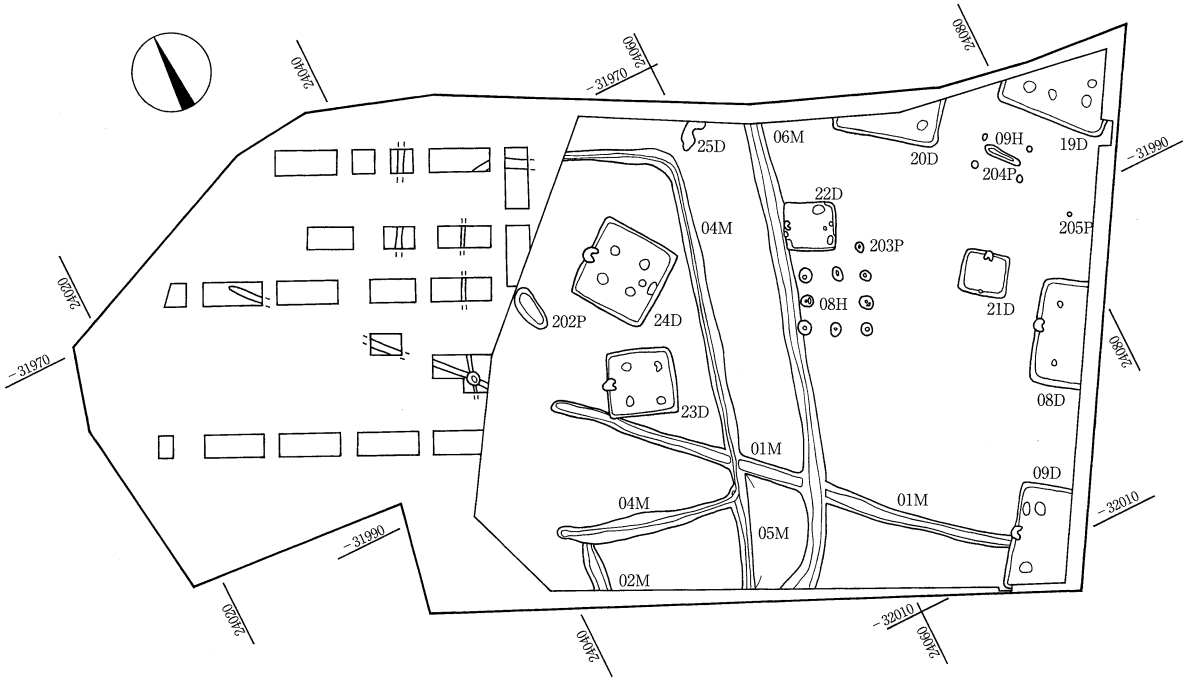




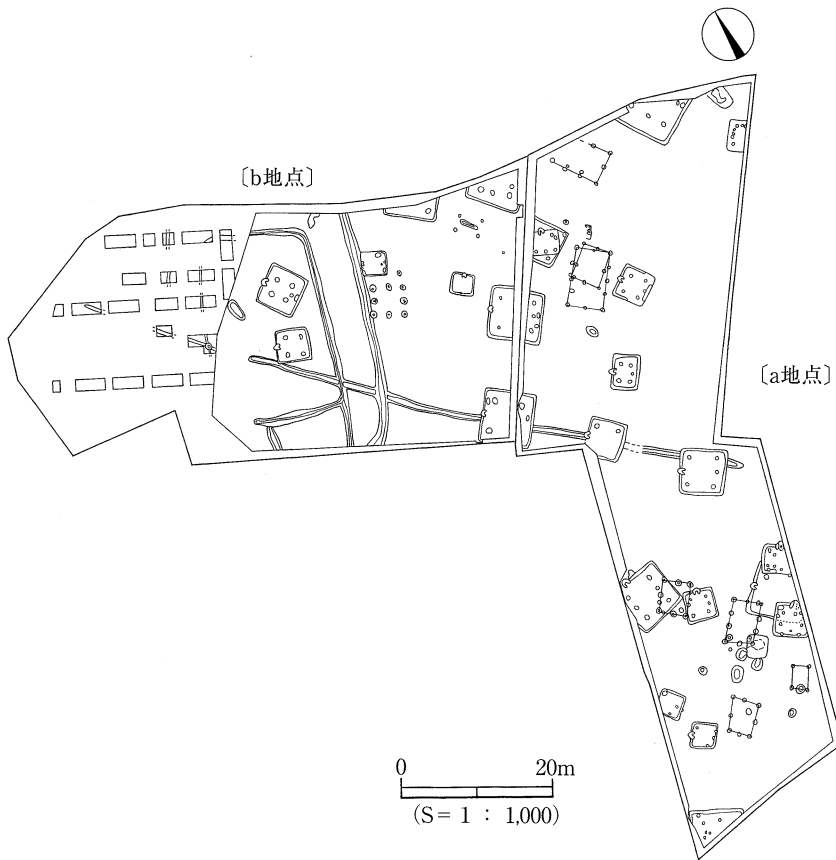
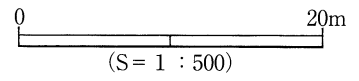
第3図 遺跡周辺の地形 (S = 1 : 40,000)



第4図 遺跡位置図 (S = 1 : 5,000)



第5图 内込遺跡 b 地点遺構配置図



第6图 内込遺跡 a.b 地点遺構配置合成図

北海道遺跡（37）、井戸向遺跡（39）、白幡前遺跡（40）等が主体となる時期の遺跡で、竪穴住居跡だけでも100軒を超えている。またこれらの遺跡からは墨書土器類の出土が多く知られており、八千代市域の奈良・平安時代を考える上で非常に重要である。

中世では米本城跡（15）、正覚院館跡（16）、吉橋城跡（28）等の城館跡を中心として、除々に調査による成果が上がっている。正覚院館跡では2回の調査において、土塁や堀の形状、遺物では康応2年（1390）銘の武蔵型板碑、北宋銭（景德元寶）、陶磁器片等館跡の利用形態を伺い知る遺物が発見された。吉橋城跡では、2郭からなる部分の内部の確認調査においてピット群を確認しているが、100m程離れた2地点の確認及び本調査において堀跡、土塁、整地遺構、地下式墳等の遺構を検出した。これは、単に城跡が土塁と堀のみの一構築物ではなく、縄張り内に他の施設を併設していたと考えられる証左であろう。

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代

今回の調査では遺物を伴う遺構は検出されなかったが、形状・覆土の状態、縄文時代の出土遺物から202P（陥穴）、205P（炉穴）を当該時期の遺構と想定した。前回（a地点）の調査においても同遺構が検出されていることから、早期～中期の土地利用が伺われる。また、遺物では早期条痕文系土器、中期中葉の土器が30点程度出土している。以下、遺構・遺物について概要を述べる。

202P（第7図 写真図版11）

調査区西側のBⅢ-9.10Gに位置する。掘り込みも明確で良い状態で遺存する。ややいびつな楕円形で長軸3.22m、短軸1.49m、深さ1.55mを測る。長軸方位はN-29°-Wである。壁面は長軸で中場～底面にかけてオーバーハングし、短軸でろう斗状の断面を持つ。底面はやや凹凸が見られるが、平坦を意識している。また、5層以下は下位段丘堆積物を含んでおり、粘土化している。覆土は1.2層が黒色土主体の自然堆積層で、3層以下はローム、ロームブロック混じりの褐色土である。5層以下では締まりに欠ける層である。

205P（第7図 写真図版11）

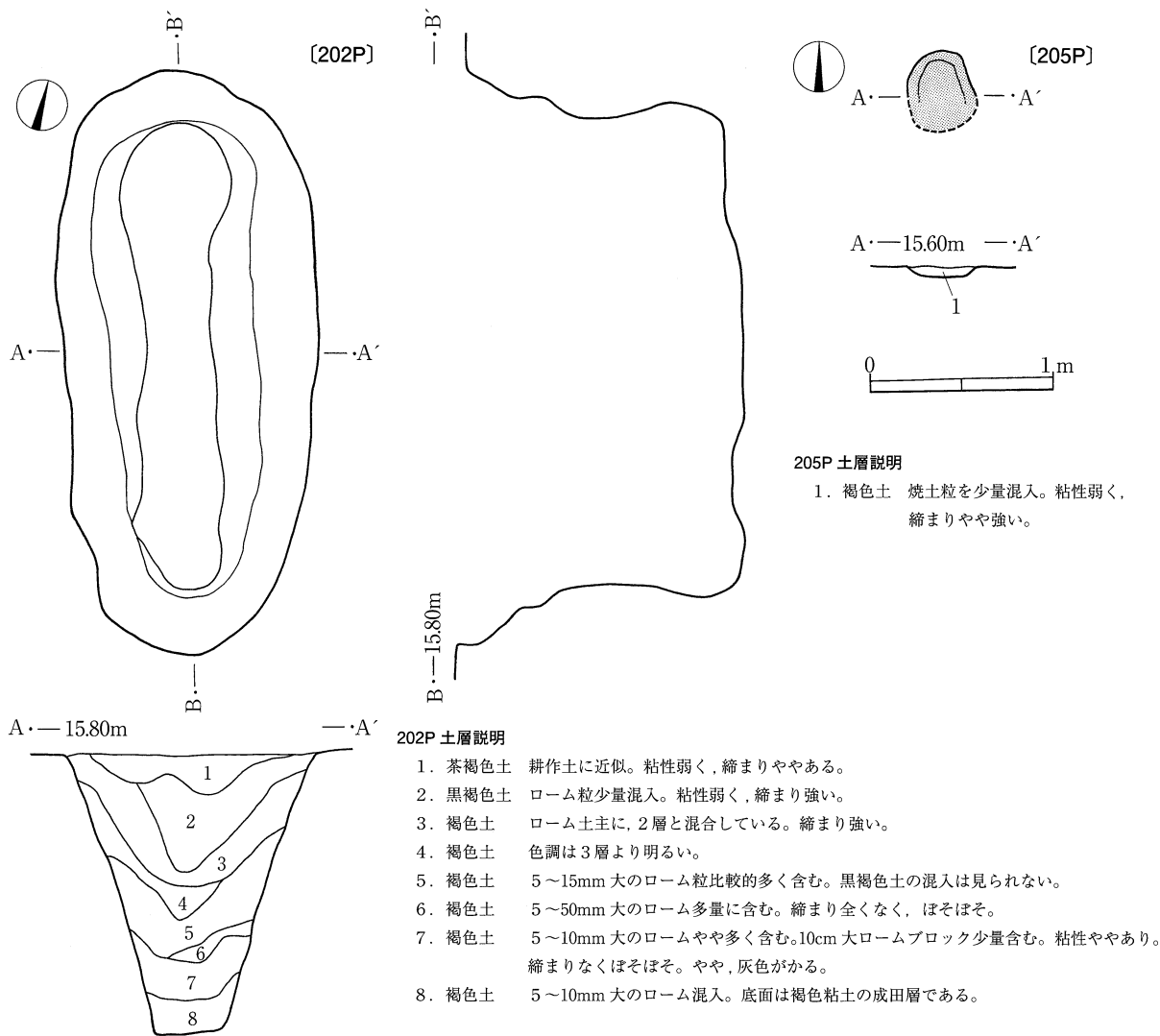
調査区東端のDⅢ-8Gに位置する。浅い掘り込みで調査時の掘り過ぎで遺存悪い。ややいびつな円形で0.38m、深さ0.07mを測る。壁面は緩やかに立ち上がる。底面は平坦で皿状の断面を持つ。覆土は焼土粒を少量含む褐色土の単一層である。

縄文時代出土遺物（第8図 写真図版12）

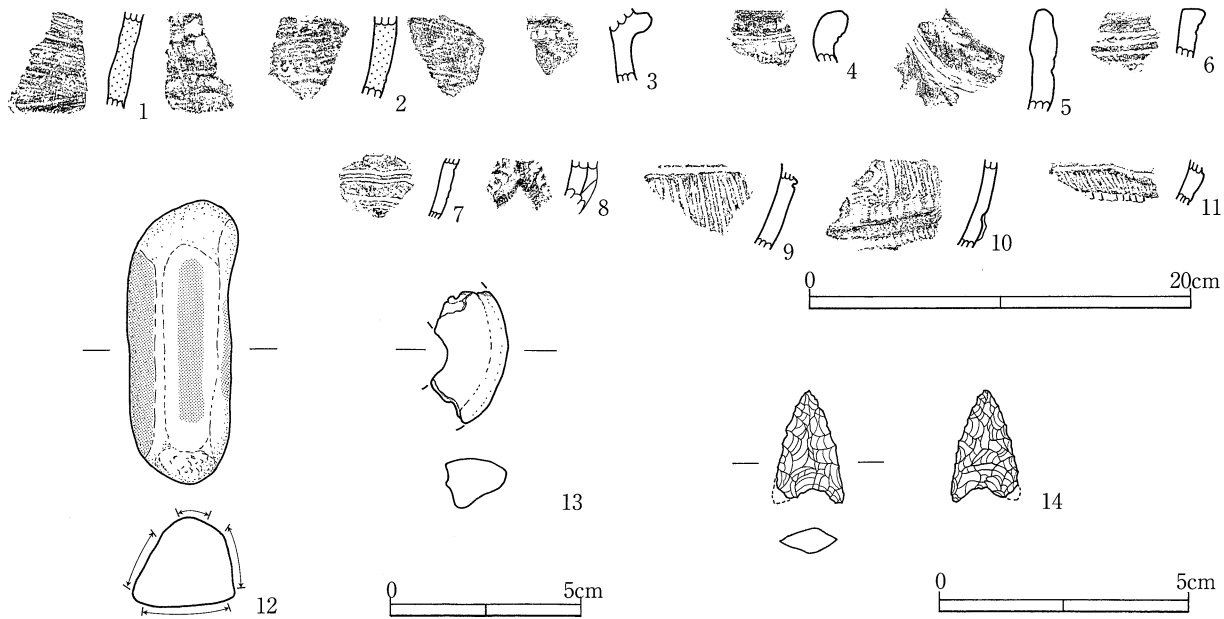
出土土器は碎片を含めると19点あるが、11点を図示した。他に耳飾？、石鏃、磨石が出土している。1、2は早期条痕文系土器で、共に条痕は浅く明瞭ではない。3～8は中期阿玉台式である。3は隆帯下に単列角押文、4、5は波状口縁部で新しい段階に位置づけられる。6は複列角押文を口縁下に施文する。7は横位波状沈線文、9～11は阿玉台式並行の勝坂系土器である。9は横位沈線下に縦位沈線が施文される。10は隆帯に沿って竹管状工具による押引文と細沈線を施文している。11も10に類似する。

第1表 縄文時代遺物観察表

挿図番号	器種	計測データ・手法上の特徴
8図12	磨石-敲石	砂岩質 全長7.4cm 幅2.7cm 重さ75.5g 断面四角形で各々の辺において磨り跡が見られる。下端部に敲打痕跡あり。
13	土製耳飾？	両端欠損の土製球状耳飾か。遺存長3.5cm 幅1.9cm 重さ7.0g 胎土は雲母、長石、石英、小礫粒混入。色調は淡橙褐色。なで整形。
14	石鏃	黒曜石 全長1.4cm 幅2.7cm 重さ1.0g 両面に稜をもつ丁寧な作り。茎部に緩い挟り。基部先端一部欠



第7図 202P・205P 遺構実測図



第8図 縄文時代出土遺物

第2節 古墳時代

本遺跡の主体となる時期で竪穴住居跡6軒，床硬化面1箇所，掘立柱建物跡1棟を検出した。時期は6世紀後半～7世紀前半以降に位置づけられる。竪穴住居跡の主軸方位についてはN-W方向で20°程度の振り幅は見られるが，3軒についてはほぼ同主軸である。カマド位置については，全遺構が北西～西方向に偏って見られる。平面規模は7m程度，4.5～5.5m程度の両者に分けられる。掘立柱建物跡については1間×1間の小規模のものであるが，a地点においても同主軸，掘り方規模の同程度のものが検出されており，群を成していたと想定される。遺物では，土器類では土師器坏を中心として高坏，鉢，手づくね，甕，甑が出土している。須恵器は客体的に蓋坏，短頸壺，甕が見られる。その他，磨り跡が顕著な土師器体部片，支脚，使用痕の見られる軽石が数点出土した。以下，各遺構と出土遺物について概要を述べていくこととする。

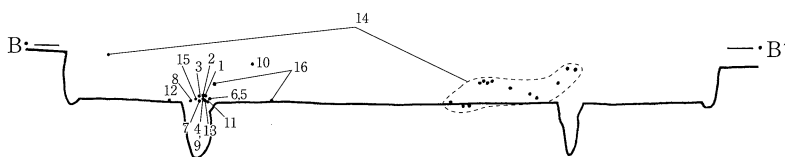
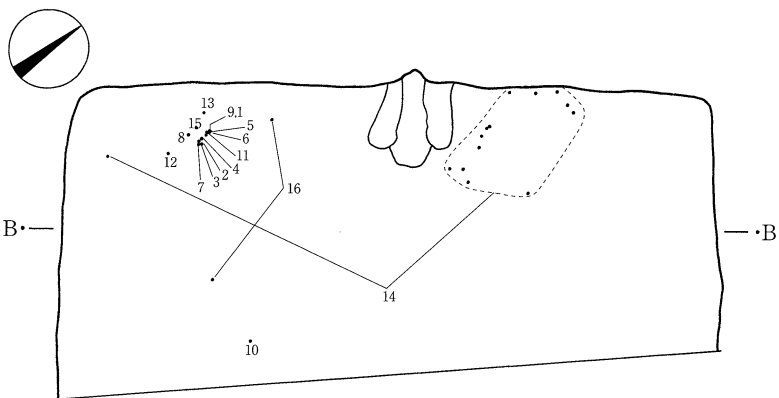
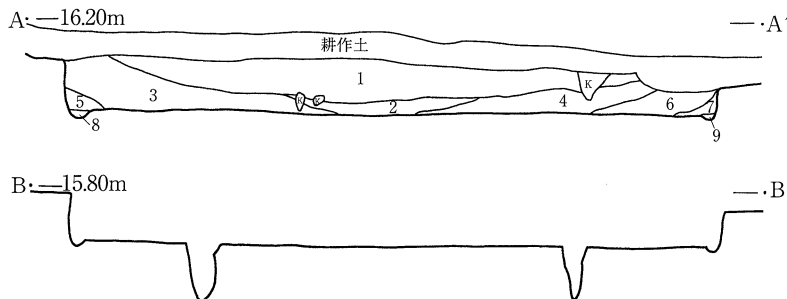
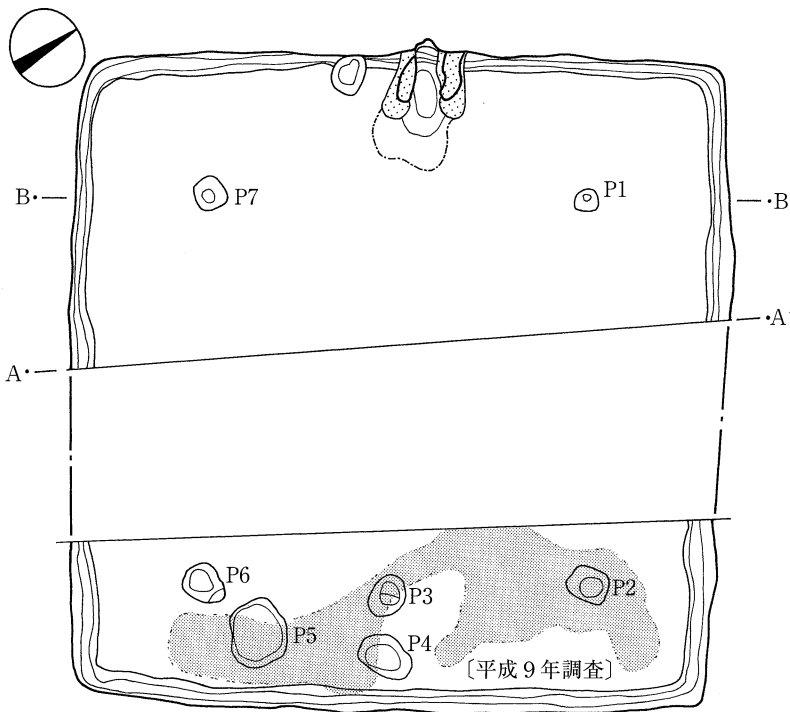
08D住居跡（第9.10.11図 写真図版2.13.14）

平成9年度の調査で部分的に検出し，今回の調査で規模が確定した遺構である。調査区東側のDⅣ-1グリッドに位置し，主軸方位はN-52°-W，平面形は6.6mのほぼ方形で，壁高は40～50cmである。周溝はほぼ全周すると想定され，カマド下においても周回した状態で検出されている。規模は幅15cm，深さ5～7cmを測る。支柱穴は4本で，柱間寸法は4.1m等間である。深さはP1-53cm，2-77cm，3-59cm，4-9cm，5-6cm，6-94cm，7-58cmを測る。出入り口はカマド対面のP3が該当する。P4.5は明らかな掘り込みを持ち，貯蔵用施設と考えられる。カマドは北西壁中央に位置し，袖及び天井部が良好な状態で遺存している。火床部は袖部中程で7～8cmの焼土，焼土ブロックが堆積している。煙道部は45°の角度をもって立ち上がっている。袖部の構築は，純度の高い淡褐色粘土を芯として，ローム混入の砂質粘土を積み重ねている。床面はハードロームを掘り込んで，凹凸面にロームを充填して平坦面とした地床である。硬化面はハードローム面であり，特定できなかった。覆土はロームブロック混じりの暗褐色土～褐色土で2層以下が人為的埋め戻し土と考えられる。

遺物は，カマド脇に廃棄した状態で14の長胴甕が，西壁際のカマドとコーナーの間に遺棄された状態で12,13,15の甕と収納された状態で坏類が出土した。11の須恵器短頸壺胴部片内には重ねた状態で9,6,5,1の土師器坏と須恵器蓋坏が，7の土師器坏内にも重ねた状態で4,3,2の須恵器蓋坏類が出土している。その他床面から平成9年度調査区で焼土，今回調査区で炭化材が検出された。柱掘り方上の焼土や遺物をさけた炭化材の出土状態から，住居廃絶時の意図的な行為と想定される。

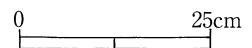
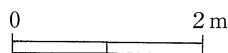
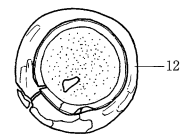
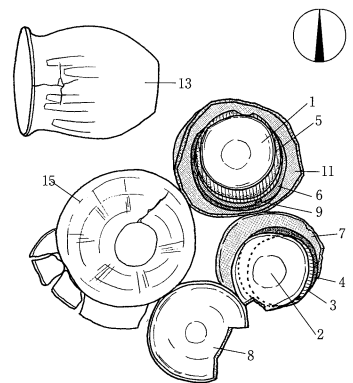
第2表 08D遺物観察表（1）

挿図番号	器種	寸法 (cm)	遺存度	色調	胎土	手法上の特徴
11図 1	須恵器蓋坏	口径 9.8 器高 4.2	完形	淡青灰色	白色粒	天井部及び周縁回転ヘラ削り調整。天井部外面に「-」のヘラ記号が見られる。東海産。
2	須恵器蓋坏	口径 9.9 器高 3.6	ほぼ完形 口縁一部欠	淡青灰色	白色粒	天井部及び周縁回転ヘラ削り調整。東海産。
3	須恵器蓋坏	口径 10.4 器高 2.6	ほぼ完形 受部径 9.3	青灰色	ち密	底部周縁及び体部下端回転ヘラ削り調整。東海産。
4	須恵器蓋坏	口径 10.5 器高 3.1	ほぼ完形 受部径 9.1	淡青灰色	白色粒	底部周縁及び体部下端回転ヘラ削り調整。東海産。
5	土師器坏	口径 12.6 器高 4.1	ほぼ完形	淡褐色	雲母，白色粒	口辺部外-横なで 体部外-横位ヘラ削り 内-横位ヘラ磨き 口辺部緩やかに立ち上がる 内面漆仕上げによる黒色処理か。
6	土師器坏	口径 12.1 器高 4.9	完形	淡橙褐色 内外面薄く剥離	石英，白色粒 砂粒	口辺部横なで 体部外-横位ヘラ削り 内-横位ヘラ磨き 口辺部やや直立ぎみ
7	土師器坏	口径 12.6 器高 4.1	ほぼ完形 口縁一部欠	外淡橙褐色～暗褐色 内漆黒色	雲母，白色粒	口辺部横なで 体部外-横位～斜位ヘラ削り 内-横位ヘラ磨き 炭素吸着による黒色処理

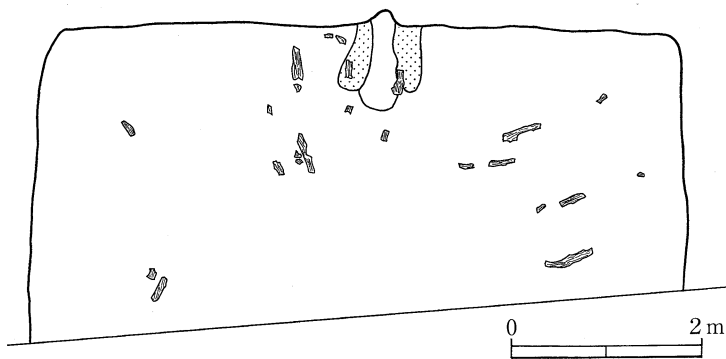


08D土層説明

1. 黒褐色土 斑点状に暗褐色土が混入。ローム粒1~2mm 多く含む。焼土粒微量に含む。粘性弱く、締り中。
2. 暗褐色土 斑点状に黒褐色土が混入。ローム粒1~2mm 多く含む。ロームブロック0.5~2cm 少量含む。粘性弱く、締り中。
3. 暗褐色土 上層に黒褐色土が混入。ローム粒1~3mm 多く含む。ロームブロック0.5~3cm 多く含む。焼土粒微量含む。粘性、締り共弱い。
4. 暗褐色土 上層に黒褐色土が混入。ローム粒1~2mm 大含む。ロームブロック0.5~2cm 少量含む。粘性弱く、締り中。
5. 暗褐色土 2~4cm 大ロームブロック混入。ローム粒1~2mm 大含む。炭化物微量に含む。粘性、締り共に弱い。
6. 褐色土 ローム粒1~2mm 多く含む。粘性弱く、締り中。
7. 暗褐色土 褐色土少量混入。ローム粒1~2mm 大含む。粘性弱く、締りやや弱。
8. 褐色土 ローム土に暗褐色土が少量混入。ローム粒1~2mm 含む。粘性強く、締り中。
9. 褐色土 ローム粒1~2mm 大含む。2cm 大ロームブロック少量混入。粘性弱く、締り中。

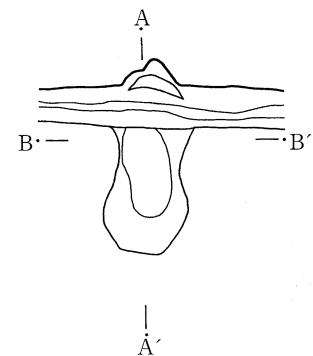
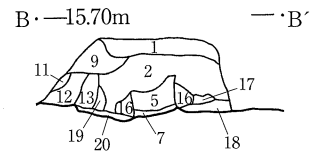
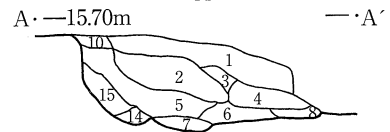
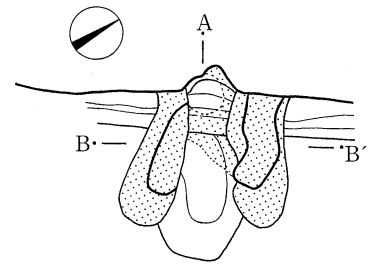


第9図 08D 遺構実測図 (1)



08Dカマド土層説明

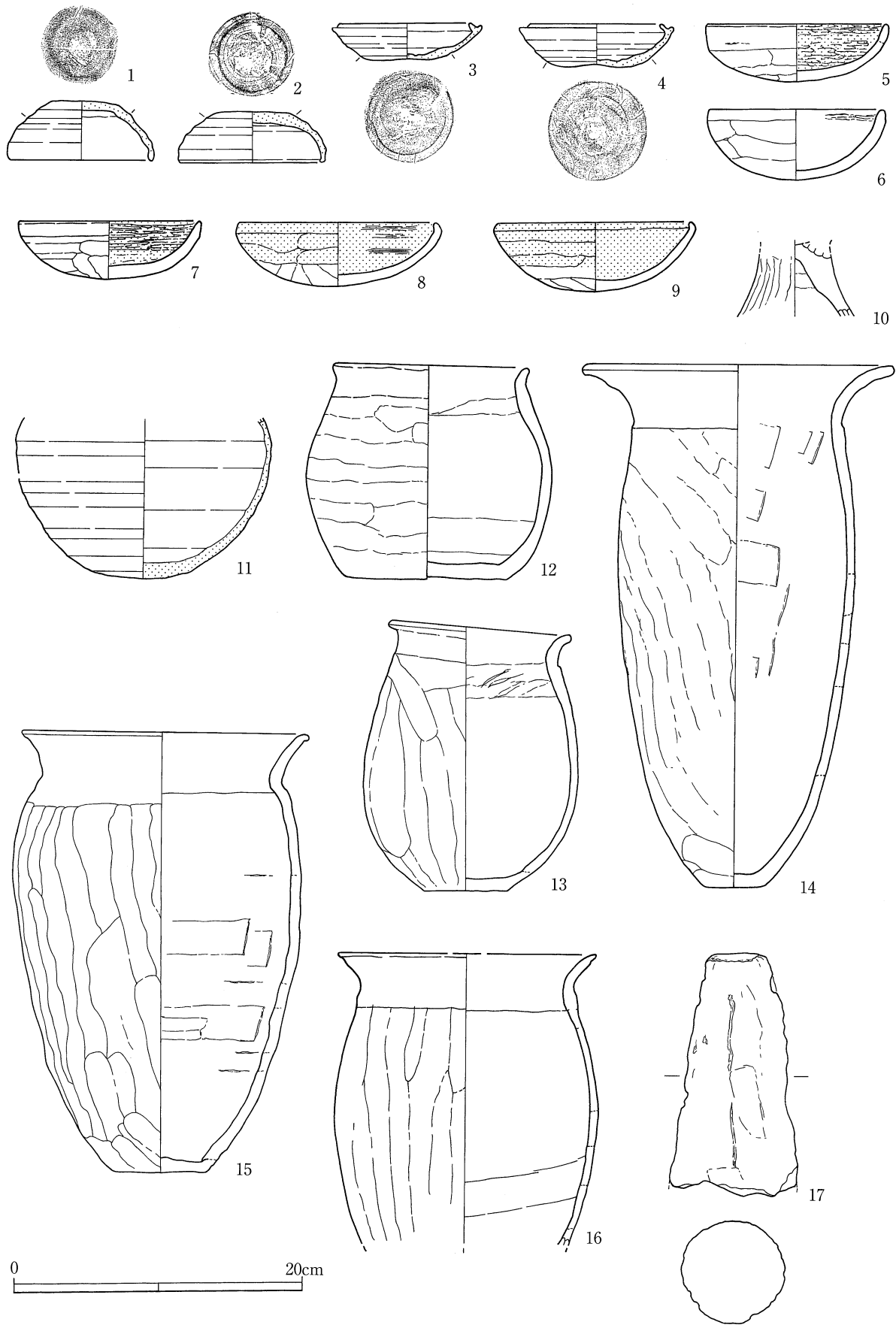
1. 暗褐色土 暗褐色土主体に淡褐色砂質粘土粒, 3mm 大ローム粒, 炭化物混入。
2. 淡褐色土 淡褐色砂質粘土。
3. 暗褐色土 黒色土, 3mm 大ローム粒主に淡褐色砂質粘土混入。
4. 黒褐色土 黒色土, 炭化物, 3mm 大焼土粒混合層。
5. 暗赤褐色土 黒色土, 炭化物, 3mm 大焼土粒, 淡褐色砂質粘土混合層。
6. 赤褐色土 焼土, 5mm 大焼土ブロック混合層。
7. 暗褐色土 ローム, 黒色土混合層。
8. 黒褐色土 黒色土主に3mm 大焼土粒混入。
9. 暗褐色土 1層類似。炭化物含まない。
10. 褐色土 ローム, 淡褐色砂質粘土, 焼土粒混合層。
11. 暗褐色土 淡褐色砂質粘土混入。
12. 暗褐色土 黒色土主に淡褐色砂質粘土混入。
13. 暗褐色土 黒色土, 淡褐色砂質粘土混合層。
14. 褐色土 ローム, ロームブロック, 黒色土少量の混合層。締まっている。周溝埋土。
15. 暗褐色土 5層類似。ロームやや多い。
16. 暗褐色土 ローム, 淡褐色砂質粘土, 黒色土, 焼土化砂混合層。
17. 暗褐色土 淡褐色砂質粘土, 暗褐色土混合層。
18. 淡褐色粘土
19. 褐色土 淡褐色砂質粘土, ローム土混合層。
20. 暗褐色土 ローム, ロームブロック, 黒色土混合層。床構築面。



第10図 08D 遺構実測図 (2)

11図	8	土師器 坏	口径 器高	13.7 4.5	口縁一部欠	橙褐色	白色粒, 小礫	口辺部横なで 体部外-底部へら削り後横位へら削り内- なで整形 内面と体部外面中位まで炭素吸着による黒色 処理か。
	9	土師器 坏	口径 器高	13.7 4.9	ほぼ完形 口縁一部欠	橙褐色	白色粒, 小礫	口辺部横なで 体部外-底部へら削り後横位へら削り内- なで整形 内面と体部外面中位まで炭素吸着による黒色 処理。
	10	土師器 高坏	遺存高	4.9	脚部のみ全 周	暗赤褐色	白色粒, 長石	脚部外-縦位へら削り 内-なで整形
	11	須恵器 短頸壺	胴部径 遺存高	17.9 11.3	底部~胴部 1/2遺存	淡灰色	石英, 白色粒	底部~胴部屈曲部 底部回転へら削り調整により丸底状 東海産
	12	土師器 甕	口径 器高 底径	13.3 15.0 11.4	ほぼ完形 胴部一部欠	暗褐色~淡赤褐 色	白色粒, 長石 石英, 雲母	口辺部横なで 胴部外-横位へら削り 内-へらなで 口辺~底部の1/2 外面において二次焼成による剥離著し い。
	13	土師器 甕	口径 器高 底径	12.4 19.1 5.8	完形	暗褐色~茶褐色	白色粒, 石英	口辺部横なで 胴部外-縦位へら削り 内-へらなで 内面において二次焼成による剥離, 炭化物の付着著しい。
	14	土師器 甕	口径 器高	21.9 36.9	口辺~胴下 2/3遺存	外淡褐色~暗褐 色 内淡橙褐色	白色粒, 黒雲 母	口辺部横なで 胴部外-斜位へら削り 内-へらなで 胴 下半部において二次焼成著しい。
	15	土師器 甕	口径 器高	20.2 31.1	ほぼ完形 底径 6.4	暗褐色~茶褐色	白色粒, 石英 長石	口辺部横なで 胴部外-縦位へら削り 内-横位へらなで
	16	土師器 甕	口径 器高	18.0 19.9	口辺~胴下 半1/3 遺存	暗黒褐色~淡橙 褐色	白色粒, 小礫 長石, 雲母	口辺部横なで 胴部外-縦位へら削り 内-横位へらなで 内面で二次焼成の剥離著しい。
	17	土製品 支脚	遺存長 上部幅	17.1 4.2	基底部欠	橙褐色	白色粒, 長石	なで整形 重さ845.5g

第3表 08D 遺物観察表 (2)



第11图 08D 出土遺物

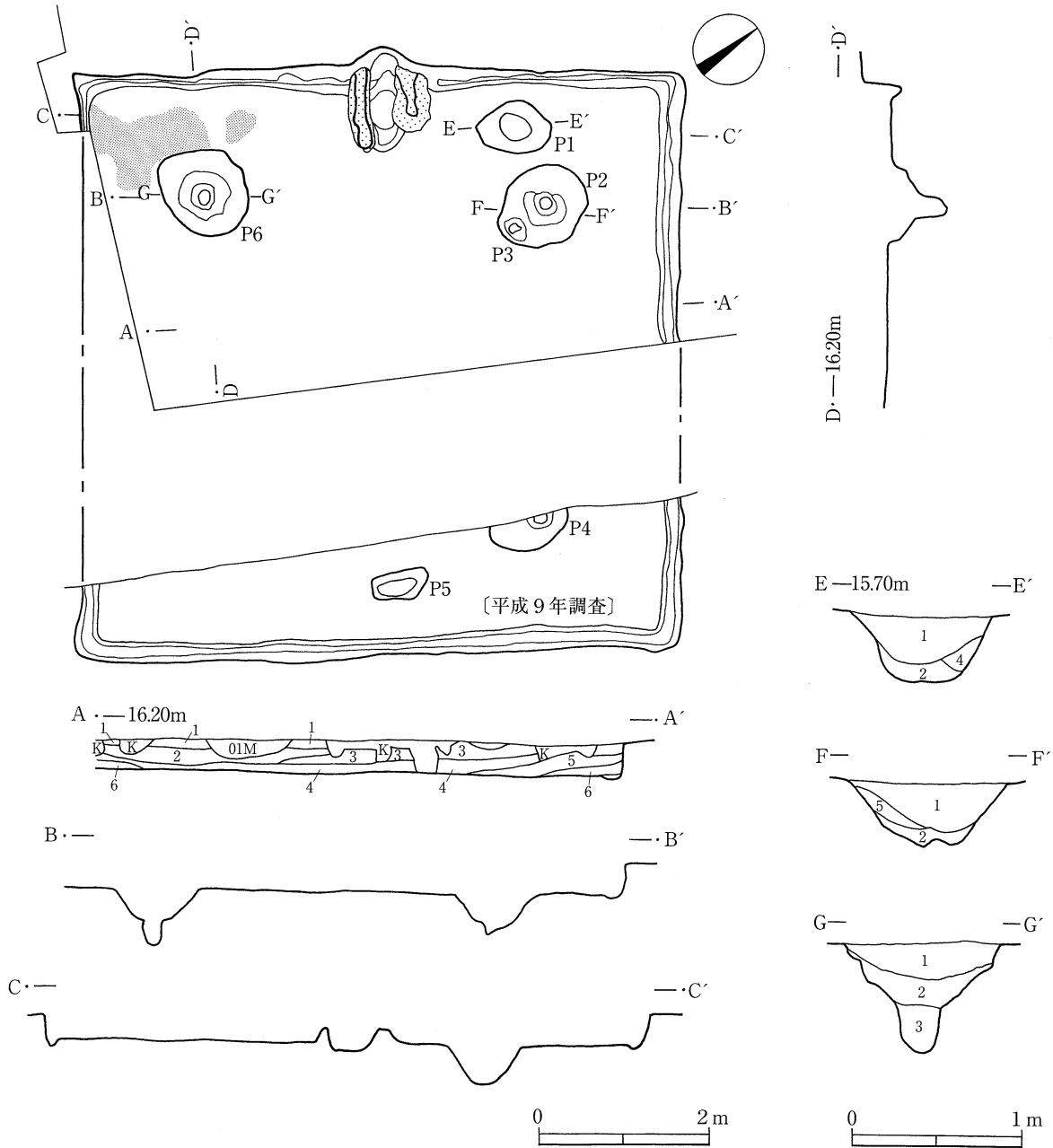
09D住居跡（第12.13.14.15 図 写真図版3.4.14.15）

平成9年度の調査で部分的に検出し、今回の調査で規模が確定した遺構である。調査区南東際のC IV -11.15 グリッドに位置し、主軸方位はN-52°-W、平面形は7.1mのほぼ方形で、壁高は30~37cmである。周溝はほぼ全周すると想定されるが、カマド袖部脇で立ち上がっている。規模は幅15cm、深さ5~12cmを測る。支柱穴は4本と想定される。柱間寸法はP2-6間で4.05m、P2-4間で3.7mである。深さはP1-45cm、2-45cm、3-52cm、4-72cm、5-39cm、6-70cmを測る。出入口はカマド対面のP5が該当する。カマドは北西壁中央に位置し、袖部が良好な状態で遺存している。火床部は袖部中程で4cm程度の厚さで焼土ブロックが堆積している。煙道部は火床部奥で平坦部を造り、更に奥で70°の角度をもって立ち上がっている。袖部の構築は、粘度の高い茶褐色粘土を芯として、砂質粘土を積み重ねている。床面はハードロームを掘り込んで、凹凸面にロームを充填して平坦面とした地床である。硬化面はハードローム面であり、特定できなかった。覆土はロームブロック混じりの褐色土やロームを主体とした土層であり、人為的埋め戻し土と考えられる。

遺物は、ほぼ床面直上からの出土で、カマド左袖脇に7,8,10~16の土師器甕類と17の支脚、右袖脇に2,4の土師器坏、高坏、カマドと東コーナーの間に1の土師器坏、5,6の高坏脚部、左袖脇ととんで出土している11の土師器甕がみられる。その他P6脇から床面から5cm程浮いて焼土が検出された。おそらく柱掘り方上にも焼土は分布していた可能性は高く、住居廃絶時の意図的な行為と想定される。

第4表 09D 遺物観察表（1）

挿図番号	器種	寸法 (cm)	遺存度	色調	胎土	手法上の特徴
14図 1	土師器坏	口径 10.8 器高 3.7	ほぼ完形	黒茶色 内面剥離著しい。	白色粒, 赤色粒, 雲母	口辺部内外, 体部内-ヘラ磨き 体部外-横位ヘラ削り 内外炭素吸着による黒色処理
2	土師器坏	口径 13.0 器高 5.0	ほぼ完形	黒茶褐色	白色粒, 雲母	口辺部内外, 体部内-横位ヘラ磨き 体部外-横位ヘラ削り 口辺部外面-内面漆仕上げによる黒色処理
3	土師器坏	口径 10.0 器高 3.3	口辺~体部 2/3 遺存	外暗褐色 内淡黒灰色	白色粒, 雲母	口辺部横なで 体部外-横位ヘラ削り 内-横位ヘラ磨き 内面炭素吸着による黒色処理
4	土師器高坏	口径 19.8 遺存高 4.6	坏部 1/3 遺存	外淡茶褐色 内淡赤褐色	白色粒, 雲母	口辺部横なで 体部外-横位ヘラ削り 内-横位ヘラ磨き 内面剥離著しい。
5	土師器高坏	低径 12.9 遺存高 8.0	脚部全周	脚部外淡橙褐色 内黒灰色 坏部内淡黒茶色	白色粒, 雲母	脚部外-縦位ヘラ削り 内-横位ヘラ削り 坏部内-ヘラ磨き後漆仕上げによる黒色処理か
6	土師器高坏	裾部遺存径 12.0 遺存高 6.5	脚部全周遺存 裾部全周欠	淡茶褐色	長石, 雲母	脚部外-縦位ヘラ削り後下端部ヘラ削り後横なで 内-ヘラなで後下端部横なで
7	土師器甕	口径 17.6 器高 15.6 底径 6.6	口辺~底部 2/3 遺存	橙褐色	白色粒, 雲母 小礫	口辺部横なで 外-胴上半~中位縦位ヘラ削り 後下半横位ヘラ削り 内-なで調整 内面剥離痕若干見られる。
8	土師器甕	口径 17.4 遺存高 7.3	口辺部全周遺存	淡赤褐色	白色粒, 雲母	口辺部横なで 外-縦位ヘラ削り後ナデ調整 内-なで調整 二次焼成による剥離著しい。13と同一個体である。
9	土師器手づくね	遺存高 1.2 底径 5.6	口辺全周欠	淡茶褐色	白色粒, 雲母	指なで整形 底部木葉痕
10	土師器甕	口径 20.5 器高 25.5 底径 9.6	ほぼ完形	淡赤褐色~暗茶褐色	白色粒, 雲母 赤色粒	口辺部横なで 外-縦位ヘラ削り後横位ヘラ削り 内-頸部横位ヘラ削り 胴上半~下半磨き状のなで
11	土師器甕	口径 18.3 器高 28.3 底径 8.6	ほぼ完形	暗褐色~茶褐色	白色粒, 雲母	口辺部外-横なで 内-横位ヘラ磨き 胴部外-横位ヘラ削り後下半縦位ヘラ削り 内-上半部ヘラなで全体になで整形
12	土師器甕	口径 20.6 遺存高 22.5	口辺~胴部 1/3 遺存	淡橙褐色	白色粒, 雲母 砂粒	口辺部横なで 胴部外-下半部で横位ヘラ削り 後上半部縦位ヘラ削り 内-頸部~胴上半部でヘラなで 下半部なで整形



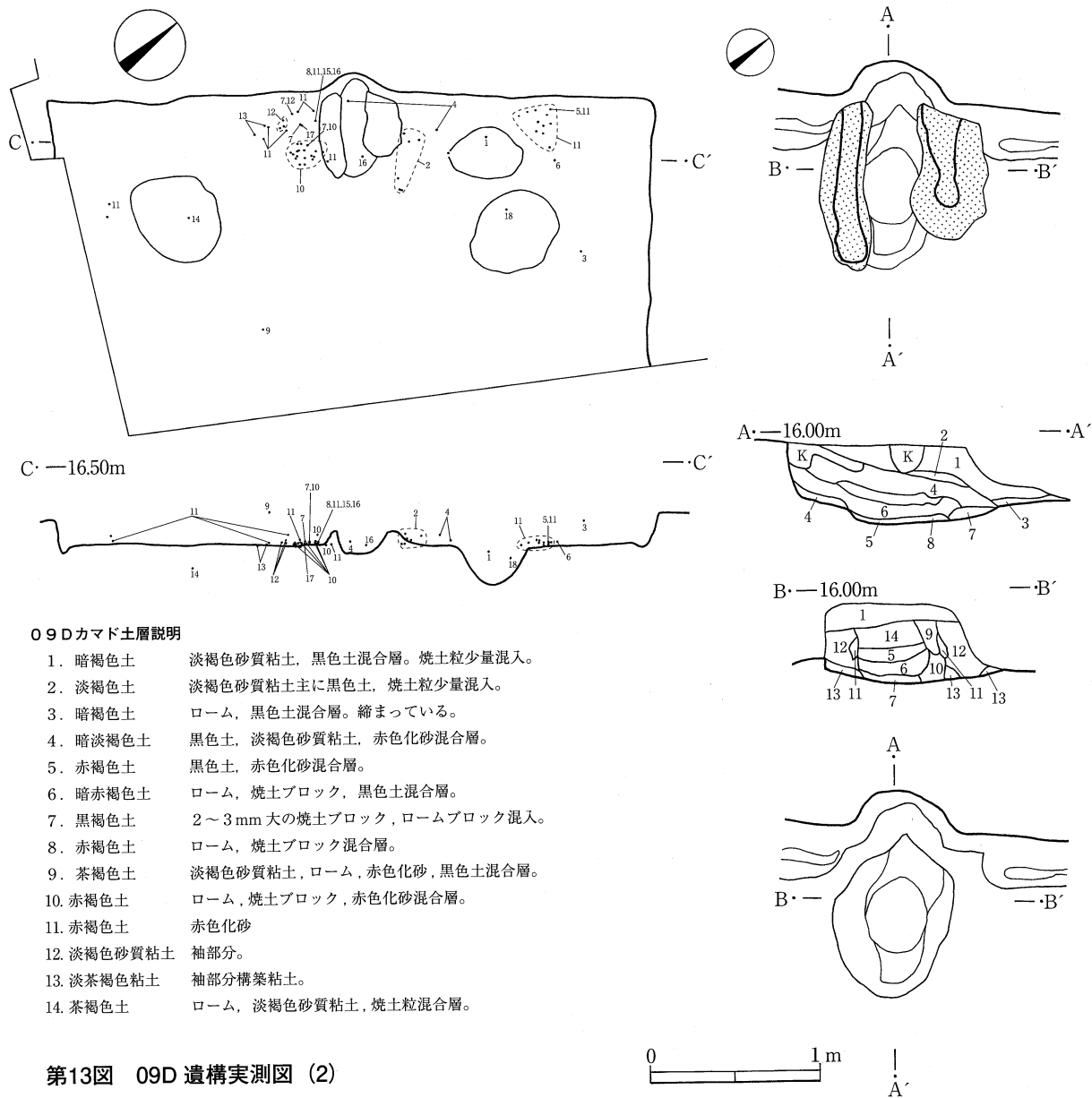
09D土層説明

1. 褐色土 微粒のローム粒を含む。粘性、締まり共弱い。
2. 褐色土 1より明るい。微粒のローム粒を含む。粘性、締まり共弱い。
3. 明褐色土 やや粒の大きいローム粒を含む。粘性、締まり共弱い。
4. 褐色土 微粒のローム粒を含む。1~2cm大ロームブロック混入。粘性やや弱く締まり中。
5. 褐色土 少量のローム、黒色土混入。粒子粗い。粘性、締まり共やや弱い。
6. 褐色土 少量のローム、微量の黒色土混入。粘性、締まり共やや弱い。

09Dピット土層説明

1. 暗褐色土 1~3mm大のローム粒を多く含む。1~3cm大のロームブロック混入。粘性弱く、締まりやや弱い。
2. 暗褐色土 1~3mm大のローム粒を含む。1cm大のロームブロック微量混入。粘性やや弱く、締まり弱い。
3. 暗褐色土 1~3mm大のローム粒を含む。粘性やや弱く、締まり極めて弱い。
4. 褐色土 1~2mm大のローム粒を少量含む。粘性中、締まり弱い。
5. 暗褐色土 1~2mm大のローム粒を少量含む。1~2cm大のロームブロック微量混入。粘性、締まり共弱い。

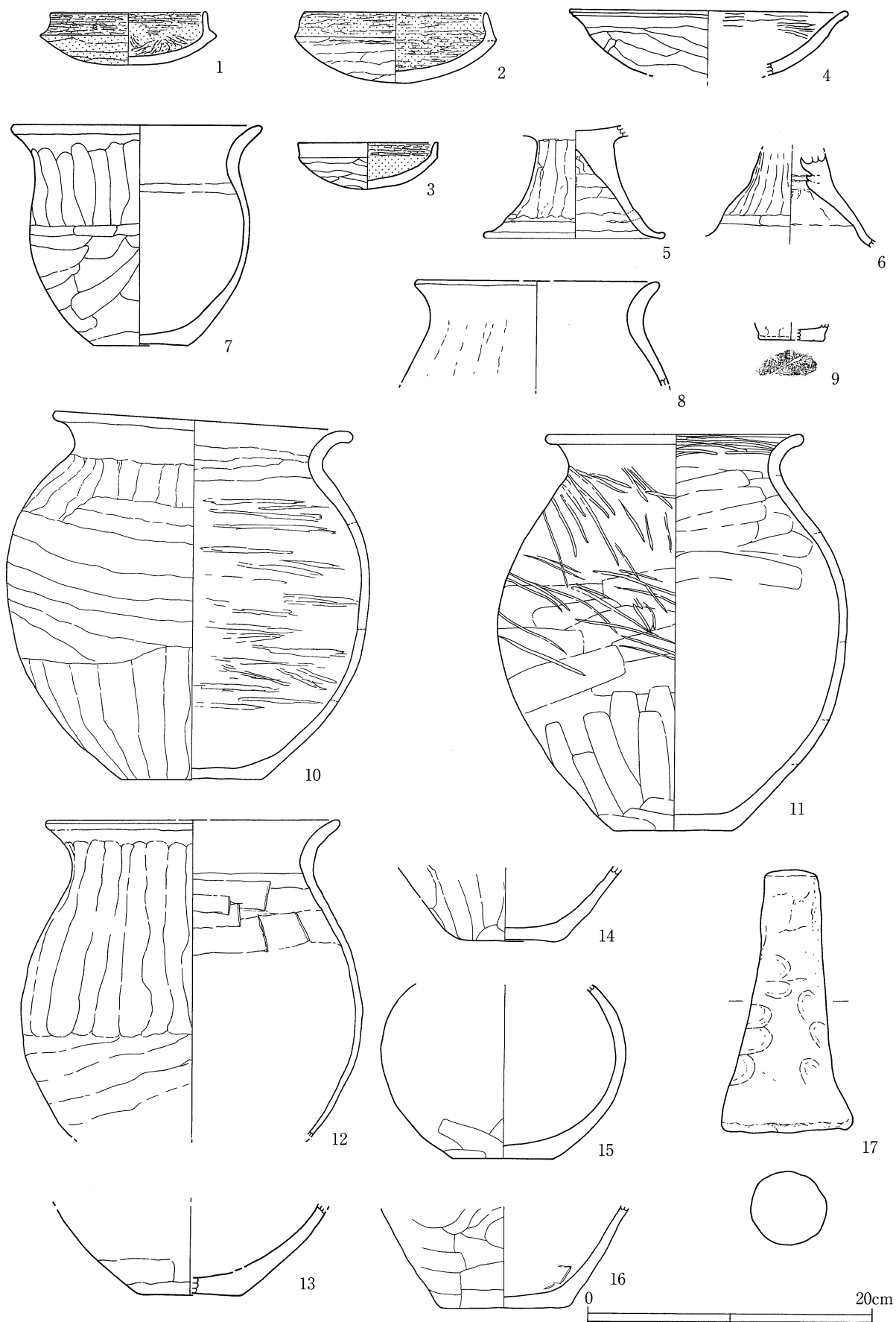
第12図 09D 遺構実測図 (1)



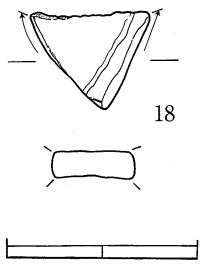
第13図 09D 遺構実測図 (2)

14図 13	土師器 甕	底径 7.4 遺存高 6.5	底部全周遺存	淡赤褐色	白色粒, 雲母	胴部外-下端横位へら削り なで整形 内-なで整形 二次焼成による両面剥離著しい。8と同一個体
14	土師器 甕	底径 7.0 遺存高 5.1	底部全周遺存	淡赤褐色	白色粒, 雲母	胴部外-下端縦位へら削り 二次焼成による内面剥離著しい。
15	土師器 甕	底径 7.2 遺存高 12.3	底部~胴下半全周遺存	暗橙褐色	石英, 長石 砂粒	胴部外-下端へら削り 二次焼成による内面剥離著しい。
16	土師器 甕	底径 8.9 遺存高 7.1	底部~胴下半1/2 遺存	茶褐色	雲母, 長石	胴部外-下端横位へら削り後下位斜位へら削り 内-へらなで 両面剥離著しい。
17	土製品 支脚	全長 18.6 上部幅 3.8	完形 基底幅 9.3	橙褐色	白色粒, 長石	なで整形 重さ807.5g 指頭痕が顕著。基底部 二次焼成によりもろい。
15図 18	土製品 土器片	上辺 3.2 厚さ 0.6	完形	外暗黒灰色 内暗褐色	赤色粒	重さ5.7g 土師器甕上半部片の再利用品 二辺において磨り跡顕著。

第5表 09D 遺物観察表 (2)



第14图 09D 出土遺物 (1)



第15図 09D 出土遺物 (2)

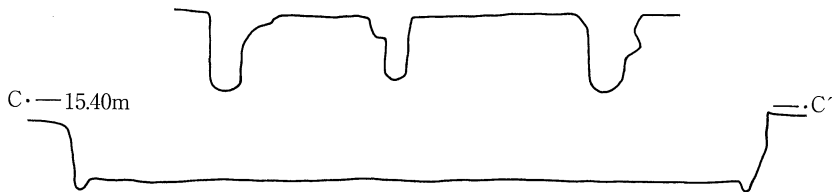
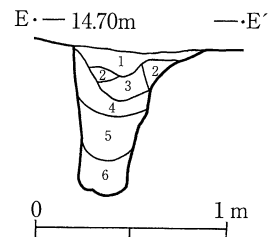
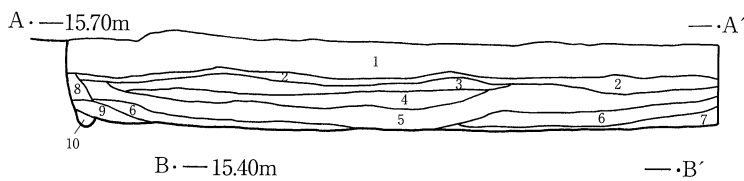
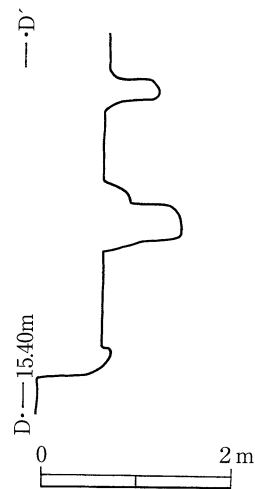
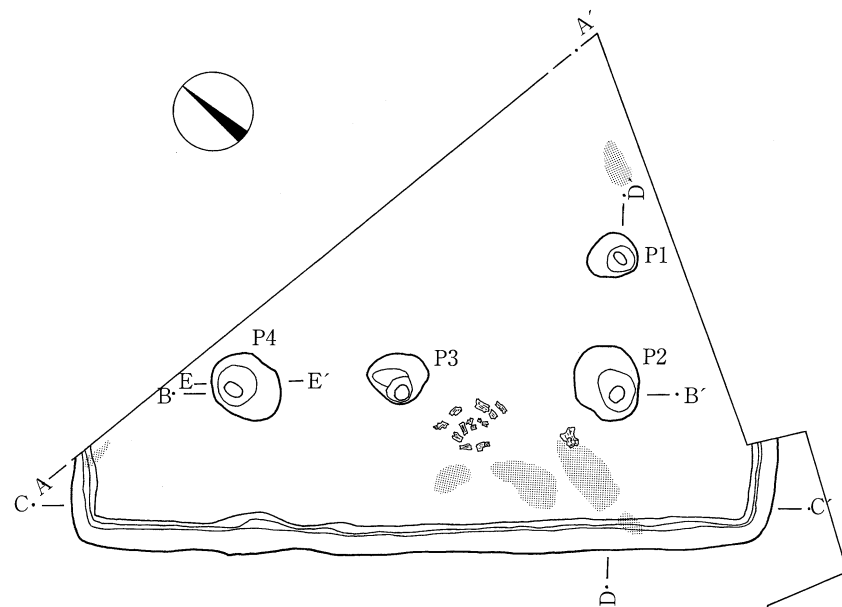
19D住居跡 (第16.17 図 写真図版4.5.15)

調査区北東コーナーのDⅢ-5グリッドに位置し、主軸方位はN-42°-W、平面形は調査区外に遺構が延びているため不明だが、一辺7.1mの方形と想定され、壁高は65~73cmである。周溝は調査区内で周回しており、全周すると想定される。規模は幅13~17cm、深さ11~13cmを測る。柱穴はP1~4を検出している。柱間寸法はP1-2間で1.45m、P2-3間で2.25m、P3-4間で1.8mとばらつきが見られる。深さはP1-50cm、P2-80cm、P3-70cm、P4-85cmを測る。出入り口は南東壁側に想定される。カマドは調査区域外だが、他の遺構を考慮すると北西壁側に想定される。床面はハードロームを掘り込んで、凹凸面にロームを充填して床面としている。覆土は褐色土を主体としており、3層以下においてロームブロック混じりの土層が堆積していることから人為的な埋め戻しと考えられる。

遺物は2,3がP3.4掘り方上層から出土していることから、住居廃絶時に近い時期と考えられる。その他は覆土上層からの出土例が多いが、離れた地点や出土レベルの異なる等の接合が4,11に見られることから廃絶時に近い段階の遺物と考える。その他、焼土・炭化材が壁際に近い地点から出土している。またP4内上層に焼土の堆積が見られることから、柱抜き取り後の堆積と想定される。よって、住居廃絶時の行為として部材を燃やしたことが伺われよう。

第6表 19D 遺物観察表 (1)

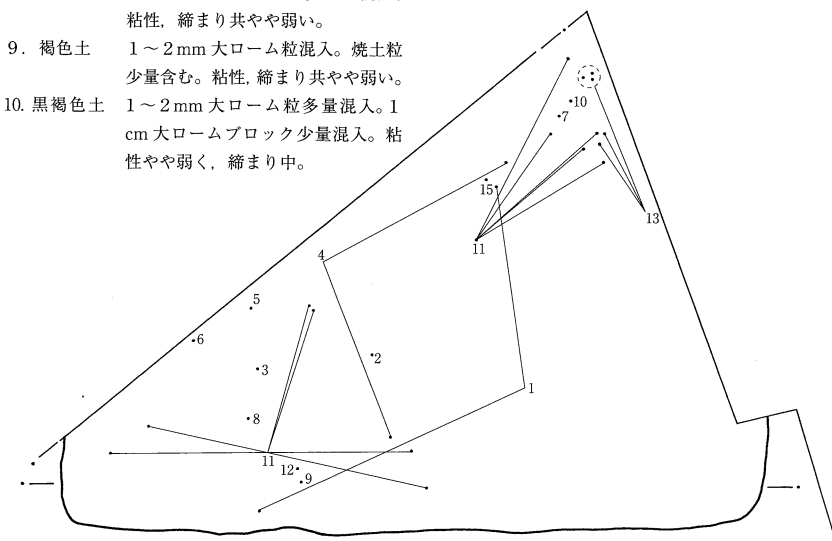
挿図番号	器種	寸法 (cm)	遺存度	色調	胎土	手法上の特徴
17図	1 須恵器 蓋坏	口径 14.0 遺存高 2.9	口辺部1/3 受部径 11.4	淡青灰色	白色粒多含	体部外面に工具による擦痕と見られる浅い沈線がめる。
2	土師器 坏	口径 13.1 器高 4.6	完形	外 橙褐色 内 漆黒色	白色粒多含 赤色粒少量	口辺部内外-横位ヘラ磨き 体部外-横位ヘラ削り 内-放射状ヘラ磨き 炭素吸着による黒色処理
3	土師器 坏	口径 11.5 器高 5.9	口辺~体部 1/2遺存	外 暗褐色 内 黒褐色	雲母,石英 長石,砂粒	口辺部内外-横なで 体部外-横位ヘラ削り 内-ヘラなで
4	土師器 坏	口径 11.8 器高 3.1	口辺~体部 1/2遺存	暗茶黒褐色	白色粒多含 赤色粒少量	口辺部内外-横位ヘラ磨き 体部外-横位ヘラ削り 内-斜位ヘラ磨き 炭素吸着による黒色処理
5	土師器 坏	口径 17.3 遺存高 3.1	口辺~体部 1/4遺存	黒茶褐色	白色粒,長石	内外-ヘラ磨き 体部内-下位放射状ヘラ磨き 両面漆仕上げによる黒色処理か
6	土師器 坏	口径 11.8 遺存高 3.3	口辺~体部 1/8遺存	外 茶褐色 内 黒茶褐色	白色粒	口辺部外-横位ヘラ磨き 体部外-斜位ヘラ削り後稜部分横位ヘラ削り 内-横位ヘラ磨き 内面炭素吸着による黒色処理
7	土師器 坏	口径 - 器高 -	口辺~体部 1/10遺存	赤褐色	白色粒,石英 長石	口辺部内外-横なで 体部外-ヘラ削り調整 赤彩は体部外面に及ぶ。口縁部内側に浅い凹みがめぐる。
8	土師器 高坏	底径 - 遺存高 5.1	脚部全周	黒茶褐色	白色粒多含 赤色粒	脚部外-縦位ヘラ削り
9	土師器 高坏	底径 - 遺存高 5.8	脚部全周	暗褐色	白色粒,雲母	脚部外-縦位ヘラ削り 内-ヘラなで
10	須恵器 甕	口径 20.6 遺存高 4.9	口辺~胴部 1/8遺存	淡青灰色~淡橙 灰色	石英,長石 白色粒	胴部外-縦位ヘラ削り 内-ヘラなで 口縁部末端玉縁状 武蔵産
11	土師器 甕	口径 14.1 遺存高 10.0	口辺部全周	茶褐色	小礫,白色粒	口辺部-横なで 胴部外-斜位ヘラ削り 内-ヘラなで 内面火熱による剥離著しい。
12	土師器 甕	口径 13.9 遺存高 5.4	口辺部1/5	茶褐色	赤色粒 白色 粒	口辺部-横なで 胴部外-横位ヘラ削り 内-ヘラなで
13	土師器 甕	底径 7.2 遺存高 12.8	胴部~底部 1/8遺存	淡橙褐色	石英多含 白 色粒	胴下半部外-縦位ヘラ磨き 内面剥離著しい。



- 8. 褐色土 1~3mm 大ローム粒多量に混入。粘性、縮まり共やや弱い。
- 9. 褐色土 1~2mm 大ローム粒混入。焼土粒少量含む。粘性、縮まり共やや弱い。
- 10. 黒褐色土 1~2mm 大ローム粒多量混入。1cm 大ロームブロック少量混入。粘性やや弱く、縮まり中。

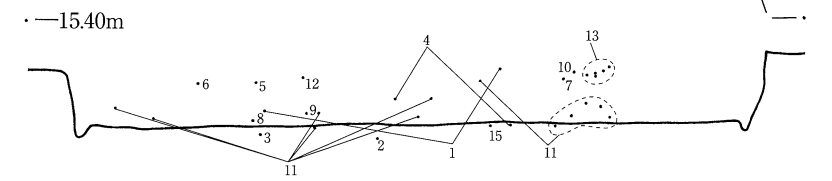
19D 土層説明

- 1. 表土 褐色土主体。
- 2. 暗褐色土 1~2mm 大ローム粒混入。粘性弱く、縮まりやや弱い。
- 3. 褐色土 1~3mm 大ローム粒混入。2~3cm 大ロームブロック少量混入。粘性弱く、縮まり中。
- 4. 暗褐色土 1~3mm 大ローム粒混入。1~3cm 大ロームブロック微量混入。粘性弱く、縮まり中。
- 5. 暗褐色土 1~3mm 大ローム粒混入。2~4cm 大ロームブロック少量混入。粘性弱く、縮まり中。
- 6. 黒褐色土 1~2mm 大ローム粒混入。3cm 大ロームブロック微量混入。粘性弱く、縮まり中。
- 7. 褐色土 1~2mm 大ローム粒混入。粘性弱く、縮まりやや弱い。

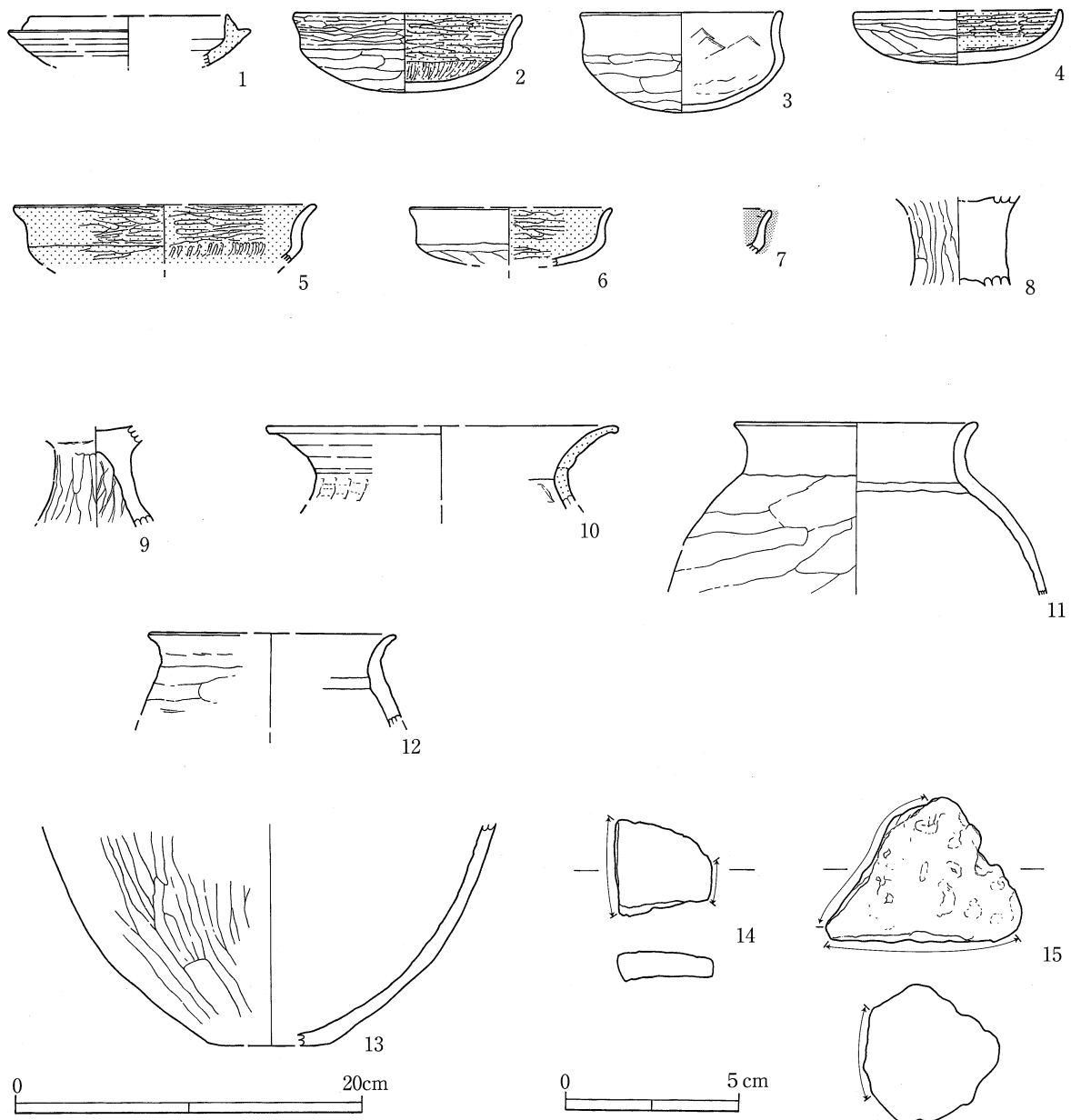


19D E-E' 間土層説明

- 1. 暗褐色土 1~2mm 大のローム粒を多く含む。1~3mm 大焼土粒混入。炭化物混粘性中。縮まりやや弱い。
- 2. 暗赤褐色土 暗褐色土に焼土粒をまんべんなく含む。粘性、縮まり共やや弱い。
- 3. 赤褐色土 焼土中に暗褐色土が斑点状に含まれる。炭化物含む。粘性弱く、縮まり中。
- 4. 暗褐色土 1~2mm 大のローム粒を多量含む。焼土粒混入。粘性やや弱く、縮まり中。
- 5. 暗褐色土 1~3mm 大のローム粒を多量含む。3~5mm 大のロームブロック混入。粘性強く、縮まりかなり弱い。
- 6. 暗褐色土 1~3mm 大のローム粒を多量含む。3~5mm 大のロームブロック混入。粘性強く、縮まり5層より弱い。



第16図 19D 遺構実測図



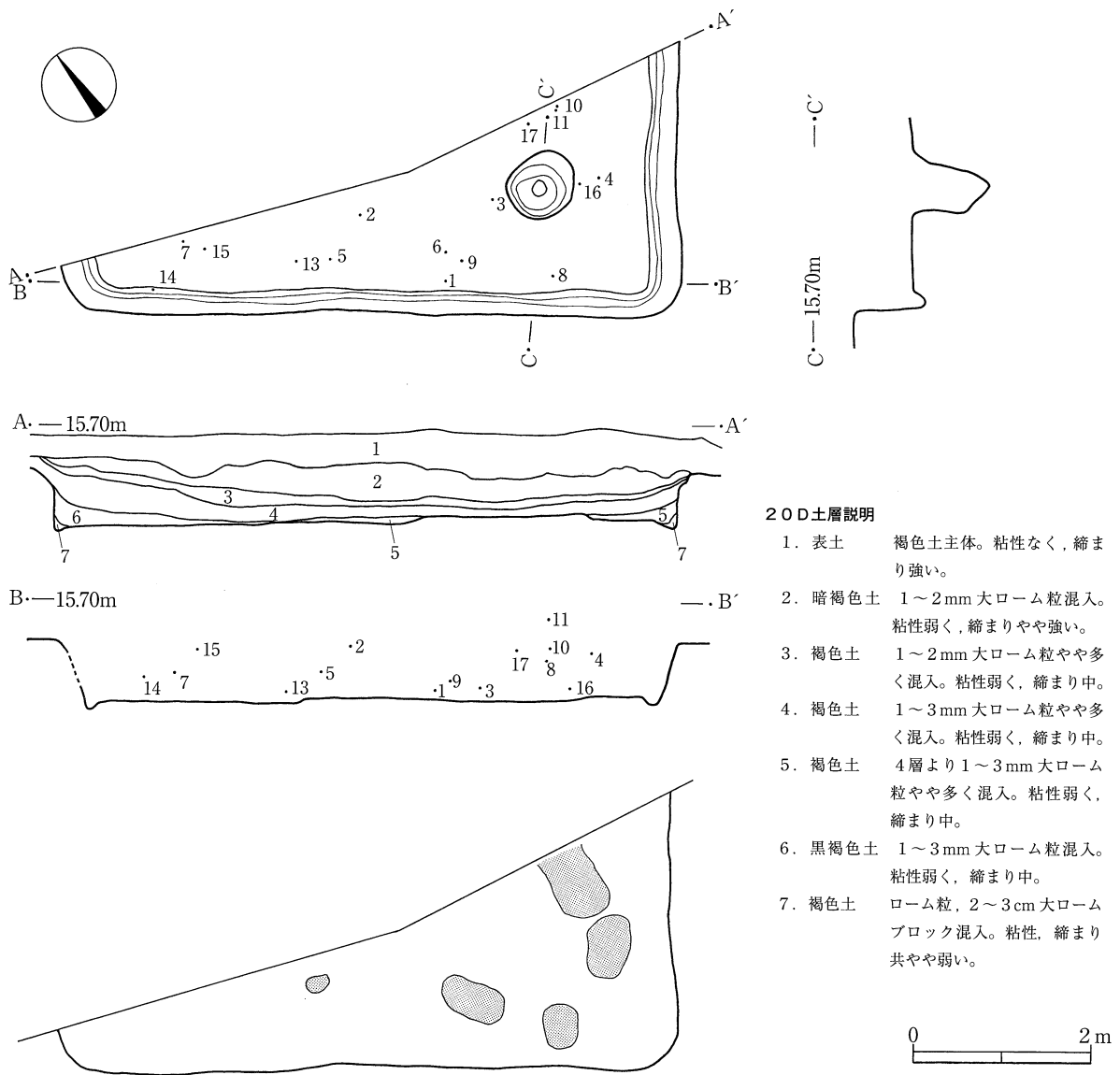
第17図 19D 出土遺物

第7表 19D 出土遺物 (2)

17図 14	土製品 土器片	全長 幅	2.8 2.8	完形	淡橙褐色	白色粒	土師器坏体部再利用品 二辺において磨り跡顕著。 重さ7.1g
15	軽石	縦長4.2 横長5.6 重さ13.0g	灰白色 二面において磨り跡顕著。				

20D住居跡 (第18.19図 写真図版5.16)

調査区北東コーナーのCⅢ-13 グリッドに位置し、主軸方位はN-50°-W、平面形は調査区外に遺構が延びているため不明だが、一辺6.75mの方形と想定され、壁高は60~65cmである。周溝は調査区内で周回しており、全周すると想定される。規模は幅20cm、深さ10~13cmを測る。柱穴はP1のみを検出している。深さは85cmを測る。出入口は南東壁側に想定される。カマドは調査区域外だが、他の遺構を考慮すると北西壁側に想定される。床面はハードロームを掘り込んで、凹凸面にロームを充填して床面としている。覆土は褐色土を主体としており、3層以下においてローム粒混じりの土層が堆積し



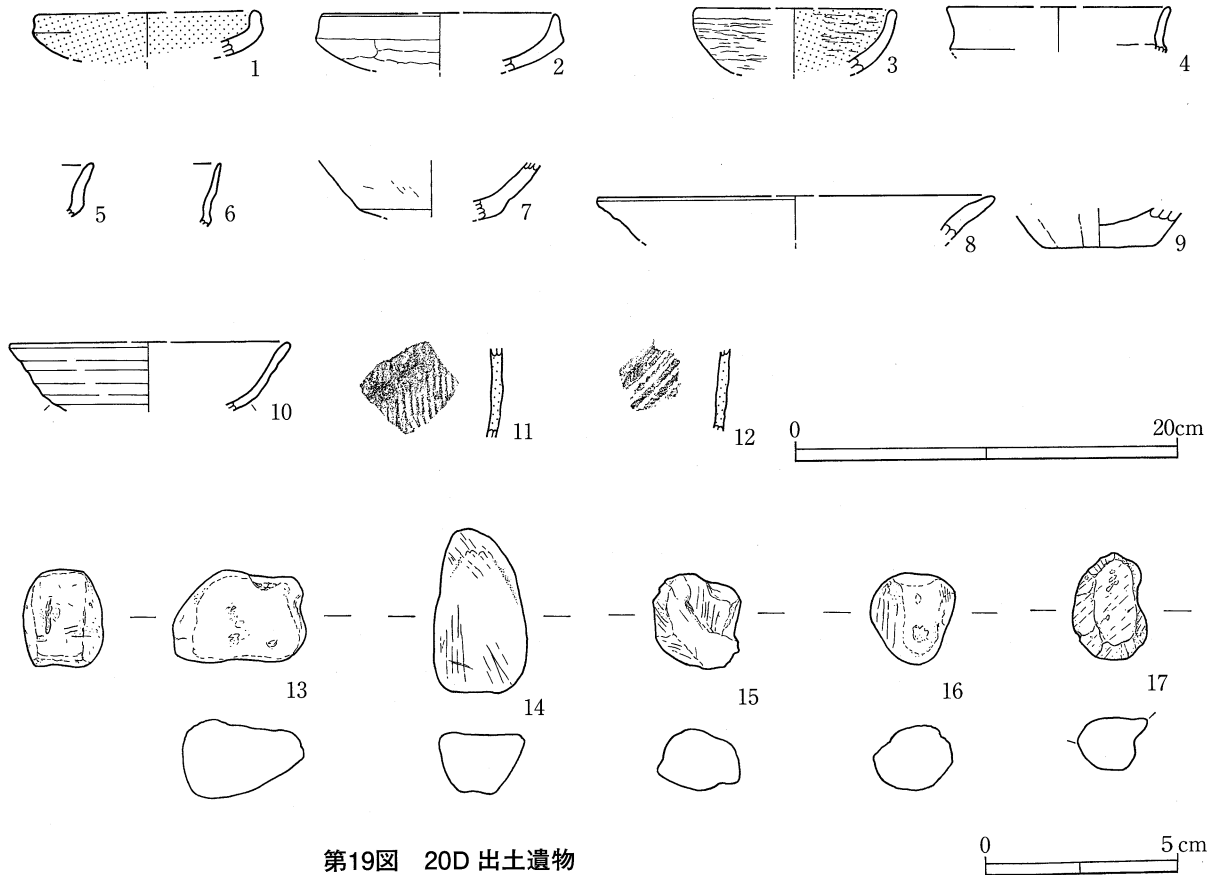
第18図 20D 遺構実測図

ていることから人為的な埋め戻しと考えられる。

遺物は古墳時代中期、後期、平安時代の遺物が混在している。床面直上から出土している遺物は古墳時代後期が多い。住居の形態からも同時期に想定される。擦痕の見られる軽石も出土レベルから本時期の遺物に想定される。その他、焼土がピット周辺から出土している。

第8表 20D 遺物観察表 (1)

挿図番号	器種	寸法 (cm)	遺存度	色調	胎土	手法上の特徴
19図 1	土師器 坏	口径 11.5 遺存高 2.3	口辺~体部 1/4遺存	淡黒灰色	雲母、砂粒	口辺部外-横なで 体部外-ヘラ削り後なで 内-なで整形 炭素吸着による両面黒色処理
2	土師器 坏	口径 13.2 遺存高 3.0	口辺~体部 1/5遺存	淡褐色	白色粒、雲母	口辺部外-横なで 体部外-横位ヘラ削り 内-なで整形
3	土師器 坏	口径 10.4 遺存高 3.4	口辺~体部 1/5遺存	外-茶褐色 内-黒茶褐色	白色粒、雲母	口辺部外-横なで 体部内外-横位ヘラ磨き 炭素吸着による内面黒色処理



第19図 20D 出土遺物

19図	4	土師器 坏	口径 遺存高	11.8 2.3	口辺~体部 1/6遺存	淡茶褐色	白色粒, 雲母	口辺部内外-横なで
	5	土師器 坏	口径 器高	- -	口辺部	淡茶褐色	白色粒, 雲母	口辺部外-横なで 体部外-ヘラ削り 内-横位ヘラ磨き
	6	土師器 坏	口径 器高	- -	口辺部	外-淡褐色 内-淡茶褐色	白色粒, 雲母	口辺部外-横なで 体部外-ヘラ削り 内-横位ヘラ磨き
	7	土師器 高坏	口径 遺存高	- 3.0	坏体部1/3遺 存	外-暗褐色 内-淡茶褐色	白色粒, 雲母	内外なで整形
	8	土師器 甕	口径 遺存高	21.0 2.2	口辺部1/5遺 存	淡橙褐色	白色粒, 雲母 砂粒	口辺部内外-横なで
	9	土師器 甕	底径 遺存高	6.0 1.8	底部1/2遺 存	外-淡茶褐色 内-橙褐色	白色粒	胴部下位外-縦位ヘラ削り 内-なで整形
	10	土師器 坏	口径 遺存高	14.8 3.5	口辺~体部 1/5遺存	淡橙褐色	黑色粒, 雲母	ロクロ使用 体部下端-回転ヘラ削り調整
	11	須恵器 甕		-	胴部一部	淡赤褐色	白色粒, 雲母 黑色粒, 砂粒	胴部外-平行叩き目文
	12	須恵器 甕		-	胴部一部	淡青灰色	白色粒主体	胴部外-平行叩き目文
	13	軽石	縦長2.4 横長3.5 重さ5.5g	左側面に横位の細かな擦痕がみられる。				
	14	軽石	縦長4.3 横長2.4 重さ5.1g	上面に縦位の擦痕がみられる。				
	15	軽石	縦長2.5 横長2.1 重さ2.0g	上面に縦位の擦痕が, 左側面に斜位~横位の細かな擦痕がみられる。				
	16	軽石	縦長2.4 横長2.1 重さ2.5g	左側面に縦位の擦痕がみられる。				
	17	軽石	縦長2.8 横長2.0 重さ2.5g	上面及び側面全周に斜位の擦痕がみられる。				

第9表 20D 遺物観察表 (2)

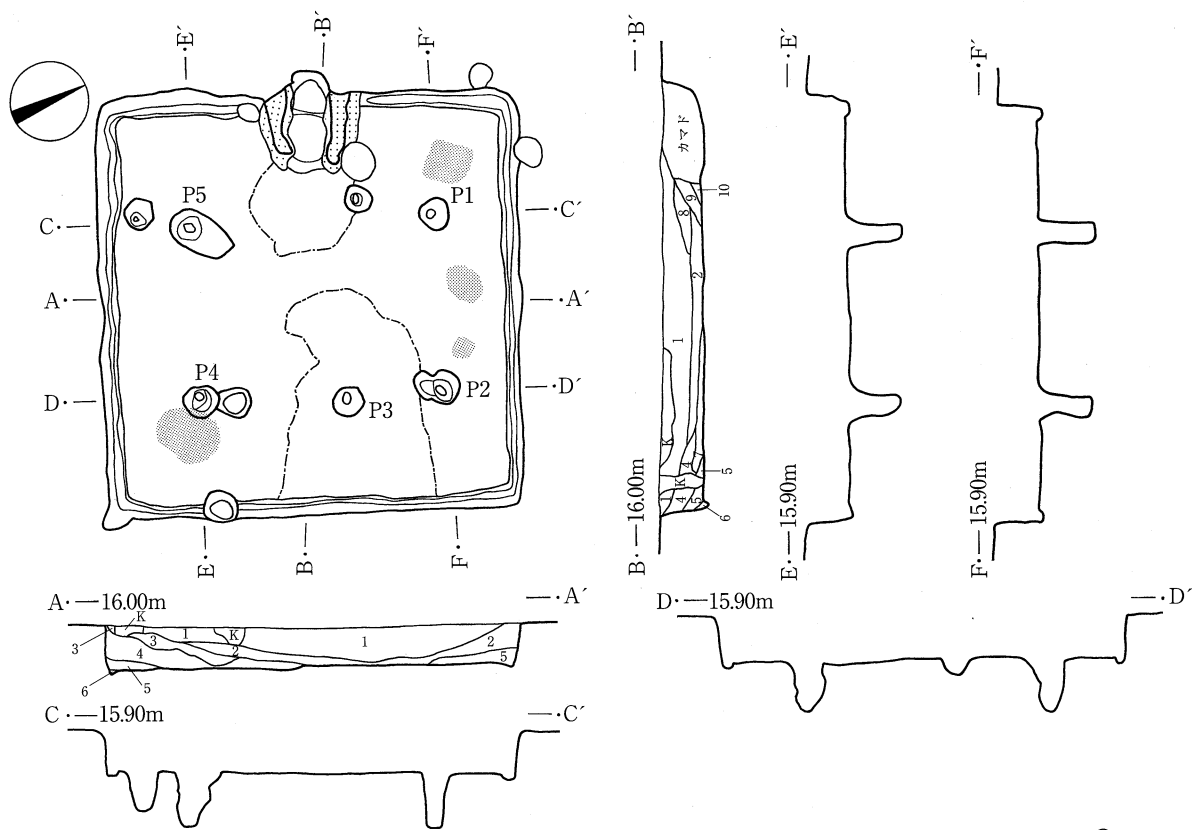
23D住居跡（第20.21.22図 写真図版8.18）

調査区中央のBⅢ-15グリッドに位置し、主軸方位はN-72°-W、平面形は4.5mのほぼ方形で、壁高は40~45cmである。周溝は全周するが、カマド両袖直下において立ち上がっている。規模は幅15cm、深さ5~8cmを測る。主柱穴は4本で、柱間寸法はP1-2, P4-5間で1.85m等間、P2-4, P1-5間で2.55m等間である。深さはP1-60cm, 2-55cm, 3-15cm, 4-55cm, 5-55cmを測る。出入り口はカマド対面のP3が該当する。カマドは西壁中央に位置し、袖部が良好な状態で遺存している。また、天井部は遺存していなかったが、覆土の状況から煙道部の範囲を長軸24cm、短軸18cmの楕円形と特定できた。火床部は袖部中程で7~8cmの焼土、焼土ブロック、ロームブロックが堆積している。煙道部は燃焼部奥で25°の角度をもって緩く立ち上がり、更に40°の角度で立ち上がっている。袖部の構築は、粘度の高い褐色粘土を芯として、淡褐色砂質粘土を積み重ねている。床面はハードロームを掘り込んで、凹凸面にロームを充填して平坦面とした地床である。硬化面は出入り口側の東壁際からP3の延長上とカマド前面に見られる。覆土は、レンズ状堆積の黒色土~暗褐色土で、自然埋没層と考えられる。4層は土堤の埋没土であろうか。

遺物は覆土中からの出土が多い。3, 4, 11, 12は数地点に離れて、しかも出土レベルが上層から下層にわたっている特異性をもっている。1, 2, 6は床面直上の出土である。また、P1.2の壁際とP4に接して焼土が検出された。

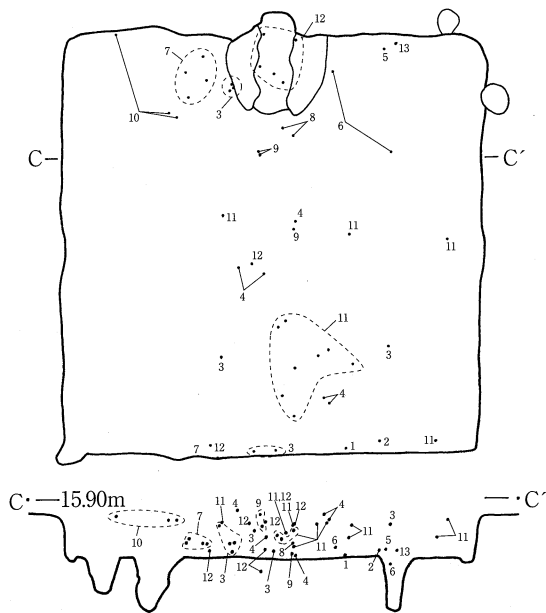
第10表 23D 遺物観察表

挿図番号	器種	寸法 (cm)	遺存度	色調	胎土	手法上の特徴
22図 1	須恵器 蓋坏	口径 11.3 器高 4.3	口辺1/3欠	外暗黄灰色(自然釉)内青灰色	ち密	天井部外-回転ヘラ削り調整。関東産
2	土師器 坏	口径 12.7 器高 4.3	ほぼ完形	外漆黒色 内暗褐色	白色粒, 雲母	外-横位ヘラ削り 内-なで及び横位, 縦位ヘラ磨き 漆仕上げによる両面黒色処理か
3	土師器 坏	口径 13.9 遺存高 4.5	口辺~体部 1/2遺存	淡橙褐色一部黒斑	白色粒, ごく少量の雲母	口辺~体部外-横位ヘラ削り 内-なで整形
4	土師器 坏	口径 15.0 遺存高 5.2	口辺~体部 1/4遺存	外茶褐色 内黒灰色	白色粒	口辺部内外-横なで 体部外-横位ヘラ削り 内-縦位ヘラ磨き 漆仕上げによる両面黒色処理か
5	土師器 鉢	口径 17.0 遺存高 9.3	口辺~体部 1/5遺存	外橙褐色 内黒灰色~暗褐色	白色粒, 雲母 砂粒	口辺部内外-横なで 体部外-横位ヘラ削り 内-ヘラなで
6	土師器 高坏	脚部径 7.9 遺存高 5.9	脚部~体部 中位ほぼ全周	暗赤褐色	白色粒, 赤色粒, 長石	坏部内-縦位ヘラ磨き後横位ヘラ磨き 坏部~脚部外-横位及び縦位ヘラ削り
7	土師器 高坏	脚部径 - 遺存高 5.2	坏部下位~ 脚部1/2	外淡橙褐色 内黒灰色~橙褐色	小礫, 雲母	脚部外-縦位ヘラ削り 内-ヘラなで 坏部内 外なで整形 外面赤色塗彩
8	土師器 小型甕	遺存高 11.8	底部~胴部 1/4遺存	外淡橙褐色 内暗褐色	白色粒, 赤色粒, 雲母	丸底に近い小型甕ないし鉢に想定される。 胴部外-縦位ヘラ削り 内-ヘラなで
9	土師器 鉢?	遺存高 6.0	底部~胴部 1/8遺存	外淡褐色 内暗褐色	白・赤・黒色粒, 雲母	丸底に近い小型甕ないし鉢に想定される。 胴部外-縦位ヘラ削り 内-なで整形
10	土師器 手づくね	口径 7.4 器高 3.5	口辺~体部 3/4遺存	茶褐色	白色粒, 少量の赤色粒, 雲母	大ぶりの手づくね 体部外-横位ヘラ削り 内-横位なで
11	土師器 甕	胴部径 36.8 遺存高 26.3	胴部1/3周	外淡褐色一部黒斑 内淡褐色	白色粒, 少量の赤色粒, 雲母	胴部外-縦位ヘラ削り後なで整形 内面の剥離著しい。
12	土師器 甕	口径 22.2 遺存高 33.2	口辺~胴部 1/2遺存	外淡褐色 内淡褐色~茶褐色	白色粒多含, 長石, 雲母	口辺部-横なで 胴部外-横位~斜位ヘラ削り 内-ヘラなで
13	土師器 甕	底径 7.2 遺存高 1.9	底部全周	外淡茶褐色 内茶褐色	白色粒, 砂粒 長石	内外面なで整形



23D土層説明

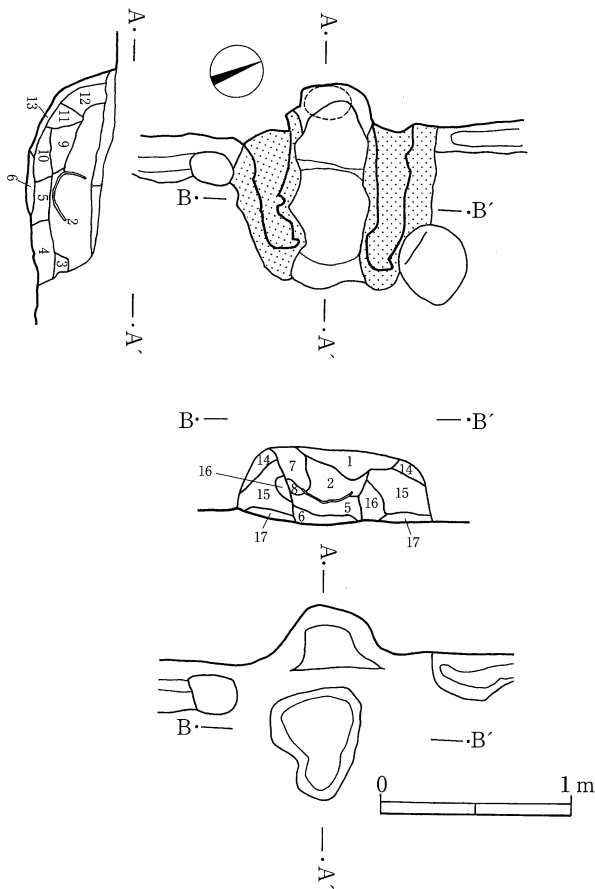
1. 黒茶褐色土 2~5mm大ローム粒やや多く混入。10~15mm大ローム粒まれに混入。粘性なく、締まりあり。
2. 茶褐色土 2~3mm大ローム粒やや多く混入。粘土砂混入、黒色土斑点状に混入
3. 黒色土 1~2mm大ローム粒少量混入。さらさらしている。
4. 褐色土 ローム、暗褐色土を主に、10~20mm大ロームブロック混入。粘性、締まりあり。
5. 黒色土 ローム粒少量混入。粘性弱く、締まりあり。
6. 褐色土 周溝覆土。ローム主体に黒色土若干混入。粘性あり。
7. 暗褐色土 ややまとまってローム粒混入。締まりあり。
8. 茶褐色土 粘土砂、1~2mm大ローム粒少量混入。粘性弱い。
9. 茶褐色土 粘土砂、10mm大ローム粒少量混入。
10. 黒色土 10mm大ローム粒、粘土砂ごく少量混入。粘性弱い。



第20図 23D 遺構実測図 (1)

24D住居跡 (第23.24.25.26 図 写真図版9.18.19)

調査区中央のBⅢ-13.14グリッドに位置し、主軸方位はN-34°-W、平面形は5.2mのほぼ方形で壁高は35~40cmである。周溝は全周するが、カマド両袖真下において立ち上がっている。規模は幅10cmで深さ5~10cmを測る。主柱穴は4本で、柱間寸法はP1-2, P5-6間で2.3m等間、P2-5, P1-6間で2.2m等間である。深さはP1-45cm, 2-35cm, 3-25cm, 4-23cm, 5-52cm, 6-33cmを測る。出入り口はカマド対面のP3, 4が該当する。カマドは北西壁中央に位置し、袖部と天井部の一部が良好な状態で遺存してい



23Dカマド土層説明

1. 暗褐色土 淡褐色砂質粘土主にロームブロック混入。
2. 淡茶褐色土 淡褐色砂質粘土主にローム粒混入。
3. 暗褐色土 淡褐色砂質粘土, 黒色土混合層。
4. 黒褐色土 2~3mm 大焼土ブロック, ロームブロック混入。
5. 暗赤褐色土 4層類似。焼土ブロックの混入多い。
6. 褐色土 ローム, ロームブロック, 焼土粒
7. 淡茶褐色土 ローム, 淡褐色砂質粘土混合層。カマド構築材。
8. 暗赤褐色土 黒色土, 焼土化砂質粘土混合層。
9. 暗褐色土 黒色土, 焼土粒, 淡褐色砂質粘土混合層。
10. 褐色土 ローム主に, 淡褐色砂質粘土混入。
11. 暗赤褐色土 焼土ブロック, 黒色土, 焼土化砂質粘土混合層。
12. 暗褐色土 ローム, 焼土ブロック, 淡褐色砂質粘土混合層。
13. 赤褐色土 焼土化砂質粘土, ローム混合層。
14. 褐色土 ローム, 淡褐色砂質粘土混合層。
15. 淡褐色砂質粘土。
16. 暗赤褐色土 焼土ブロック, 黒色土, 焼土化砂質粘土混合層。
17. 褐色粘土

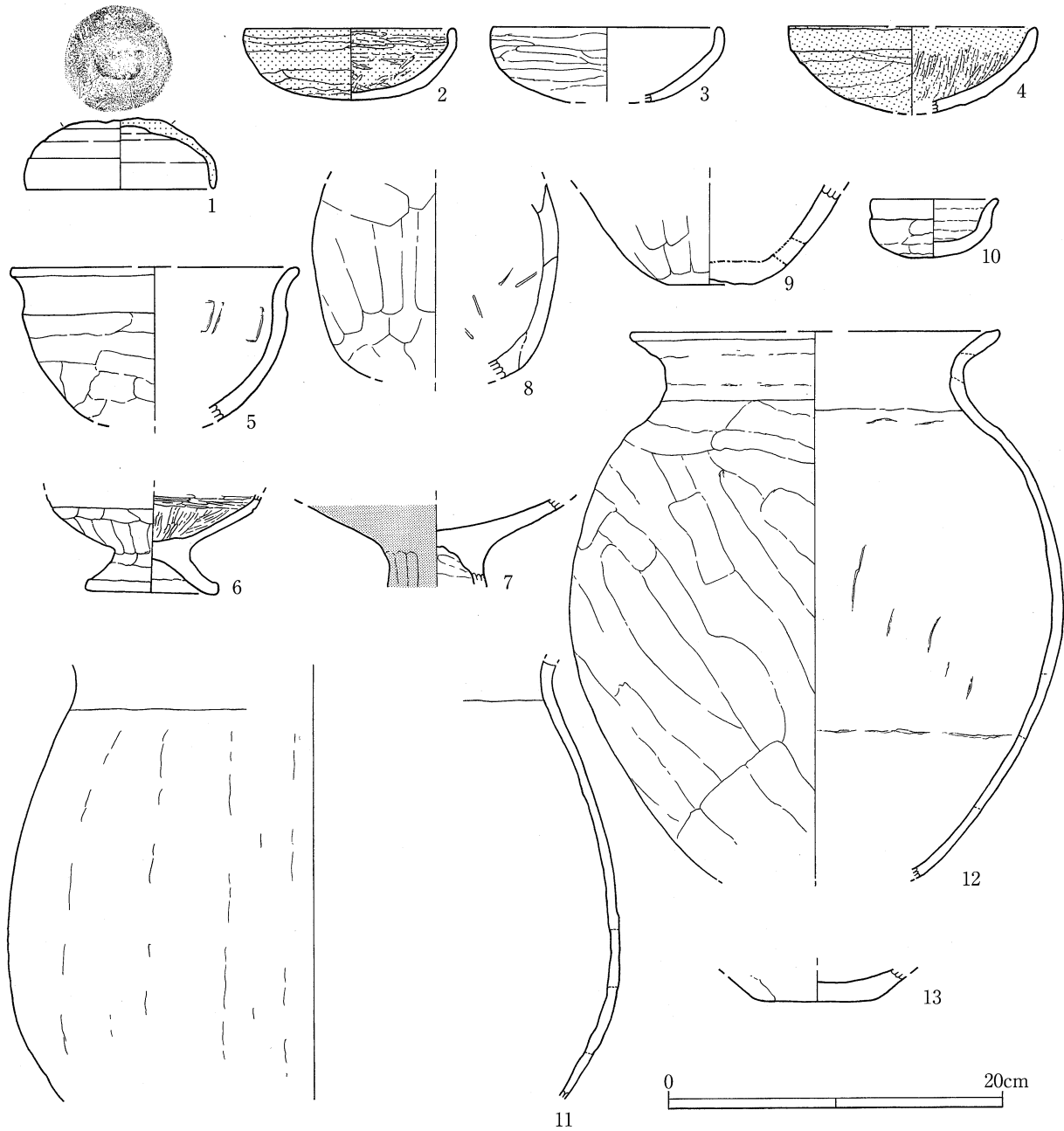
第21図 23D 遺構実測図 (2)

る。火床部は5層下に遺存するが、使用部位の特定はできなかった。袖内側の13層が強く焼けていることから、使い込まれた痕跡が伺われる。灰、焼土の堆積は見られないことから、カマド内の清掃処理後に廃絶していったと考えられる。煙道部は燃焼部奥で30°の角度をもって緩く立ち上がり、一旦フラットとなり、更に30°の角度で立ち上がっている。袖部の構築は、粘度の高い淡褐色粘土を芯として、淡褐色砂質粘土を積み重ねている。更に19層を上部、側面に補強している。床面はハードロームを掘り込んで、凹凸面にロームを充填して平坦面とした地床である。硬化面はP5と住居コーナー部にかけてと、東壁際側に見られる。覆土は、レンズ状堆積の黒色土~褐色土で、自然埋没層と考えられる。土堤と考えられる土層(3~7.10.12~15層)の堆積が見られる。

遺物は図示したほぼ全体が、床面直上ないしそれに近いレベルの出土である。カマド袖横、前面を中心として東壁側からの出土が多い。注目すべき点はカマド両袖脇の遺物出土状態である。右袖脇では28, 29の甕と34の支脚が横位の状態で、左袖脇では31の甕内から3, 20, 4, 8, 21, 10の坏が重ねられた状態で出土している。甕は本来直立の状態と想定されるが、その背後に35の支脚が立て掛けられている。これらが生活痕跡としての遺棄状態なのか、或いは住居廃絶時の儀式としての行為なのかは判然としない。

第11表 24D 遺物観察表 (1)

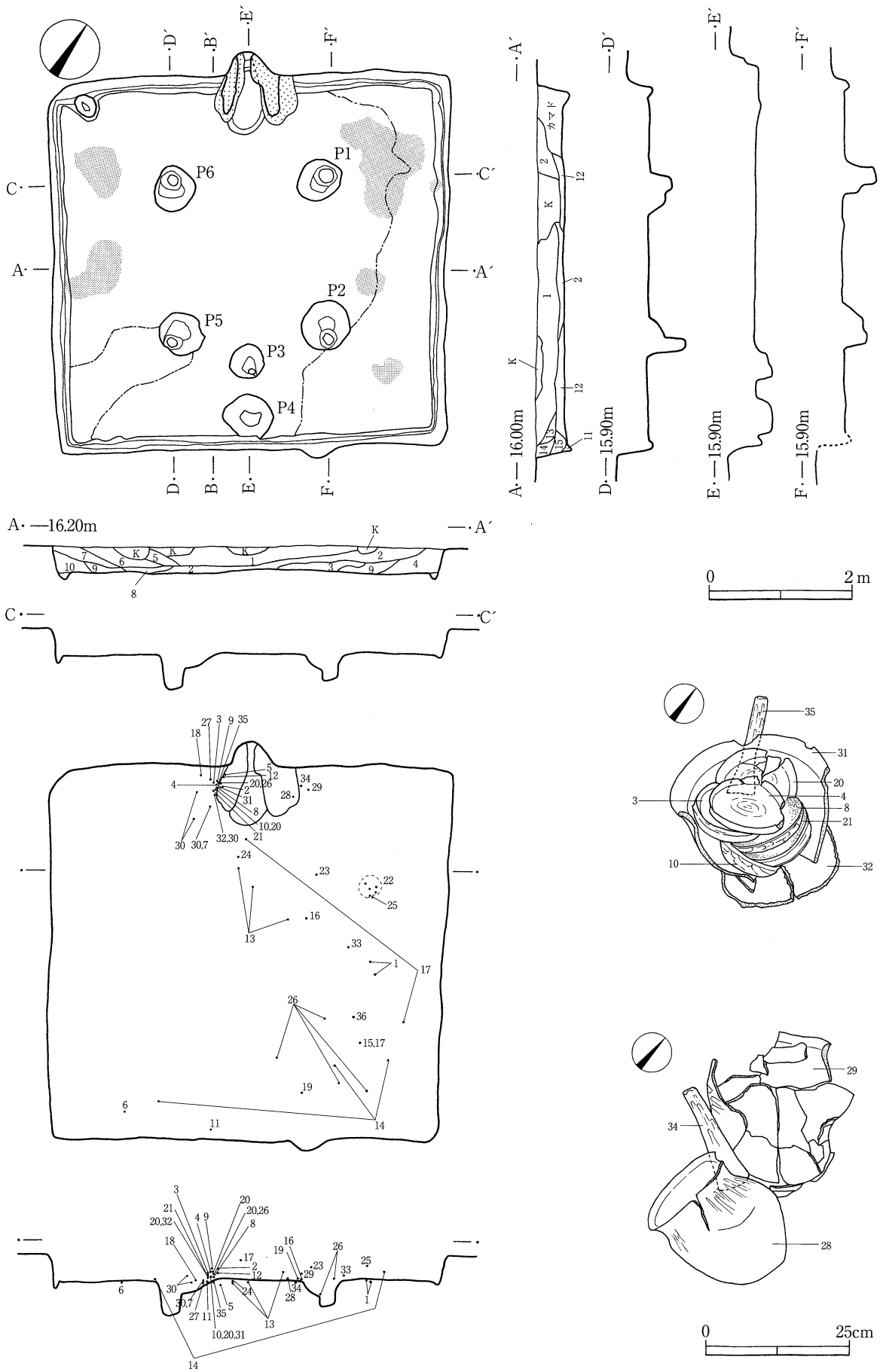
挿図番号	器種	寸法 (cm)	遺存度	色調	胎土	手法上の特徴
25図	1 土師器 坏	口径 12.7 器高 4.0	口縁部一部 欠	外暗褐色 内淡茶褐色	白色粒, 長石	口辺部内外-細かな横位ヘラ磨き 体部外-横位ヘラ削り 内-横位ヘラ磨き 内面にウロコ状の剥離が見られる。漆仕上げによる黒色処理が口辺中位と内面全体に見られる。



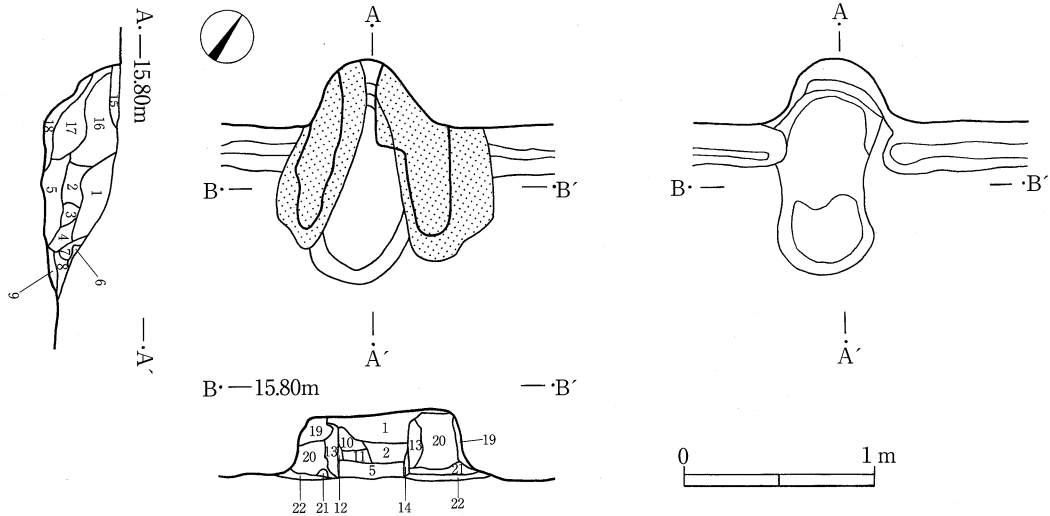
第22図 23D 出土遺物

25図	2	土師器 坏	口径 器高	12.0 4.0	口縁部一部 欠	外暗褐色 内茶黒色	黒色・白色・ 赤色粒	口辺部横なで 体部外-底部へら削り後横位へら削り 内-底部に粗いへら磨き 口縁端部内側に浅い凹線 炭 素吸着による内面黒色処理
	3	土師器 坏	口径 器高	12.0 4.6	ほぼ完形口 縁部一部欠	外暗褐色 内黒褐色	黒色・白色粒 石英,長石	口辺部体部内-細かな横なで 体部外-横位へら削り 炭素吸着による両面黒色処理
	4	土師器 坏	口径 器高	12.5 4.4	口縁部一部 欠	淡茶灰褐色	黒色・白色・ 赤色粒,砂粒	口辺部体部内-細かな横なで 体部外-横位へら削り 口縁端部内側に浅い凹線 炭素吸着による黒色処理か 口辺中位と内面全体
	5	土師器 坏	口径 器高	13.4 4.5	口縁部一部 欠	淡茶黄褐色	白色粒	口辺部外-横なで 内-横位へら磨き 体部外-横位へら削り 内-横位へら磨き
	6	土師器 坏	口径 器高	15.9 5.0	完形	外淡茶~赤茶褐 色 内淡茶褐色	白色粒,小礫 石英,雲母	口辺部内外-横なで 体部外-横位へら削り 内-へらなで 外面赤色塗彩か
	7	土師器 坏	口径 器高	13.5 4.7	口縁3/5 体部1/5	淡橙褐色	白色粒,石英 長石	口辺部外-横なで 体部外-横位へら削り 内-横位へら磨き

第12表 24D 遺物観察表 (2)



第23図 24D 遺構実測図 (1)



24D土層説明

1. 黒色土 2~5mm大ローム粒,10~20mm大ロームブロック混入。粘性なく,締まり普通。
2. 黒色土 1に比べロームの混入多い。締まっている。
3. 茶褐色土 ローム, 黒色土少量混入。粘性なく,締まっている。
4. 茶褐色土 粘性なく, 締まっている。10層類似。
5. 茶褐色土 1~2mm大ローム粒混入。粘性, 締まり共やや欠ける。
6. 黒茶色土 黒色土, ローム混合層。1~3mm大ローム粒混入。粘性, 締まり欠く。
7. 茶褐色土 黒色土少量混入。2~10mm大ローム点在。粘性なく, 締まっている。
8. 黒褐色土 2層類似。黒色土の混入やや多い。
9. 赤褐色土 暗褐色土, 焼土混合層。ローム少量混入。粘性弱い。
10. 暗褐色土 10mm大ローム点在。粘性弱く, 締まっている。
11. 褐色土 ロームブロック, 黒色土混合層。やや締まり欠く。
12. 暗褐色土 2~3mm大ローム粒,10~100mm大ロームブロック少量混入。締まる。
13. 黒褐色土 1層と14層の中間層。5mm大ローム点在。
14. 暗褐色土 13層類似。ローム粒混入。
15. 黒褐色土 1~3mm大ローム粒, 焼土粒少量混入。

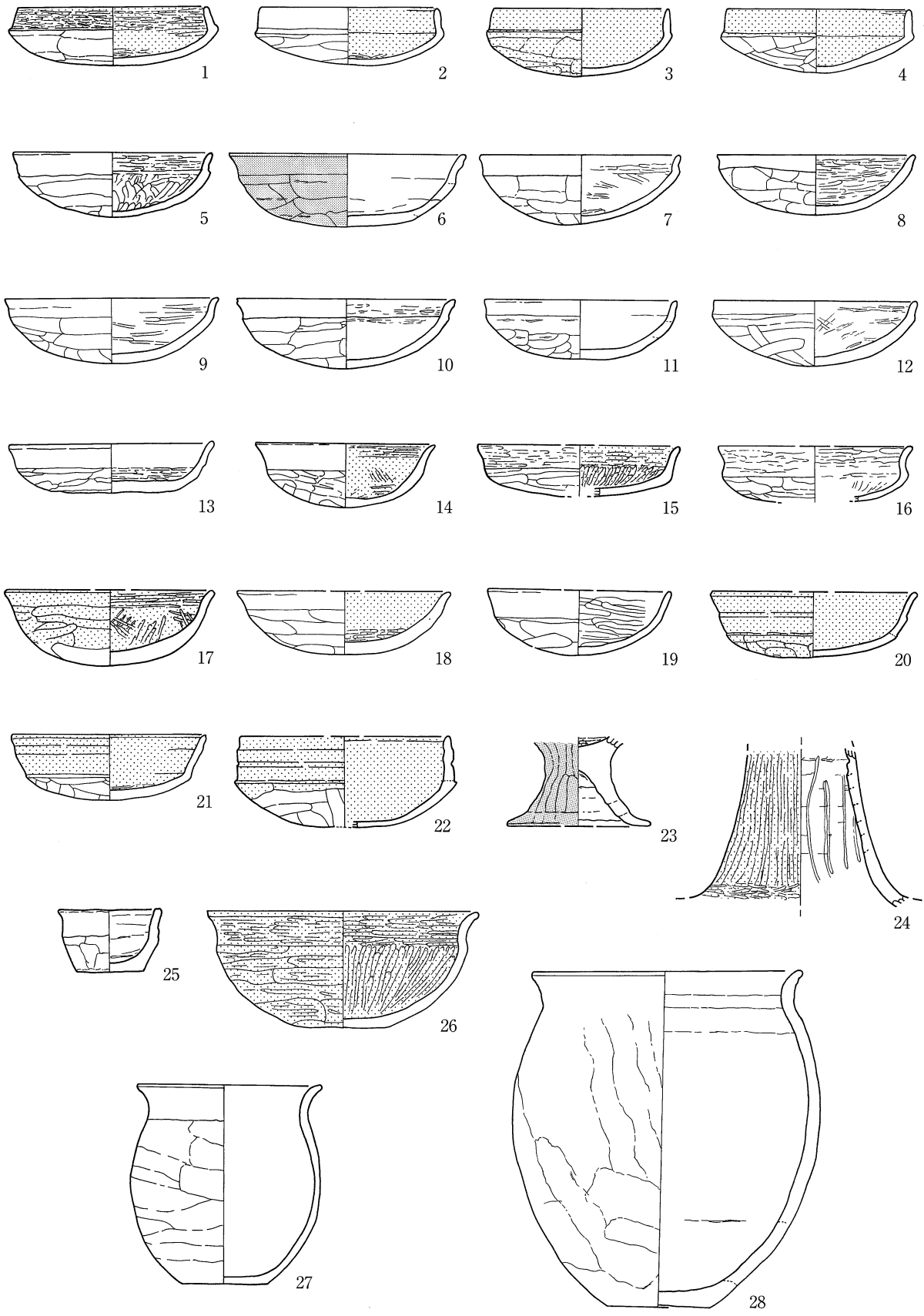
24Dカマド土層説明

1. 暗褐色土 3~4mm大ローム粒混入。焼土粒少量混入。
2. 暗褐色土 淡褐色砂質粘土, ロームブロック混入。
3. 暗赤褐色土 焼土化砂質粘土混入。
4. 暗褐色土 ローム, 黒色土混合層。
5. 暗褐色土 黒色土主に, 3mm大ローム粒, 焼土粒混入。
6. 淡暗褐色土 暗褐色土主に, 淡褐色砂質粘土混入。
7. 暗褐色土 黒色土, 淡褐色砂質粘土, 焼土粒混合層。
8. 暗褐色土 黒色土主にローム粒混入。締まっている。
9. 暗褐色土 ローム主に黒色土混入。締まっている。
10. 暗褐色土 淡褐色砂質粘土+暗褐色土。焼土粒混入。
11. 暗褐色土 5層類似。黒色土やや少ない。
12. 暗褐色土 焼土化砂質粘土+暗褐色土。
13. 暗赤褐色土 焼土化砂質粘土主体。
14. 淡褐色砂質粘土
15. 暗褐色土
16. 淡灰褐色土
17. 淡赤褐色土 淡褐色砂質粘土, ローム, 焼土ブロック混合層。
18. 褐色土 ローム主に焼土粒混入。
19. 暗褐色土 淡褐色砂質粘土に暗褐色土混入。
20. 淡褐色砂質粘土
21. 淡褐色粘土
22. 褐色土 ローム土。床構築土。

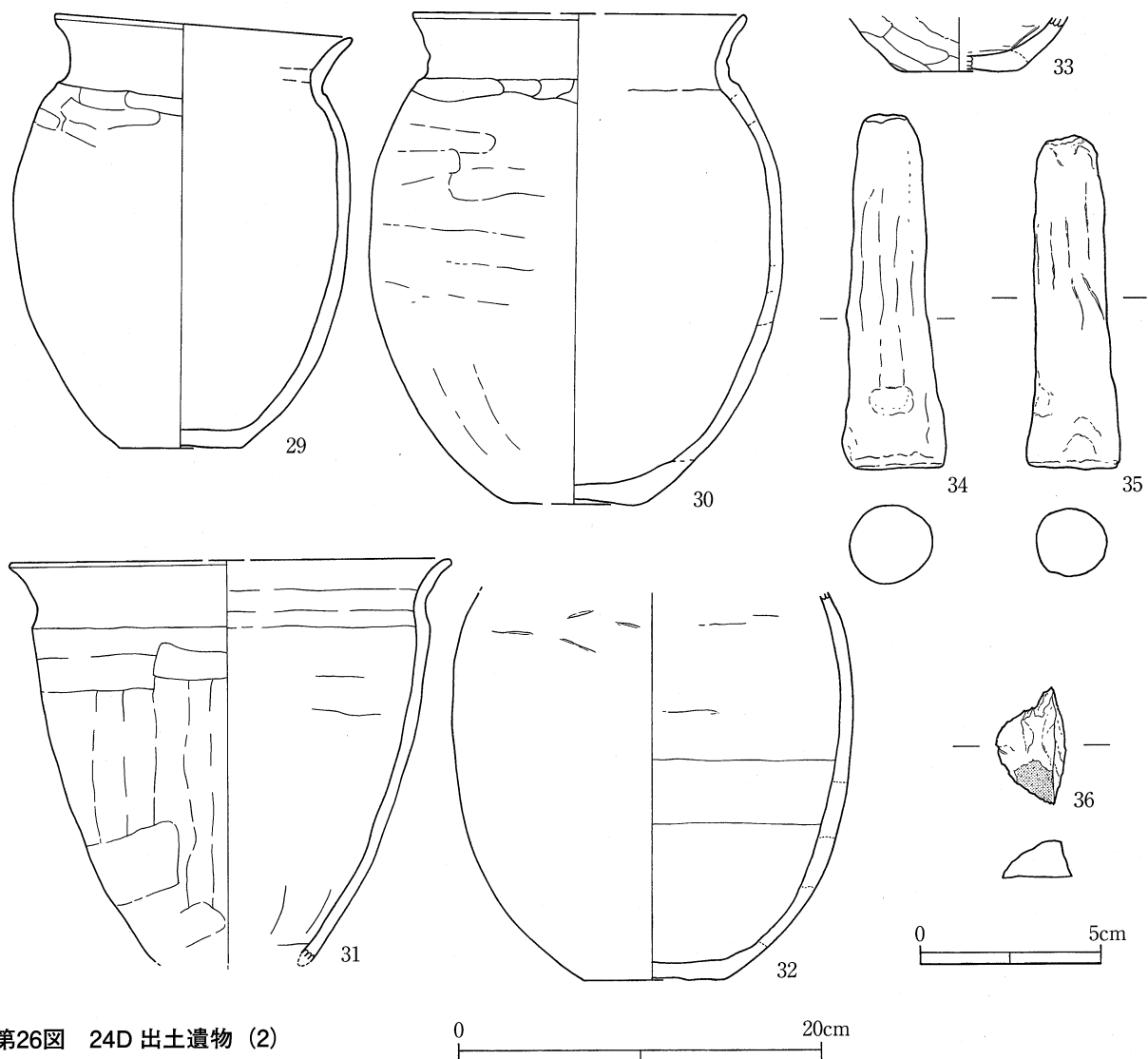
第24図 24D遺構実測図(2)

25図	土師器	口径	器高	ほぼ完形	色	成分	加工
8	土師器 坏	13.4	4.1	ほぼ完形	淡橙褐色一部黒斑	砂粒, 石英, 長石	口辺部外-横なで 体部外-横位ヘラ削り 内-横位ヘラ磨き
9	土師器 坏	14.3	4.5	完形	淡橙褐色	白色粒, 石英, 長石, 小礫	口辺部外-横なで 体部外-横位ヘラ削り 内-横位ヘラ磨き後なで整形
10	土師器 坏	14.7	4.8	口縁部一部欠	外淡褐色 内淡橙褐色	白色粒, 石英, 黒色粒	口辺部外-横なで 体部外-横位ヘラ削り 内-横位ヘラ磨き ざらついた剥離が見られる。
11	土師器 坏	13.1	4.1	完形	淡橙褐色	白色粒主に, 石英	口辺部内外-横なで 体部外-横位ヘラ削り
12	土師器 坏	14.0	4.5	完形	淡橙褐色	白色粒, 長石, 砂粒	口辺部外-横なで 体部外-横位ヘラ削り 内-ヘラ磨き ウロコ状の剥離が見られる。
13	土師器 坏	13.7	3.3	口辺~体部 2/3遺存	茶褐色	白色粒, 雲母, 砂粒	口辺部内外-横なで 体部外-横位ヘラ削り 内-下位細かな横位ヘラ磨き
14	土師器 坏	12.1	4.4	口辺~体部 2/3遺存	外淡橙褐色 内黒褐色	白色粒, 砂粒	口辺部外-横なで 体部外-横位ヘラ削り 内-横位ヘラ磨き 炭素吸着による内面黒色処理
15	土師器 坏	13.6	3.5	口辺~体部 1/5遺存	外暗~淡茶褐色 内淡赤茶褐色	白色粒, 小礫	口辺部内外-横位ヘラ磨き 体部外-横位ヘラ削り 内-放射状ヘラ磨き 漆仕上げによる内面黒色処理
16	土師器 坏	13.2	3.8	口辺~体部 1/5遺存	外暗褐色 内茶褐色 内面剥離	白色粒, 雲母	口辺部外-横位ヘラ磨き 体部外-横位ヘラ削り 内-横位, 放射状ヘラ磨き
17	土師器 坏	13.8	4.2	口辺~体部 1/3遺存	外暗海老茶色 内淡橙褐色~黒灰色	白色粒, 長石	口辺部外-横なで 体部外-横位ヘラ削り 内-横位ヘラ磨き 漆仕上げによる黒色処理を内面全体と体部中位に施す。
18	土師器 坏	14.3	4.3	口辺~体部 2/3遺存	外暗~淡茶褐色 内黒褐色	白色粒多含, 長石, 赤色粒	口辺部内外-横なで 体部外-横位ヘラ削り 内-下端ヘラ磨き 炭素吸着による内面黒色処理を施す。
19	土師器 坏	12.3	4.5	口辺~体部 1/3遺存	淡茶黄褐色	白色粒	口辺部外-横なで 体部外-横位ヘラ削り 内-横位, 縦位ヘラ磨き

第13表 24D遺物観察表(3)



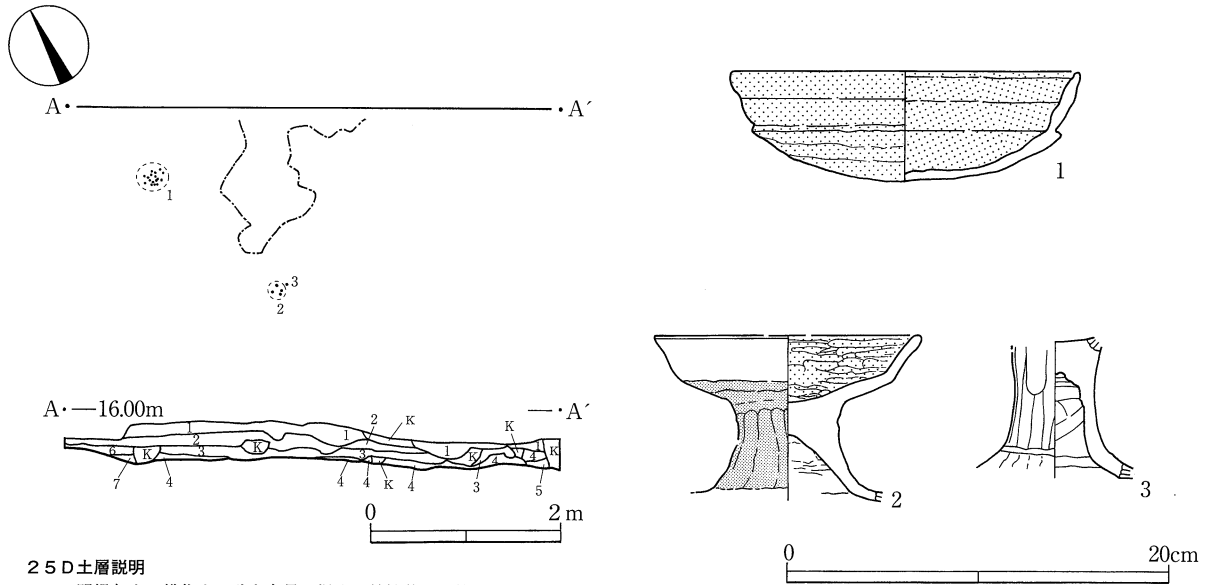
第25图 24D 出土遺物 (1)



第26図 24D 出土遺物 (2)

25	20	土師器 坏	口径 器高	14.0 4.5	ほぼ完形	漆黒色～淡褐色	白色, 赤色粒 長石, 砂粒	口辺部内外-横なで 体部外-横位, 縦位ヘラ削り 内-ヘラ磨き 炭素吸着による黒色処理を両面に施す。
	21	土師器 坏	口径 器高	13.3 4.6	ほぼ完形	外暗褐色 内茶黒色	白色粒	口辺部内外-横なで 体部外-横位, 斜位ヘラ削り 内-下端ヘラ磨き 炭素吸着による黒色処理を内面全体 と体部中位まで施す。
	22	土師器 坏	口径 器高	14.2 6.2	口辺～体部 1/3	外暗～暗赤褐色 内漆黒～赤褐色	白色・黒色粒 長石・砂粒	口辺部内外-横なで 体部外-横位, 縦位ヘラ削り 内-横なで 口縁端部が尖る。炭素吸着による黒色処理 を内面と体部中位まで施す。
	23	土師器 高坏	遺存高	6.2	脚部全周	坏部内漆黒色 脚部外暗赤褐色 内暗茶黒褐色	白色粒主に赤 色粒少量	脚部外-縦位ヘラ削り後裾部横なで 内-ヘラなで 坏部内-ヘラ磨き 脚部外面赤色塗彩か 坏部内面炭素吸着による黒色処理
	24	土師器 高坏	遺存高	10.8	脚部1/2	外暗褐色 内淡橙褐色	白色粒, 石英 砂粒	脚部外-縦位ヘラ磨き後なで 裾部横位ヘラ磨き 内-縦位ヘラなで裾部横なで 漆仕上げによる黒色処理 か 脚部外面に施す。
	25	土師器 小型鉢	口径 器高	6.6 4.3	完形 底径 4.6	淡茶黄褐色	白色粒主に赤 色粒少量	内外面ヘラなで整形
	26	土師器 鉢	口径 器高 底径	18.6 8.0 6.0	口辺部1/5 体部 1/3 底部 3/4	赤褐色一部黒斑	白色粒, 石英 砂粒	口辺部内外-横位ヘラ磨き 体部外-横位ヘラ削り後横 位ヘラ磨き 内-縦位ヘラ磨き 漆仕上げによる両面黒 色処理か
	27	土師器 小型甕	口径 器高	12.7 13.7	胴部一部欠 底径 6.0	暗茶褐色	白色粒, 砂粒	口辺部横なで 胴部外-横位ヘラ削り 内-ヘラなで 内外面二次焼成による剥離著しい。

第14表 24D 遺物観察表 (4)



第27図 25D 遺構実測図

25D 土層説明

1. 明褐色土 耕作土。砂を多量に混入。粘性普通、締まり弱い。
2. 明褐色土 耕作土。砂を少量混入。粘性、締まり共普通。
3. 黒褐色土 2～3mm大ローム粒混入。粘性強く、締まり普通。
4. 茶褐色土 ローム主に黒色土少量混入。粘性、締まり共強い。
5. 黒褐色土 黒色土主にローム粒少量混入。粘性、締まり共普通。
6. 黒褐色土 1層類似。ローム粒混入。粘性普通、締まり強い。
7. 茶褐色土 2層類似。やや明るい。粘性普通、締まり弱い。

第15表 24D 遺物観察表 (5)

25図	28	土師器 甕	口径 器高 底径	18.5 23.0 6.0	ほぼ完形	淡橙褐色一部黒斑	白色粒, 雲母	口辺部横なで 胴部外-縦位~斜位へら削り後なで整形 内-へらなで 胴部上半外面部分的に、内面は全体に剥離著しい。
26図	29	土師器 甕	口径 器高 底径	16.8 23.5 6.7	完形	外暗褐色~黒褐色 内淡橙褐色	白色粒, 石英 砂粒	口辺部横なで 胴部外-横位へら削り後なで 内-なで 胴部外面煤状固形物顕著 内面ウロコ状の剥離著しい。
	30	土師器 甕	口径 器高 底径	18.2 27.5 7.0	口辺部1/6 胴部 1/3 底部 1/3	外暗褐色 内淡橙褐色	白色粒, 石英 砂粒	口辺部横なで 胴部外-上半横位へら削り, 下半斜位へら削り後全体になで 内-へらなで
	31	土師器 甕	口径 遺存高	24.8 22.5	底端部欠	淡橙褐色	白色粒, 石英 砂粒	口辺部横なで 胴部外-横, 縦位へら削り後なで 内-へらなで
	32	土師器 甕	底径 遺存高	7.6 21.5	胴~底部 1/3	外赤~黒褐色 内淡茶褐色	白色粒, 石英 砂粒	胴部内外-へらなで 胴部上半外面煤状固形物下半部二次焼成による赤変 内面は剥離著しい
	33	土師器 甕	底径 遺存高	6.6 3.1	底部1/2	淡茶褐色	白色粒, 長石 雲母	胴部外-斜位へら削り 内-へらなで整形
	34	土製品 支脚	全長 基底幅	19.8 5.2	完形	橙褐色	白色粒, 石英	上部~中位二次焼成による剥離 へらなで整形 重さ551.3g
	35	土製品 支脚	全長 基底幅	18.5 4.8	完形	淡茶褐色	砂粒, 石英	上部と半面の上部~下端に二次焼成の剥離
	36	使用痕 ある石	全長3.3 最大幅 1.9 重さ6.0g	下面に摩耗痕が見られる。				

25D住居跡 (第27図 写真図版10.20)

調査区中央北側のCⅡ-8グリッドに位置する。硬化面とその周囲に出土した遺物のみで規模等は不明である。硬化面は1.3mの範囲でソフトローム上面に広がっている。掘り込みの浅い堅穴住居跡と想定される。覆土は3.4.5層で、黒色土を主体とした層である。その他の施設は検出されなかった。

遺物は3点のみで硬化面と同レベルでの出土であり、床面直上遺物である。

第16表 25D 遺物観察表 (1)

挿図番号	器種	寸法 (cm)	遺存度	色調	胎土	手法上の特徴
27図	1 土師器 坏	口径 18.3 器高 5.8	完形	暗褐色	白色粒, 雲母	口辺部, 体部内-横なで 体部外-横位へら削り 口縁 端部内側で凹線顕著 炭素吸着による両面黒色処理 両 面剥離顕著

第17表 25D 遺物観察表 (2)

2	土師器 高坏	口径 14.0 遺存高 8.7	口辺～脚部 1/2	外淡赤褐色 内漆黒色	白色粒, 雲母	坏部外-口辺横などで, 体部横位ヘラ削り 脚部外-縦位ヘラ削り, 裾部横などで 内-ヘラなどで 坏部炭素吸着による黒色処理を口辺部～ 内面全体に施す。坏部口辺稜部～脚部にかけて赤色塗彩
3	土師器 高坏	遺存高 7.5	脚部全周	外淡橙褐色 内黒褐色	石英多含, 小 礫, 赤色粒	脚部外-縦位ヘラ削り後裾部横位ヘラなどで 内-ヘラなどで

第3節 平安時代

今回の調査では竪穴住居跡2軒, 掘立柱建物跡1棟を検出した。時期は9世紀中ば～後半に位置づけられる。竪穴住居跡の主軸方位はN-W方向とW-E方向とばらつきが見られる。カマド位置についても北及び西とばらつきがある。平面規模は3m～3.25m程度である。掘立柱建物跡については2間×2間の側柱式で, N-W方向の主軸方位をとる。詳細については後述したい。遺物では, 土器類では土師器坏, 皿, 小型甕, 甕, 須恵器坏, 甕, 大型甕があり, 他に砥石, 刀子が出土している。以下, 各遺構と出土遺物について概要を述べていくこととする。

21D住居跡 (第28.29 図 写真図版6.16)

調査区東側中央のCⅢ-4グリッドを中心に位置し, 主軸方位はN-50°-E, 平面形は2.8m×3.05mのややいびつな方形で, 壁高は30~32cmである。周溝は全周する。カマド両袖下においても周回している。規模は幅10~15cm, 深さ7~8cmを測る。主柱穴はなく, カマド対面に入出口ピットが検出された。25cmの円形で深さ15cmを測る。カマドは北東壁中央に位置し, 袖部は良好な状態で遺存する。火床部は袖部中程の6層下で焼土, 炭化物, 黒色土が堆積している。煙道部は燃焼部奥で30°の角度をもって緩く立ち上がり, 更に壁の中場で23°の角度で立ち上がっている。袖部の構築は, 粘度の高い白色粘土を芯として, 淡褐色砂質粘土を積み重ねている。部分的にローム, 黒色土の混合土や焼土粒, 焼土ブロック混入の暗褐色土を補強している。床面はハードローム直下まで掘り, 凹凸面にロームを充填して平坦面とした地床である。硬化面は, 入出口ピット前から直線上にカマド前面に顕著である。覆土はロームブロック混じりの暗褐色土を主体とした, 人為的埋め戻し土である。

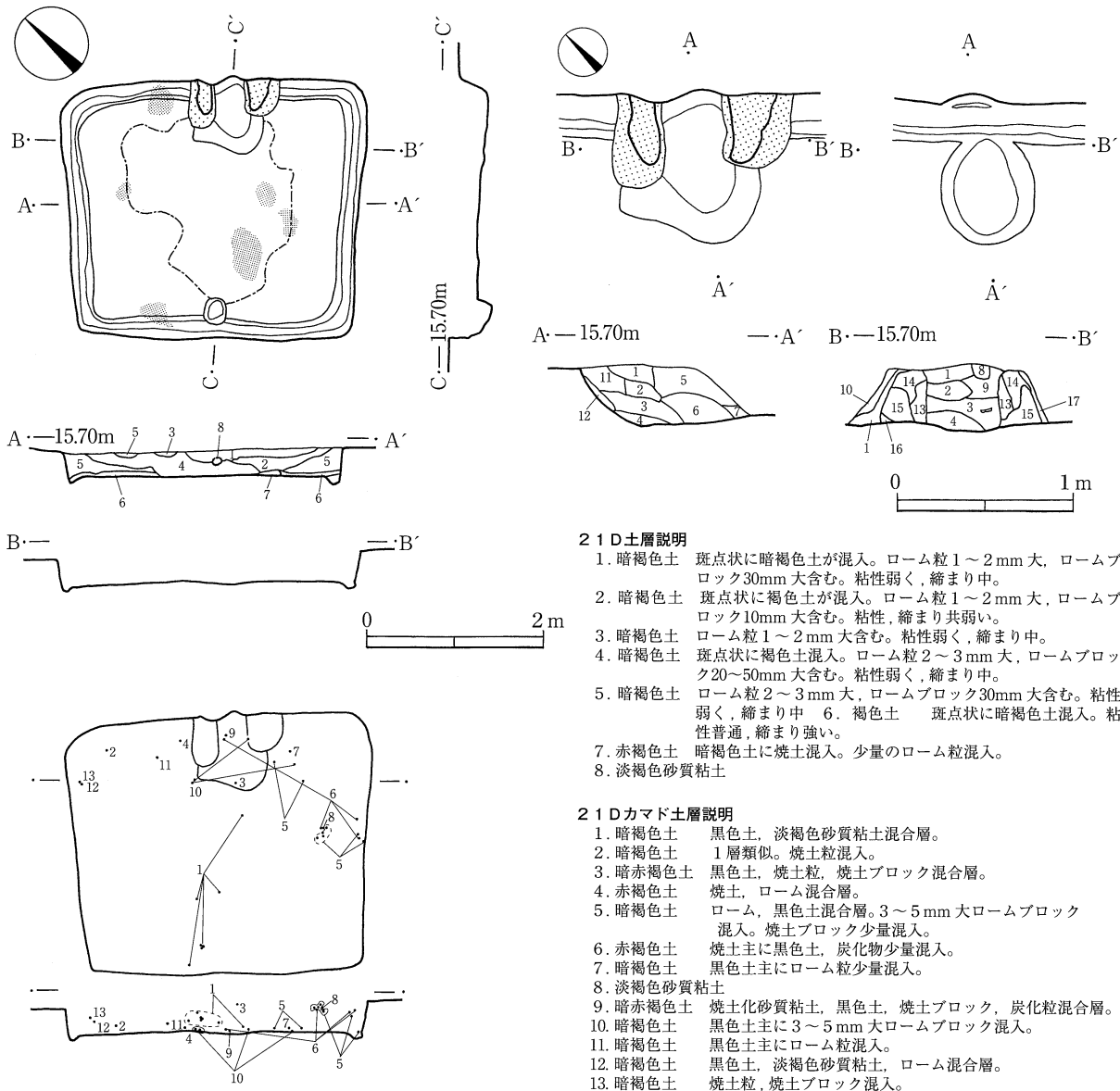
遺物は人為的埋め戻しのため, 1.2.3の明らかな混入遺物は別として, 住居使用時～廃絶時に近い時期の遺物と判断している。9の甕はカマド廃絶時の儀式として, 焚き口に倒立させた状態で出土している (写真図版6)。また, 住居中央のやや東寄りとかマド横, 入出口ピット横に焼土が検出された。

第18表 21D 遺物観察表 (1)

挿図番号	器種	寸法 (cm)	遺存度	色調	胎土	手法上の特徴
29図 1	土師器 坏	口径 11.2 器高 4.0	口辺～体部 2/3	淡茶褐色	雲母多含, 黒色粒, 白色粒	口辺～体部外-横位ヘラ削り 内-横位ヘラ磨き後などで整形。漆仕上げによる内面黒色処理
2	土師器 手づくね	底径 3.9 遺存高 1.9	口辺部欠	暗茶黒褐色	白色粒主に赤色粒少量	内外-指などで 指頭痕顕著。
3	土師器 手づくね	底径 遺存高 1.8	口辺部欠	暗茶黒褐色	白色粒	内外-ヘラなどで 底面丸底状。
4	須恵器 坏	口径 12.1 器高 4.1 底径 6.3	ほぼ完形 口縁一部欠	灰白色	白色粒, 小礫	体部下端回転ヘラ削り, 底部切離しは回転糸切り後未調整。
5	土師器 坏	口径 13.2 器高 4.0 底径 6.9	ほぼ完形	橙褐色	白色粒, 黒色粒主に雲母, 石英少量	体部下端手持ちヘラ削り, 底部切離しは回転糸切り? 後底部再調整。

29図	6	土師器 坏	口径 器高 底径	11.8 3.8 6.8	口辺~底部 1/2	淡橙褐色	白色粒, 小礫	体部下端及び底部周縁回転ヘラ削り, 切離しは回転糸切り。
	7	土師器 坏	口径 器高 底径	12.2 3.4 6.8	口辺~底部 1/2	淡橙褐色	白色粒, 小礫 雲母	体部中位~下端回転ヘラ削り, 切り離し不明。
	8	土師器 皿	口径 器高 底径	13.2 2.2 5.1	完形	淡茶褐色	白色粒主に赤 色粒ごく少量	切り離しは回転糸切り。底部周縁ヘラ削り調整と削り出しにより高台をつくる。底部外面中央に「吉井」の墨書あり。
	9	土師器 甕	口径 器高 底径	13.0 13.1 5.4	口辺部1/2 胴部1/3 欠	外暗褐色~茶褐色 内暗褐色~ 赤褐色	白色粒主に小 礫	口辺部内外, 外面ヘラ削り後横なで。胴部外-縦位ヘラ削り後下半部横位・斜位ヘラ削り。胴部内-ヘラなで。
	10	土師器 甕	底径 遺存高	8.0 2.5	底部一部欠	暗茶黒褐色	白色粒	底部内外-なで整形。胴部外-下端ヘラ削り。
	11	石製品 砥石	縦長5.1 横長2.4 厚さ1.9 重さ33.2g	凝灰岩製 黒灰色 上部に8mm の通し孔が見られ, 携行用と想定される。四面に縦~斜方向の擦痕が見られる。完形				

第19表 21D 遺物観察表 (2)



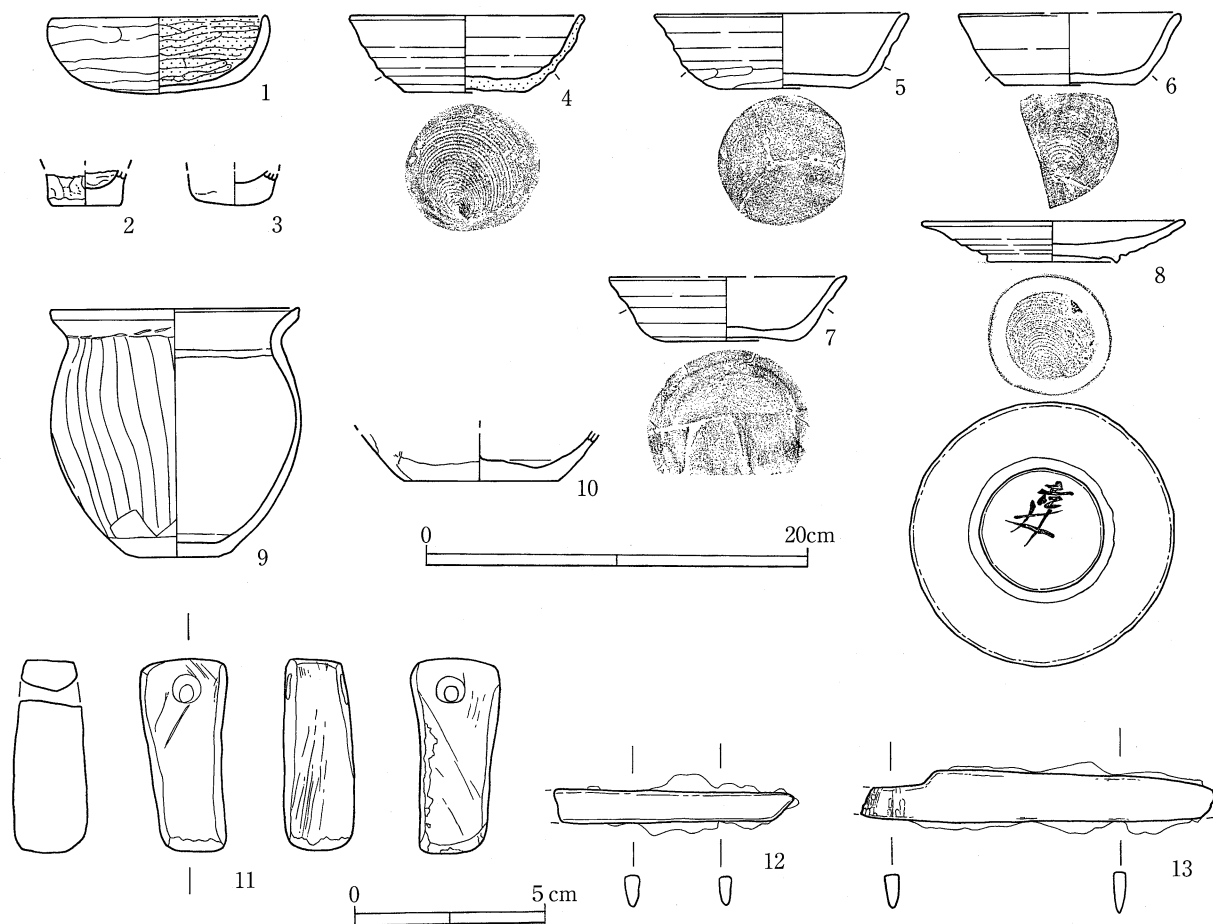
第28図 21D 遺構実測図

21D土層説明

1. 暗褐色土 斑点状に暗褐色土が混入。ローム粒1~2mm大, ロームブロック30mm大含む。粘性弱く, 締まり中。
2. 暗褐色土 斑点状に褐色土が混入。ローム粒1~2mm大, ロームブロック10mm大含む。粘性, 締まり共弱い。
3. 暗褐色土 ローム粒1~2mm大含む。粘性弱く, 締まり中。
4. 暗褐色土 斑点状に褐色土混入。ローム粒2~3mm大, ロームブロック20~50mm大含む。粘性弱く, 締まり中。
5. 暗褐色土 ローム粒2~3mm大, ロームブロック30mm大含む。粘性弱く, 締まり中 6. 褐色土 斑点状に暗褐色土混入。粘性普通, 締まり強い。
7. 赤褐色土 暗褐色土に焼土混入。少量のローム粒混入。
8. 淡褐色砂質粘土

21Dカマド土層説明

1. 暗褐色土 黒色土, 淡褐色砂質粘土混合層。
2. 暗褐色土 1層類似。焼土粒混入。
3. 暗赤褐色土 黒色土, 焼土粒, 焼土ブロック混合層。
4. 赤褐色土 焼土, ローム混合層。
5. 暗褐色土 ローム, 黒色土混合層。3~5mm大ロームブロック混入。焼土ブロック少量混入。
6. 赤褐色土 焼土主に黒色土, 炭化物少量混入。
7. 暗褐色土 黒色土主にローム粒少量混入。
8. 淡褐色砂質粘土
9. 暗赤褐色土 焼土化砂質粘土, 黒色土, 焼土ブロック, 炭化粒混合層。
10. 暗褐色土 黒色土主に3~5mm大ロームブロック混入。
11. 暗褐色土 黒色土主にローム粒混入。
12. 暗褐色土 黒色土, 淡褐色砂質粘土, ローム混合層。
13. 暗褐色土 焼土粒, 焼土ブロック混入。
14. 淡褐色砂質粘土
15. 淡褐色白色粘土
16. 褐色土 ローム, 黒色土混合層。
17. 暗褐色土 ローム, 暗褐色土混合層。



第29図 21D 出土遺物

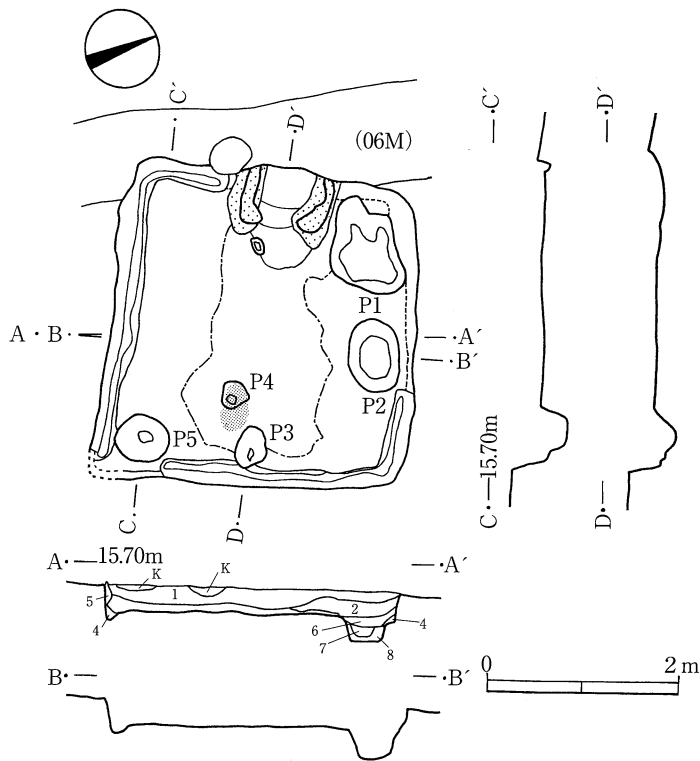
第20表 21D 遺物観察表 (3)

29図 12	鉄製品 刀子	遺存長6.3 幅0.8 重さ4.9g 基部を欠損する。
13	鉄製品 刀子	遺存長9.2 刃部幅1.1 茎部幅0.9 重さ11.4g 基部の一部と先端部を欠損する。茎部に木質部及び針状の金具が遺存している。

2 2 D住居跡 (第30.31.32図 写真図版7.17)

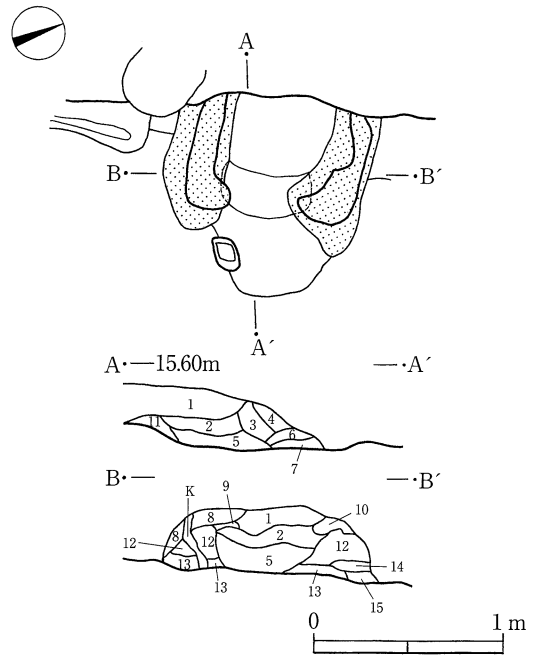
調査区中央やや東寄りのCⅢ-6.10グリッドに位置し、06M溝状遺構に切られる。主軸方位はN-52°-W、平面形は3.4m×3.2mのややいびつな方形で壁高は25~30cmである。周溝は北壁側と南東コーナーで検出されなかったが、他かでは周回する。規模は幅15~25cmで深さ6~7cmを測る。主柱穴はなく、P1~P5が検出された。この内、出入り口ピットに想定されるのがP3で、42cm×33cmの楕円形で深さ23cmを測る。P1は浅い掘り込みだが、貯蔵穴か。P2.4.5については性格の特定はむずかしい。カマドは西壁中央に位置し、袖部は良好に遺存する。火床部は5層下で焼土ブロックの混入が見られる。煙道部は燃焼部奥で22°の傾斜で立ち上がってフラットとなるが、上部は06M溝状遺構に切られる。袖部の構築は、粘度の高い褐色粘土を芯として、砂質粘土を積み上げている。床面はソフトローム中の地床で、P3前から直線上に硬化面が検出された。覆土は1層に見られる暗茶褐色土が斑点状に含まれる状況を考慮すると自然埋没層か。

遺物はカマド中・脇を中心に、住居中央、P1上層から出土している。カマド中出土の13.14.16.18.21と袖上出土の9は本跡に伴う遺物として判断している。また、手づくね土器が15点以上出土しているが各



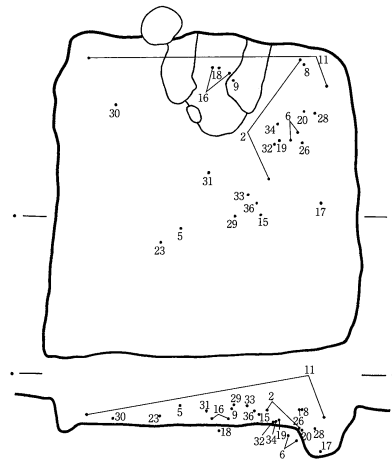
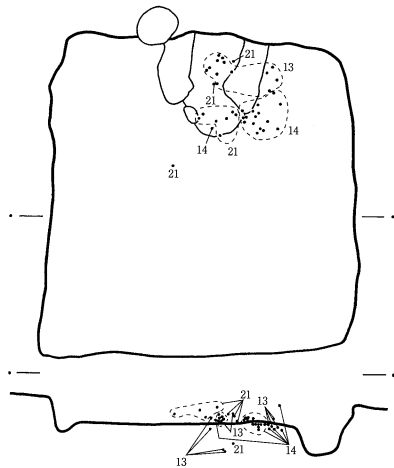
22D土層説明

1. 暗茶褐色土 暗茶褐色土斑点状に混入。焼土粒少量混入。粘性弱く、締まりやや欠く。
2. 暗茶褐色土 1層類似。暗茶褐色土の混入少ない。焼土は稀少量。
3. 暗茶褐色土 1層類似。ローム粒若干混入。締まっている。
4. 暗褐色土 ローム粒混入。締まりやや欠く。
5. 暗茶褐色土 ローム粒ほとんど含まない。粘性弱い。
6. 暗茶褐色土 壁崩壊のローム含む。締まりやや見られる。
7. 茶褐色土 崩壊ローム主体。締まりやや見られる。
8. 茶褐色土 ローム粒主体。締まり強い。



22Dカマド土層説明

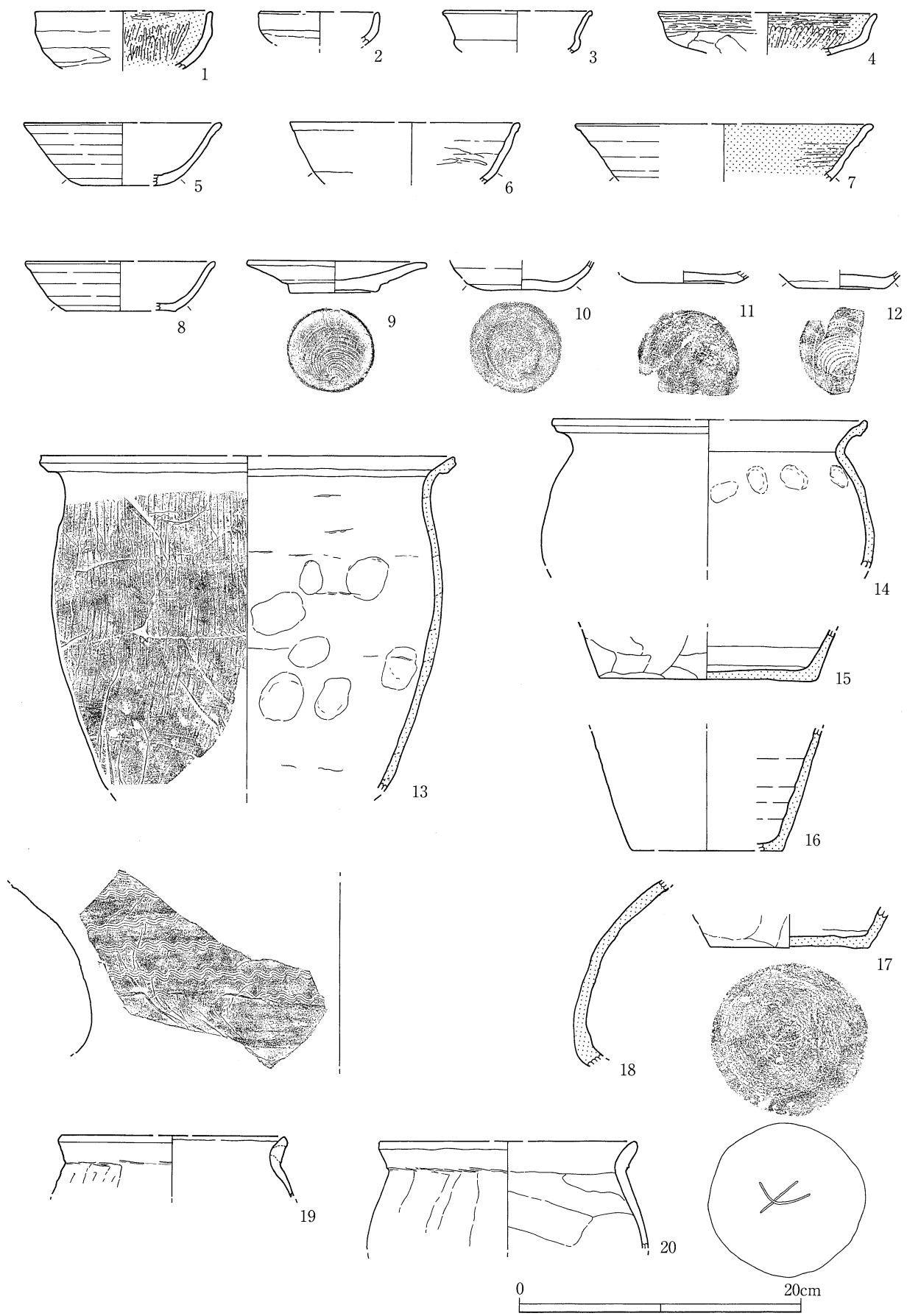
1. 黒褐色土 淡褐色砂質粘土混入。
2. 暗褐色土 淡褐色砂質粘土，焼土粒混入。
3. 淡褐色土 淡褐色砂質粘土主に黒色土混入。
4. 暗褐色土 暗褐色土，淡褐色砂質粘土混合層。
5. 暗褐色土 ローム粒，焼土ブロック混入。
6. 暗褐色土 4層類似。黒色土が含まれる。
7. 暗褐色土 ローム，黒色土混合層。
8. 黒褐色土 黒色土主に淡褐色砂質粘土混入。
9. 淡赤褐色土 焼土化砂質粘土，黒色土混合層。
10. 淡褐色土 淡褐色砂質粘土主に黒色土少量混入。
11. 暗褐色土 ローム，黒色土混合層。
12. 淡褐色砂質粘土 カマド袖部分。
13. 褐色粘土
14. 暗褐色土 淡褐色砂質粘土+暗褐色土。



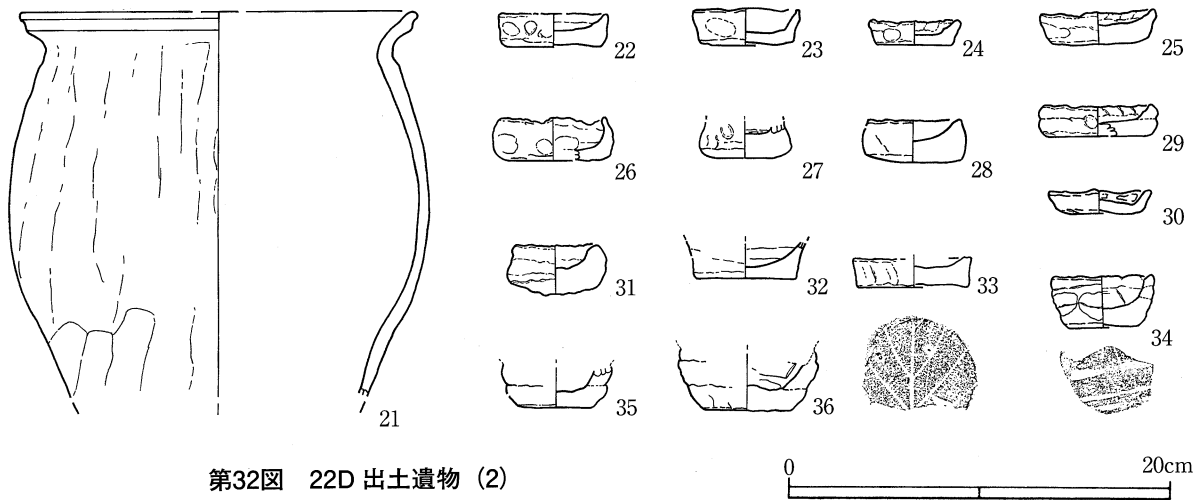
第30図 22D 遺構実測図

第21表 22D 遺物観察表 (1)

挿図番号	器種	寸法 (cm)	遺存度	色調	胎土	手法上の特徴
31図	1 土師器 坏	口径 12.5 遺存高 4.1	口辺～体部 1/5 遺存	外茶褐色 内黒灰色	白色粒, 赤色 粒, 雲母	口辺部外-横なで 体部外-横位ヘラ削り 内-縦位ヘラ磨き 炭素吸着による黒色処理
	2 土師器 坏	口径 8.4 遺存高 2.3	口辺～体部 1/5 遺存	茶褐色	白色粒, 雲母	体部内-なで整形 外-横位ヘラ削り
	3 土師器 坏	口径 10.6 遺存高 2.9	口辺～体部 1/6 遺存	白橙褐色	赤色粒	口辺部横なで 体部外-不明瞭だがヘラ削り 口縁は玉縁状になっている。
	4 土師器 坏	口径 15.5 遺存高 3.0	口辺～体部 1/6 遺存	淡茶褐色	白色粒, 石英	口辺部内外横位ヘラ磨き 体部外-横位ヘラ削り 内-放射状ヘラ磨き 漆仕上げによる内面 黒色処理
	5 土師器 坏	口径 14.1 器高 4.4 底径 6.0	口辺～底部 1/5 遺存	外暗褐色 内淡橙褐色	白色粒, 雲母	ロクロ使用 体部下端回転ヘラ削り調整
	6 土師器 坏	口径 15.6 遺存高 3.7	口辺～体部 1/6 遺存	淡橙褐色	長石, 雲母 小礫	ロクロ使用 体部下端回転ヘラ削り調整 内面磨き状のなで調整
	7 土師器 坏	口径 21.4 遺存高 4.1	口辺～体部 1/6 遺存	淡橙褐色 内黒色処理?	長石, 雲母 小礫	ロクロ使用 体部下端回転ヘラ削り調整 内面 横位ヘラ磨き後漆?による黒色処理か。
	8 土師器 坏	口径 13.6 器高 3.6 底径 7.8	口辺～底部 1/5 遺存	淡橙褐色～暗茶 褐色	白色粒, 雲母 長石	ロクロ使用 体部下端回転ヘラ削り調整
	9 土師器 皿	口径 13.0 器高 2.4	完形 底径 6.3	淡橙褐色	白色粒, 小礫	ロクロ使用 底部切り離しは回転糸切り後高台 を貼付。
10 土師器 坏	底径 6.7 遺存高 2.1	底部～体部	淡橙褐色	長石, 白色粒 雲母少量	ロクロ使用 体部下端回転ヘラ削り調整 底部 回転糸切り後周縁回転ヘラ削り調整	
11 土師器 坏	底径 7.3 遺存高 0.9	底部～体部	淡褐色	長石, 石英	ロクロ使用 底部切り離しは回転ヘラ削り。	
12 土師器 坏	底径 6.7 遺存高 1.3	底部1/4	橙褐色	小礫, 白色粒 雲母	ロクロ使用 体部下端回転ヘラ削り調整 底部 回転糸切り後周縁ヘラ削り調整	
13 須恵器 甗	口径 29.4 遺存高 24.0	口辺～胴下 半1/5	灰褐色	赤色粒, 白色 粒, 雲母	胴部外-平行叩き目文 内-当て具痕, 粘土紐 痕跡から幅3cm 程度の粘土板積み上げ成形	
14 須恵器 甗	口径 22.2 遺存高 10.5	口辺～胴下 半1/3	淡灰褐色	長石, 白色粒	胴部外-水挽きないし横位なで整形, 内-指頭 圧痕, なで整形	
15 須恵器 甗	底径 15.6 遺存高 3.5	底部～胴下 端の一部	暗赤茶色	赤色粒, 白色 粒, 雲母	胴部外-下端部ヘラ削り, 内-なで整形	
16 須恵器 甗	底径 10.8 遺存高 8.6	底部～胴下 半全周	淡青灰色	白色粒, 白色 針状物, 2~3m m 大黒青色粒	胴部外-下位～下端横位ヘラ削り, 上部に平行 叩き目文	
17 須恵器 甗	底径 11.3 遺存高 2.4	底部全周	暗青灰色	長石, 白色粒 雲母, 小礫	胴部外-下端部横位ヘラ削り, 底部外面中央に 焼成前のヘラによる刻書「七」が見られる。	
18 須恵器 甗	最大遺存径 46.0	口辺部一部	淡青灰色	長石, 白色粒 雲母	4本単位の波状文がめぐる。	
19 土師器 甗	口径 15.8 遺存高 4.3	口辺部1/4	外暗茶褐色 内黒茶褐色	赤色粒, 白色 粒, 雲母	口辺内外横なで 胴部外-縦位ヘラ削り, 内- なで整形	
20 土師器 甗	口径 18.2 遺存高 7.7	口辺部のみ	淡橙褐色	赤色粒, 白色 粒, 雲母, 長石	口辺内外横なで 胴部外-縦位ヘラ削り, 内- 横位ヘラなで	
32図	21 土師器 甗	口径 21.0 遺存高 20.4	口辺～胴下 半ほぼ全周	暗茶褐色	白色粒, 小礫 少量の雲母	口辺内外横なで 胴部外-縦位ヘラ削り後なで 整形 内-なで整形
	22 土師器 手づく ね	口径 5.8 器高 1.8	底部2/3 底径 5.0	暗褐色	白色粒, 雲母	なで整形
	23 土師器 手づく ね	底径 5.0 遺存高 1.9	底部1/2	暗茶褐色	白色粒, 雲母	なで整形
	24 土師器 手づく ね	口径 5.0 器高 1.3	底部2/3 底径 4.0	淡茶褐色	白色粒, 雲母 長石	内外面共に指頭痕明瞭, 指なで整形
	25 土師器 手づく ね	口径 6.0 器高 1.9	底部2/3 底径 5.0	外淡橙褐色 内黒茶褐色	白色粒, 雲母 石英	外-指なで 内-なで整形



第31图 22D 出土遺物 (1)



第32図 22D 出土遺物 (2)

個体の出土地点，出土レベルがばらばらであり，本遺構に伴う遺物か否かは手づくね祭祀の存続時期や古墳時代後期の混入遺物としての可能性を考慮しても判定はむずかしい。

第22表 22D 遺物観察表 (2)

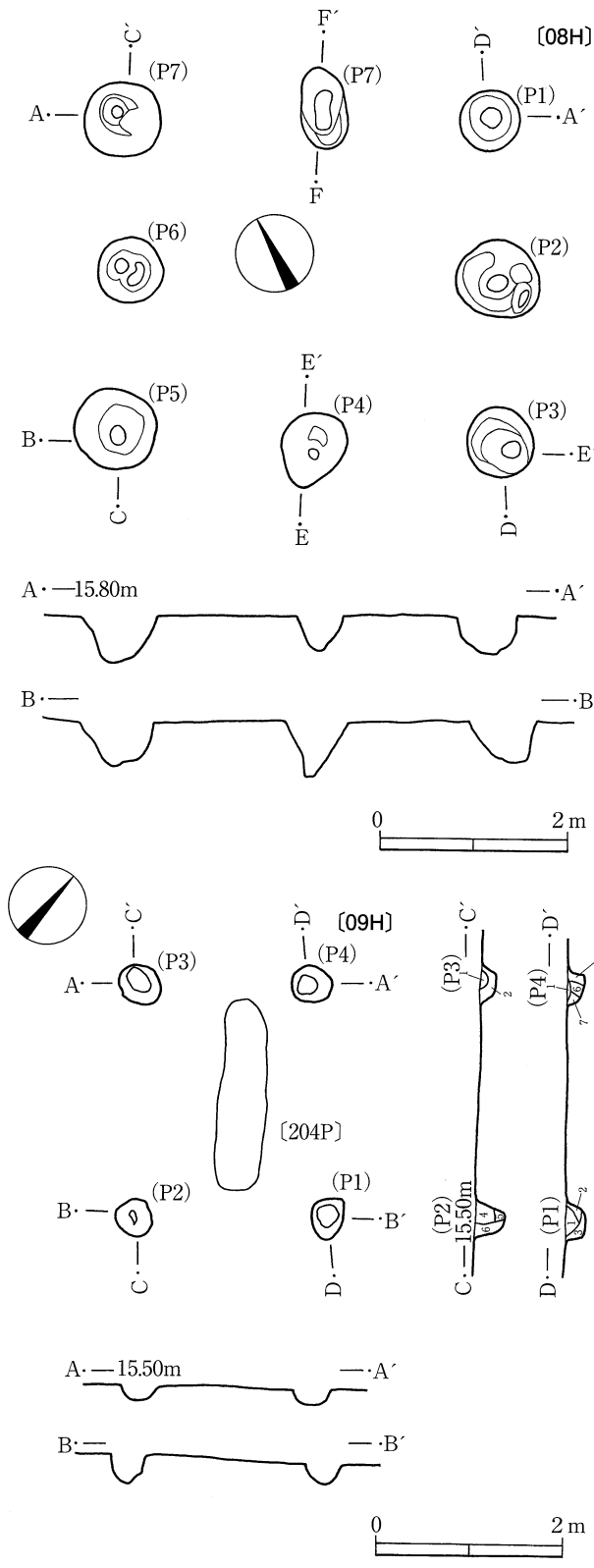
32図	26	土師器 手づくね	口径 器高	5.6 2.2	底部1/2 底径	5.0	淡茶褐色	白色粒	内外面共に指などで整形
	27	土師器 手づくね	底径 遺存高	4.8 2.0	底部全周		暗茶褐色	白色粒，雲母	内外面共に指などで整形
	28	土師器 手づくね	口径 器高	4.9 2.3	底部2/3 底径	5.0	外淡茶褐色 内黒茶褐色	白色粒，雲母 砂粒	内外面共に指などで整形
	29	土師器 手づくね	口径 器高	5.6 1.7	底部1/3 底径	5.4	暗褐色	白色粒，雲母	内外面共に指などで整形
	30	土師器 手づくね	口径 器高	5.3 1.2	底部2/5 底径	4.6	淡橙褐色	白色粒，雲母 長石	内外面共に指などで整形
	31	土師器 手づくね	口径 器高	4.5 2.7	底部1/2		暗褐色	白色粒，雲母	内外面共に指などで整形
	32	土師器 手づくね	底径 遺存高	5.4 1.9	底部全周		暗茶褐色	白色粒，雲母	内外面共に指などで整形
	33	土師器 手づくね	口径 器高	6.2 1.6	底部3/4 底径	5.9	茶褐色	白色粒，雲母	内外面共に指などで整形 底部木葉痕
	34	土師器 手づくね	口径 遺存高	5.1 2.7	底部1/3 底径	3.6	暗褐色	白色粒，赤色 粒	輪積み後指などで整形
	35	土師器 手づくね	底径 遺存高	4.0 2.2	底部全周		暗茶褐色	白色粒，雲母 長石	輪積み痕明瞭，指などで整形 底部外面に「×」のヘラ書き
	36	土師器 手づくね	底径 遺存高	4.8 3.2	底部1/3		外橙褐色 内黒茶褐色	白色粒，雲母	輪積み痕明瞭，ヘラなどで整形

第4節 掘立柱建物跡

本遺構については各時代の概要で触れているため，08Hが平安時代，09Hが古墳時代後期に帰属することのみで各遺構の概要に移りたい。

08H掘立柱建物跡 (第33図 写真図版10)

調査区中央やや東寄りのCⅢ-7.11グリッドに位置し，06M溝状遺構に切られる。規模は2間(4.1m)×2間(3.6m)で，桁行方位はN-64°-Wである。柱間寸法は桁行2.05m等間，梁行1.8m等間を測る。掘り方規模は70~90cmの円形で，深さ40~60cmを測る。掘り方覆土は，全体としては部分的に撞き固められた層の残存と柱抜き取り後の再堆積層が主体的である。P4において柱の立ち腐れと想定される土層堆積が見られる。22Dと同一方位をとる。遺物は出土しなかった。



第33図 08H・09H 遺構実測図

08H C-C' 間土層説明 (P-5)

1. 暗褐色土 黒色土、ローム混合層。粒子細かい。
2. 暗褐色土 1層類似。黒色土の混入多い。
3. 黒褐色土 ローム粒少量含む。
4. 暗褐色土 1層類似。5mm大ローム粒混入。
5. 褐色土 ローム土主体。
6. 暗褐色土 黒色土、ローム混合層。締まっている。
7. 暗褐色土 黒色土、ローム混合層。ローム粒やや多い。
8. 暗褐色土 黒色土、ローム混合層。黒色土やや多い。
9. 褐色土 ローム粒主体に黒色土混入。
10. 暗褐色土 黒色土、ローム混合層。やや粘質。
11. 暗褐色土 黒色土、ローム、ロームブロック混合層。
12. 褐色土 ローム粒主に黒色土混入。

(P-6)

1. 暗褐色土 黒色土、ローム混合層。粒子細かい。
2. 黒褐色土 ローム粒少量混入。
3. 黒褐色土 ローム粒斑点状に入る。
4. 黒褐色土 3層類似。黒色土やや多い。
5. 黒褐色土 3層類似。ロームやや多い。
6. 暗褐色土 黒色土、ローム混合層。やや締まる。
7. 暗褐色土 6層類似。やや粘質。
8. 暗褐色土 ローム粒に、黒色土少量混入。締まっている。
9. 暗褐色土 ローム土主体。黒色土ごく少量混入。締まっている。
10. 褐色土 黒色土少量混入。締まっている。

(P-7)

1. 暗褐色土 黒色土、ローム混合層。粒子細かい。
2. 黒褐色土 ロームブロック混入。
3. 暗褐色土 黒色土、ローム混合層。ローム粒やや多い。
4. 暗褐色土 黒色土、ローム混合層。ローム粒斑点状に入る。
5. 暗褐色土 黒色土、ローム混合層。2~3mm大ローム粒全体的に入る。
6. 暗褐色土 黒色土、ローム混合層。締まっている。
7. 暗褐色土 黒色土、ローム、ロームブロック混合層。締まっている。
8. 暗褐色土 7層類似。黒色土の混入やや多い。

08H D-D' 間土層説明

1. 暗褐色土 ローム粒全体に含む。炭粒粒、焼土粒少量含む。粒子細かく締まる。
2. 暗褐色土 1層類似。黒色土粒の混入多い。
3. 暗褐色土 黒色土主に1mm大ローム粒少量混入。
4. 暗褐色土 黒色土、ローム混合層。やや締まっている。
5. 暗褐色土 3層類似。ローム粒の混入少ない。
6. 暗褐色土 黒色土、ローム、ロームブロック混合層。締まっている。
7. 褐色土 ローム、ロームブロック混合層。締まっている。
8. 褐色土 ローム土。
9. 暗褐色土 黒色土、ローム混合層。粒子細かい。
10. 暗褐色土 ローム、黒色土、2~3mm大ローム粒混入。粒子細かい。
11. 暗褐色土 ローム粒主に、黒色土少量混入。粒子細かい。
12. 褐色土 ローム土主体。暗褐色土少量混入。締まっている。
13. 褐色土 ローム土主体に、ロームブロック少量混入。締まっている。

14. 黒褐色土 ロームブロック少量混入。粒子細かい。
15. 黒褐色土 14層類似。ローム粒やや多い。
16. 暗褐色土 ローム、暗褐色土混合層。やや締まる。
17. 暗褐色土 16層類似。黒色土少量含む。
18. 暗褐色土 4層類似。ロームやや多い。

08H E-E' 間土層説明

1. 暗褐色土 黒色土、ローム混合層。粒子細かくさらさらしている。
2. 暗褐色土 1層類似。2mm大ローム粒混入。
3. 暗褐色土 1層類似。ロームブロック混入。
4. 暗褐色土 2層類似。黒色土の混入やや多い。
5. 暗褐色土 黒色土主体。ローム粒少量混入。
6. 暗褐色土 黒色土、ローム混合層。ロームブロック混入。
7. 暗褐色土 ローム主に暗褐色土混入。締まっている。
8. 褐色土 ローム土主体。黒色土少量混入。
9. 褐色土 ローム土。
10. 暗褐色土 ローム、黒色土斑点状に含む。締まっている。

08H F-F' 間土層説明

1. 黒褐色土 ローム粒少量含む。さらさらしている。
2. 黒褐色土 1層類似。黒色土の混入やや多い。
3. 暗褐色土 黒色土、ローム混合層。粒子細かい。
4. 黒褐色土 黒色土主にローム粒少量含む。
5. 暗褐色土 ローム粒主に黒褐色土、ロームブロック混入。
6. 暗褐色土 黒色土、ローム混合層。やや締まっている。
7. 暗褐色土 6層類似。ロームブロック混入。
8. 暗褐色土 6層類似。黒色土やや多い。
9. 暗褐色土 7層類似。黒色土やや多い。
10. 暗褐色土 黒色土主にローム粒混入。
11. 褐色土 ローム主に黒色土混入。締まっている。

09H土層説明

1. 暗褐色土 明るめの暗褐色土が斑点状に混入。粘性弱く、締まり中。
2. 暗褐色土 1層類似。暗褐色土の混入やや多い。粘性弱く、締まりやや弱い。
3. 暗褐色土 少量の暗褐色土を斑点状に含む。粘性締まり共に中。
4. 暗褐色土 1~2mm大のローム粒を少量混入。粘性弱く、締まりやや弱い。
5. 暗褐色土 ローム土を斑点状に少量含む。粘性締まり共に中。
6. 暗褐色土 褐色土を斑点状に含む。1~2mm大ローム粒少量含む。粘性締まり共やや強い。
7. 暗褐色土 3層類似。粘性弱く、締まりやや弱い。

09H掘立柱建物跡 (第33図 写真図版10)

調査区北東コーナーのDⅢ-2グリッドに位置する。規模は1間(1.75m~2.0m)×1間(2.5m)で、桁行方位はN-44°-Eである。掘り方規模は40~45cmの円形で、深さ15~40cmを測る。掘り方の覆土は全体的に自然埋没層で、P2においてわずかに撞き固められた6層と柱抜き取り後の土層堆積が観察される。19D、20Dと同一方位をとる。遺物は出土しなかった。

第5節 ピット・溝状遺構

時期不明のピット2基と中世~近世以降と想定される溝状遺構5条を検出した。溝状遺構については重複関係から04M→01M、05M、01M→06Mへと新しくなることが確認された。以下、各遺構について述べていくこととする。

203P土坑 (第34図 写真図版11)

調査区中央やや東寄りのCⅢ-11グリッドに位置する。重複はなく良好に遺存する。ややいびつな円形で、0.54m×0.62m、深さ0.3mを測る。壁面は片側で角度をもって、他方でやや緩やかに立ち上がる。底面は平坦を意識していない。掘立柱建物の掘り方の覆土に相似しているが、他の掘り方は検出されなかった。1、2層が再堆積層で、他層は撞き固めた層と想定される。遺物は出土しなかった。

204P土坑 (第34図 写真図版10)

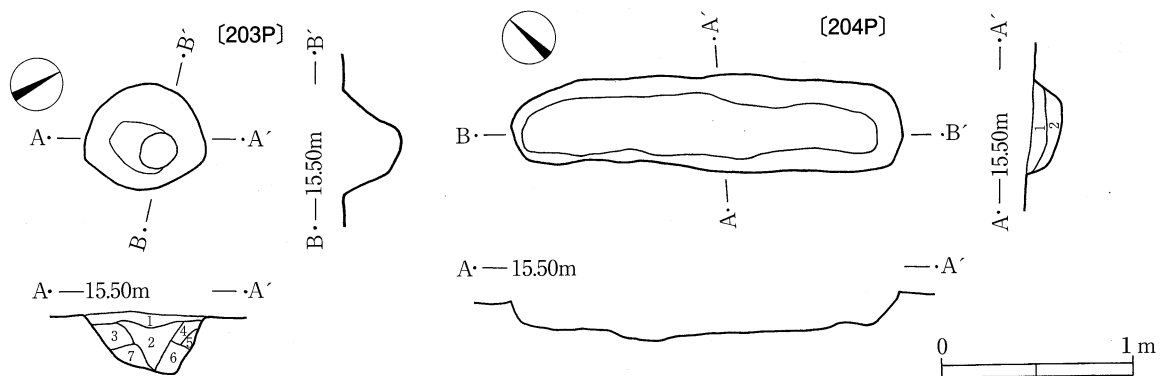
調査区北東コーナーのDⅢ-2グリッドに位置する。09Hと重複する。2.1m×0.51mの楕円形で、深さ0.22mを測る。長軸方位はN-36°-Eである。壁面は63°の角度で立ち上がる。底面はやや凹凸が見られるが、おおむね平坦である。覆土は暗褐色土の自然埋没層である。遺物は出土しなかった。

01~06M溝状遺構 (第35.5図 写真図版1)

01Mは、調査区南東から北西に縦走する溝で06Mに切られ、04Mを切っている。規模は幅0.85m、深さ0.1~0.22mを測る。覆土は暗褐色土の自然埋没層である。

02Mは、調査区南側のBⅣ-5グリッドに位置する。04Mと重複するが、前後関係は不明である。規模は幅1.05m、深さ0.19mを測る。覆土は暗褐色土の自然埋没層である。

04Mは、調査区内でコの字状の平面プランをもち、02Mと重複関係にある。また01M、05Mに切られる。



第34図 203P・204P 遺構実測図

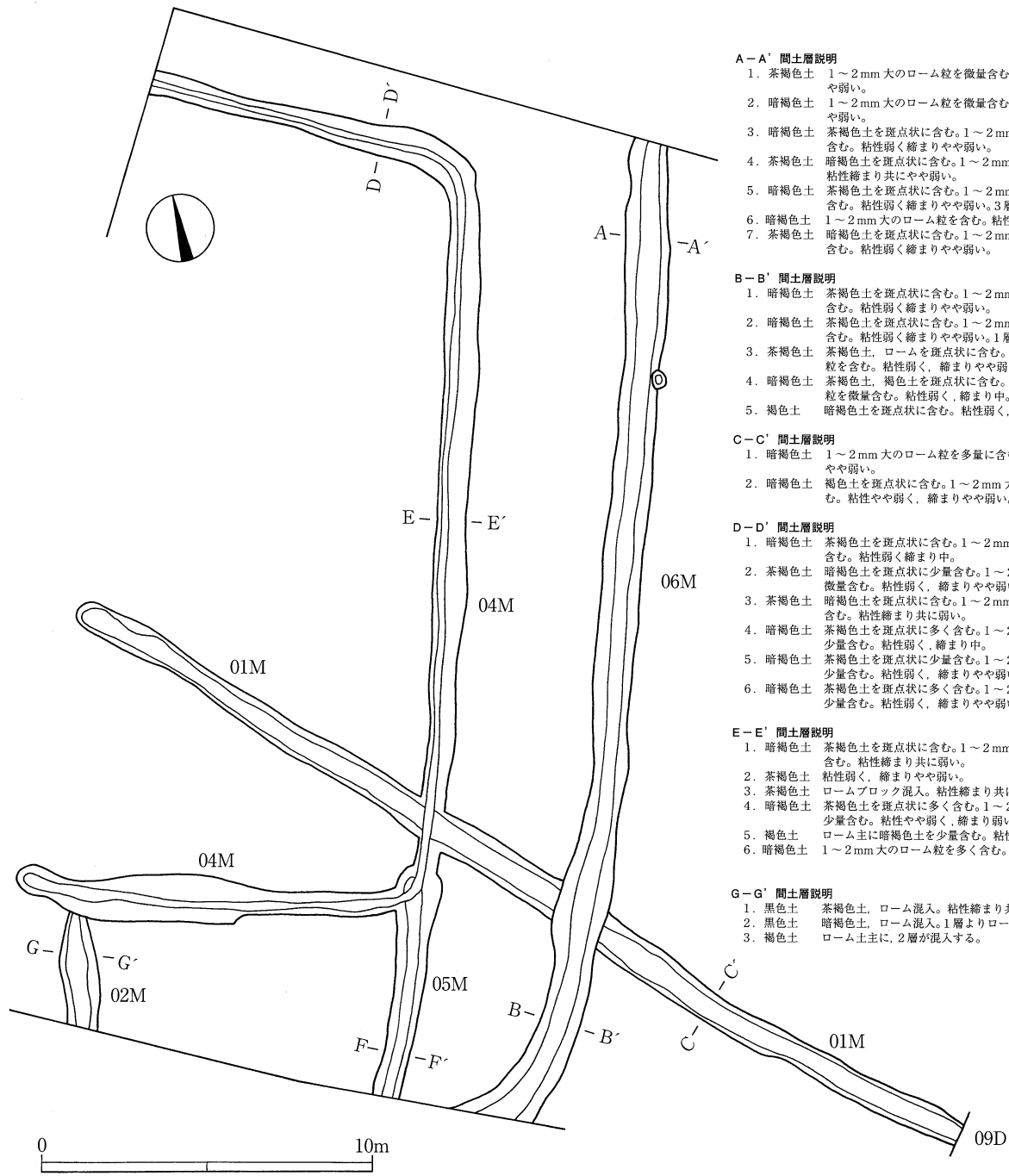
203P 土層説明

1. 暗褐色土 褐色土が斑点状に少量混入。粘性締まり共にやや弱い。
2. 暗褐色土 褐色土が斑点状に少量混入。粘性締まり共に中。
3. 暗褐色土 褐色土が斑点状に2層より多く混入。粘性締まり共に中。
4. 暗褐色土 褐色土が斑点状に多量に混入。粘性締まり共にやや強い。
5. 褐色土 暗褐色土が斑点状に少量混入。粘性締まり共にやや強い。

6. 褐色土 褐色土が斑点状に少量混入。粘性締まり共に中。
7. 褐色土 褐色土が斑点状に多量に混入。粘性締まり共に中。

204P 土層説明

1. 暗褐色土 褐色土が斑点状に少量混入。粘性弱く、締まりやや弱い。
2. 暗褐色土 1層より多く褐色土が斑点状に混入。粘性弱く、締まりやや弱い。



- A-A' 間土層説明**
1. 茶褐色土 1~2mm 大のローム粒を微量含む。粘性弱く、締まりやや弱い。
 2. 暗褐色土 1~2mm 大のローム粒を微量含む。粘性弱く、締まりやや弱い。
 3. 暗褐色土 茶褐色土を斑点状に含む。1~2mm 大のローム粒を微量含む。粘性弱く締まりやや弱い。
 4. 茶褐色土 暗褐色土を斑点状に含む。1~2mm 大のローム粒を含む。粘性締まり共にやや弱い。
 5. 暗褐色土 茶褐色土を斑点状に含む。1~2mm 大のローム粒を微量含む。粘性弱く締まりやや弱い。3層より暗い。
 6. 暗褐色土 1~2mm 大のローム粒を含む。粘性締まり共にやや弱い。
 7. 茶褐色土 暗褐色土を斑点状に含む。1~2mm 大のローム粒を微量含む。粘性弱く締まりやや弱い。

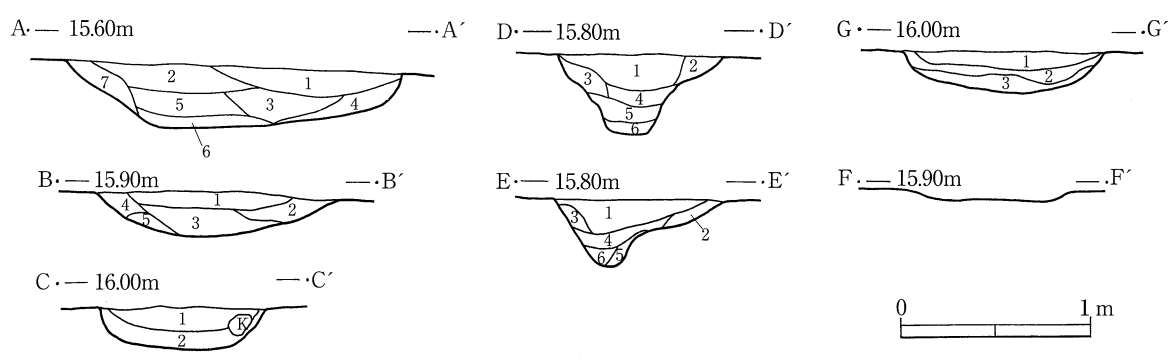
- B-B' 間土層説明**
1. 暗褐色土 茶褐色土を斑点状に含む。1~2mm 大のローム粒を微量含む。粘性弱く締まりやや弱い。
 2. 暗褐色土 茶褐色土を斑点状に含む。1~2mm 大のローム粒を微量含む。粘性弱く締まりやや弱い。1層より暗い。
 3. 茶褐色土 茶褐色土、ロームを斑点状に含む。1~2mm 大のローム粒を含む。粘性弱く、締まりやや弱い。
 4. 暗褐色土 茶褐色土、褐色土を斑点状に含む。1~2mm 大のローム粒を微量含む。粘性弱く、締まり中。
 5. 褐色土 暗褐色土を斑点状に含む。粘性弱く、締まりやや弱い。

- C-C' 間土層説明**
1. 暗褐色土 1~2mm 大のローム粒を多量に含む。粘性弱く、締まりやや弱い。
 2. 暗褐色土 褐色土を斑点状に含む。1~2mm 大のローム粒を微量含む。粘性やや弱く、締まりやや弱い。

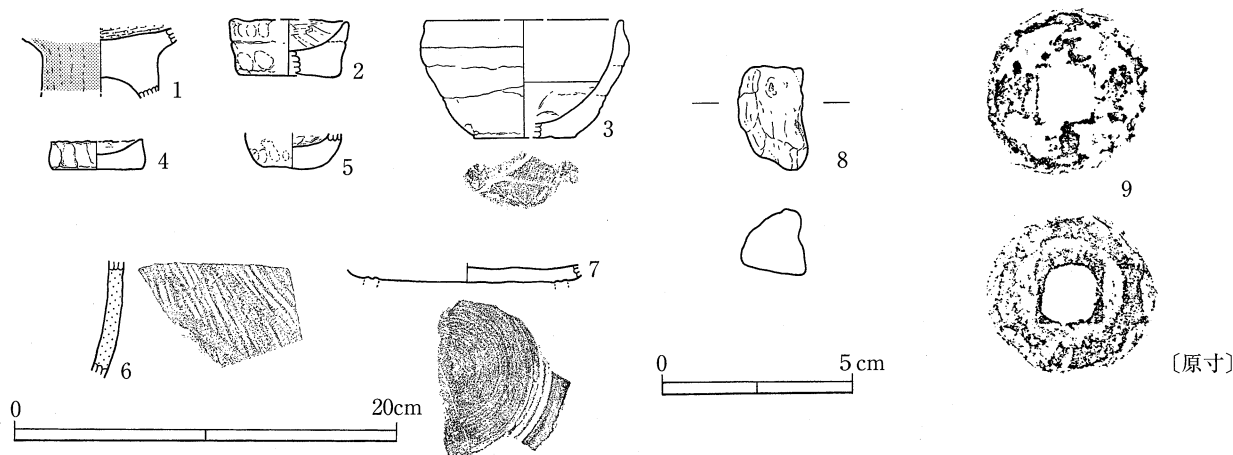
- D-D' 間土層説明**
1. 暗褐色土 茶褐色土を斑点状に含む。1~2mm 大のローム粒を少量含む。粘性弱く締まり中。
 2. 茶褐色土 暗褐色土を斑点状に少量含む。1~2mm 大のローム粒を微量含む。粘性弱く、締まりやや弱い。
 3. 茶褐色土 暗褐色土を斑点状に含む。1~2mm 大のローム粒を微量含む。粘性締まり共に弱い。
 4. 暗褐色土 茶褐色土を斑点状に少量含む。1~2mm 大のローム粒を少量含む。粘性弱く、締まり中。
 5. 暗褐色土 茶褐色土を斑点状に少量含む。1~2mm 大のローム粒を少量含む。粘性弱く、締まりやや弱い。
 6. 暗褐色土 茶褐色土を斑点状に多く含む。1~2mm 大のローム粒を少量含む。粘性弱く、締まりやや弱い。

- E-E' 間土層説明**
1. 暗褐色土 茶褐色土を斑点状に含む。1~2mm 大のローム粒を少量含む。粘性締まり共に弱い。
 2. 茶褐色土 粘性弱く、締まりやや弱い。
 3. 茶褐色土 ロームブロック混入。粘性締まり共に弱い。
 4. 暗褐色土 茶褐色土を斑点状に多く含む。1~2mm 大のローム粒を少量含む。粘性やや弱く、締まり弱い。
 5. 褐色土 ローム主に暗褐色土を少量含む。粘性締まり共に弱い。
 6. 暗褐色土 1~2mm 大のローム粒を多く含む。粘性締まり共に弱い。

- G-G' 間土層説明**
1. 黒色土 茶褐色土、ローム混入。粘性締まり共に弱い。
 2. 黒色土 暗褐色土、ローム混入。1層よりローム多い。
 3. 褐色土 ローム土主に、2層が混入する。



第35図 溝状遺構実測図



第36図 溝内出土遺物

規模は幅0.88m, 深さ0.35~0.45m を測る。断面は東と北側立ち上がりで中場をもつ。覆土は暗褐色土~褐色土の自然埋没層である。

05Mは, 調査区南側のB IV-13.14 グリッドに位置する。04Mを切る。規模は幅0.85m, 深さ7~8cm を測る。

06Mは, 調査区を南北方向に縦走する溝で, 08H, 22D, 01M を切っている。南側で西方向に緩いカーブを描き調査範囲外になっている。規模は幅1.5m, 深さ0.32mを測る。覆土は暗褐色土~褐色土で, 何回かの覆土の溝さらいを経ているようである。

第23表 溝内遺物観察表

挿図番号	器種	寸法 (cm)	遺存度	色調	胎土	手法上の特徴
36図 1	土師器 高坏	遺存高 3.8	脚部全周	外赤褐色 内漆黒色	白色粒, 雲母	坏部内-ヘラ磨き後炭素吸着による黒色処理 脚部外-縦位ヘラ削り後などで整形 外面赤色塗彩 04M出土
2	土師器 手づくね	口径 6.0 器高 2.9	全体2/5 底径 5.4	外赤茶褐色 内黒褐色	白色・赤色粒 石英	外-指などで, 内-などで 02M出土
3	土師器 手づくね	口径 10.4 器高 6.2	全体1/4 底径 5.3	赤茶褐色	白色粒, 雲母	輪積み成形 口辺部外面と内面中位-横などで 体部内-などで整形 底部木葉痕 02M出土
4	土師器 手づくね	口径 4.8 器高 1.5	全体1/2 底径 4.7	淡茶褐色	白色粒	内外などで整形 06M出土
5	土師器 手づくね	遺存高 1.9	底部1/2	外赤茶褐色 内淡茶褐色	白色粒, 雲母	外-指などで, 内-ヘラなどで 06M出土
6	須恵器 甕	遺存高 -	胴部の一部	淡青灰色	長石多含	胴部外-横位平行叩き目文 01M出土
7	土師器 坏	底径 9.2 遺存高 1.0	底部1/2	淡橙褐色	白色粒, 砂粒	ロクロ使用高台付坏 高台部欠損 01M出土
8	軽石	縦長2.8 横長1.7 重さ2.6g	上面と側面に縦位の擦痕が見られる。04M出土			
9	銭貨	直径2.1 内径0.8 重さ2.6g	完形	元豊通寶 (北宋) 行書体	06M出土	

第3章 ま と め

第1節 縄文時代

今回の調査において陥穴1基、炉穴1基を検出した。a地点においても同遺構、同基の成果をあげている。陥穴は2基とも形態において相違が見られるが、占地、主軸方位においては似た傾向を示している。今回調査の202Pは3.22m×1.49mで、深さ1.55mを測る。主軸方位はN-29°-Wで、確認面での標高は15.7mである。前回調査の26Pは1.38m×0.87mで、深さ0.78mを測る。主軸方位はN-30°-Wで、確認面での標高は15.9mである。時期については不明であるが、北側に広がる高津川の水場に至るケモノ道上ないしは追い込み猟の一地点に設置されたと考えられる。炉穴については形態、占地とも類似性がなく、住居の炉としての可能性もあり判断はむずかしい。遺物では前回調査と同様に中期前半阿玉台I、II式及び阿玉台式併行の勝坂式系土器の他に早期条痕文系土器が出土している。点数は小片を含めても20点程度で本遺跡においては非常に客体的である。

第2節 古墳時代

本遺跡の主体となる時期で、中期の竪穴住居跡1軒がa地点において客体的に検出された他は、全て後期である。今回の調査において竪穴住居跡6軒、床硬化面1箇所、掘立柱建物跡1棟を検出した。a地点では竪穴住居跡13軒、掘立柱建物跡5棟、土坑8基を検出している。a、b両地点を通じた遺構の時期は、6世紀後半・末葉～7世紀前半以降でおおむね50～70年間の存続期間が想定できる。遺構変遷及び遺物については節を改める。

第3節 平安時代

a地点では竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡2棟を検出している。報告時において溝状遺構1条を当時期に想定したが、今回の調査において近世以降の遺構と判明したのでここに訂正する。今回の調査では竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟を検出した。a、b両地点を通じた遺構の時期は、9世紀第2四半期を中心とした前後の9世紀前半～半ばに想定される。遺構変遷及び遺物については別記する。

第4節 中・近世以降

中世については遺構は検出されなかった。遺物は、元豊通寶が1点06M溝内から出土した。近接地の遺跡としては、直線距離にして西600mの位置に高津館跡が所在する。土塁や堀が遺存するが、構造・規模・築造時期等は不明である。また、西隣接地の高津新山遺跡では地下式坑数基が検出され、中世陶器片等が出土している。

近世以降では、溝状遺構が5条検出された。重複関係から04Mが一番古く、続いて01M・05M、最後に06Mとなる。この内02,04,05,06 Mは同一方向であり、公図上にも南側に細長く分筆されている部分がある。明治15年の陸軍迅速図では内込遺跡一帯は畑地であり、畑の区画上施設と考えている。

第5節 内込遺跡a、b地点における遺構の変遷について(第37図)

a地点については既に報告書刊行済であるが、今回調査の08D、09Dがa地点調査分と合体して一遺構になる点、a地点の成果を援用しつつ内込遺跡の土地利用としての遺構の変遷過程を明らかにしていく方がより多くの情報量が得られることから、遺構についてのみ紙面をさくこととしたい。

遺跡は古墳時代中期～平安時代前半の6期に分けられる。2.3期及び5.6期は、時間幅としては遺物観

察上の前後関係である。縄文時代以外の本遺跡の開始時期は、遺跡全体の最終的判断ではないが a. b 地点及び緩い谷津を隔てた西隣接地の高津新山遺跡を参考としてみると、古墳時代前期をさかのぼる可能性は少ない。高津新山遺跡では、古墳時代前期末葉に数軒の竪穴住居跡、後期後半（7世紀中ば～後半）に数軒規模の竪穴住居跡群そして奈良・平安時代に竪穴住居跡109軒、掘立柱建物跡21棟を検出し、奈良・平安時代に花開いた遺跡と言える。反対に内込遺跡では、古墳時代後期（6世紀後半・末葉～7世紀前半以降）に主体をおき、平安時代にやや散漫となる傾向である。

1期

内込遺跡の開始としては、小竪穴遺構1基の検出である。時期は古墳時代中期（5世紀代）に想定される。遺構は一時的な使用と見られ、少量の焼土と遺物を1点検出したのみである。

2期

竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡4（5）棟で構成され、何らかの意図により遺構数が増加し、内込遺跡の主体となる時期である。遺跡内は南～北に向けて低くなる地形で、南側で標高16.3m、北側で14.9mと1.4mの比高差を持っている。遺構は全体に分布するが、中央～北側の一群と南側の一群に大別される。各々竪穴住居と掘立柱建物により構成される。時期は6世紀後半・末葉～7世紀初頭に想定される。

3期

竪穴住居跡5軒で構成される。占地は2期と同様である。前述したように2.3期は若干の時間差を遺物から伺える程度であり、2期と包括した中で考えるべきものであろう。時期は6世紀末葉～7世紀前半に想定される。

4期

竪穴住居跡4軒、土坑7基で構成される。占地は北側の低い部分を避け、標高15.6m～16.3mの南北方向の中央やや北から南側に位置する。遺構数の減少が著しく、主体となる一群が移動したと考えられる。この期をもってしばらく、内込遺跡から人足は途絶える。時期は7世紀前半以降に想定される。

5.6期

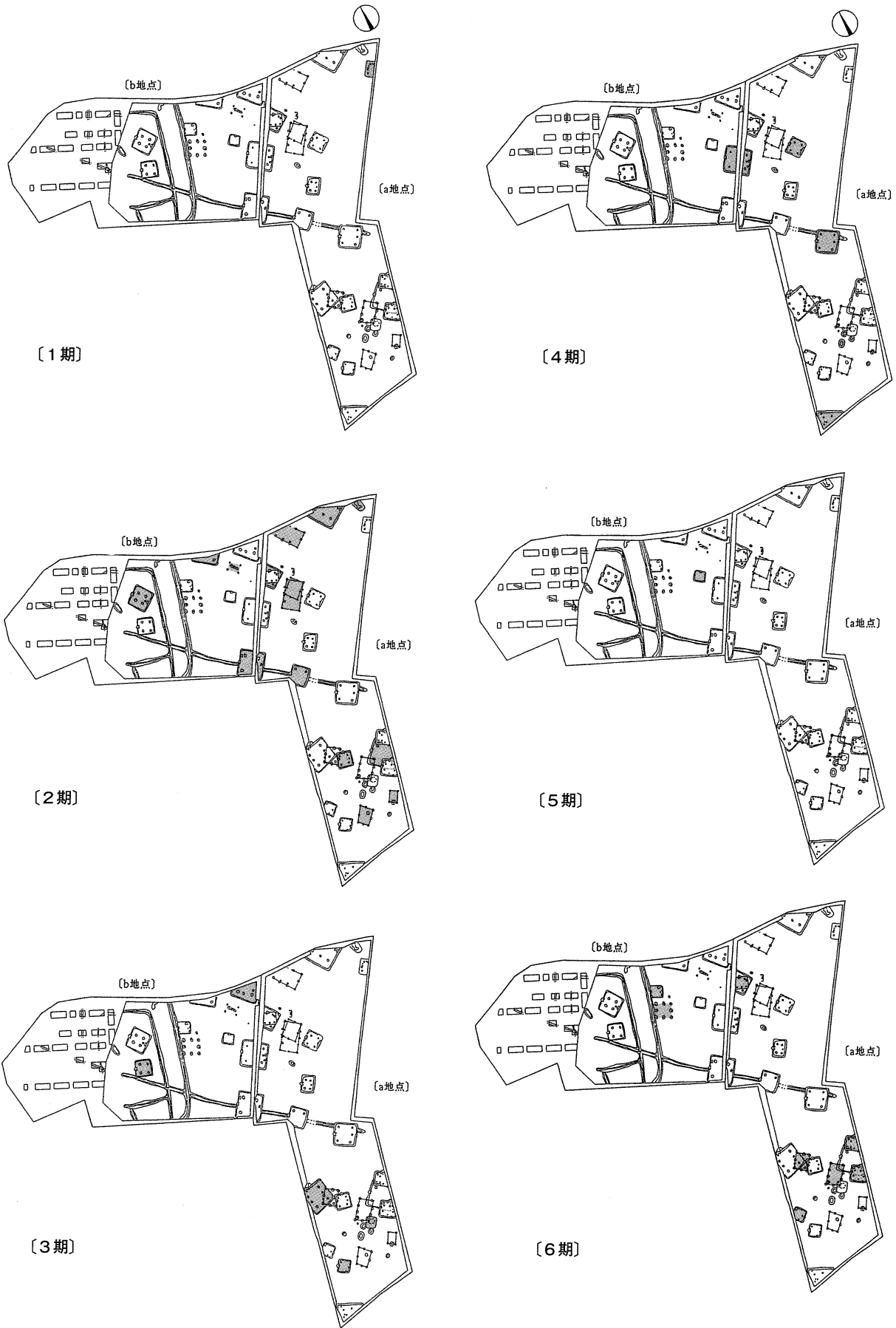
5期は竪穴住居跡2軒で構成される。前述したように、6期との明確な時間差は遺物から若干の前後を伺える程度で5.6期を包括的に扱っていくこととしたい。6期は竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡3棟で構成される。占地としては4期以降を踏襲した形で、北側の低い部分は避けて遺構が造られる。遺構は北側と南側の一群に大別される。ただ、両者間に「井」を共通認識とした墨書土器で「吉井」、「子野井」、「井」が出土している。高津新山遺跡でも「井」の墨書土器が出土していることから、高津新山ムラからの分派と考えるのが妥当であろう。

第6節 内込遺跡b地点における2期から6期の遺物について

内込遺跡b地点では遺物観察から6世紀後半・末葉～7世紀前半以降と9世紀前半～中葉にかけての土師器、須恵器、土製品、石製品、鉄器等が出土している。以下a地点検出の1期（5世紀代）を除いた2期～6期について外観してみたい。

2期（第38図）

24Dを標準とした。陶器編年TK43型式で6世紀後半～末葉に位置づけられる。土師器のみで構成され、坏、高坏、小型鉢、鉢、小型甕、甕、甌、支脚が出土した。坏類は坏蓋模倣形態が主体的で、口径13～14cmとやや大振りである。黒色処理は漆仕上げ、炭素吸着の二者が見られる。本跡遺物はほぼ同伴遺物であり、坏についてもバラエティーに富んでいる。この中で、2.3.4はほぼ同一人ないし集団による規格品と見られる。直立した口辺部で、口縁端部は内削ぎで沈線状の凹みが巡っている。同様の口縁



第37图 内込遺跡 a.b 地点遺構変遷図 (S = 1:1,500)

端部処理は20.21.22においても見られる。この3点は口辺部に2～3の段を持ち、炭素吸着による黒色処理を施す有段口縁坏である。この二者の口縁端部処理は、中村編年Ⅰ型式諸段階に見られる蓋坏の蓋に類似性が見られる。有段口縁坏については、体部のヘラ削り調整を除いて須恵器の忠実な模倣と云えないだろうか。なお、この3点の有段口縁坏は、田中広明氏の分類に従えば20.21がB1系列、22がA系列だがやや趣を異にしている。時期としては、有段口縁坏Ⅱ期の範疇と思われる。甕についてはやや胴の張る球形で、口辺部がくの字状を呈する在地甕と小型甕がセットとなっている。甌は頸部がくの字状で胴上半部にやや丸みを持つ単孔式形態である。

09Dは6世紀末葉以降に位置づけられる。坏は坏身形態の1.2で口径11～13cm、矮小化した3が混入している。甕は在地甕でも球形で大型タイプのもものと小型甕が出土している。

20Dでは矮小化した坏が主体でやや後出の段階である。混入遺物ではあるが、6の有段口縁坏が出土している。

25Dは硬化面のみで規模等は不明であるが、a地点02Dに類似した形態と想定される。遺物は坏、高坏が出土した。1は有段口縁坏で、口径18.3cmと大振りでありA4系列に属し、時期は有段口縁坏Ⅱ期の範疇と思われる。高坏は坏部～脚部外面に赤彩され、坏部内面に炭素吸着による黒色処理を施す。

3期 (第39図)

内込遺跡では、この段階から須恵器が食膳具として供給されるようになる。23D 1は関東産蓋坏、19D 1は判断が付きにくい、10は武蔵産の甕である。本期の時期は陶邑編年TK209型式併行期～TK217型式で6世紀末葉～7世紀前半に位置づけられる。土師器坏は出土遺物が少ないが、坏蓋模倣形態が主体的である。

19DはTK209型式併行期で6世紀末葉～7世紀初頭に位置づけられる。土師器では坏、高坏、小型甕、甕で、須恵器では蓋坏、甕が出土している。土師器では、坏は坏蓋形態のみで、口径11～13cm、17cmとばらつきがあり、黒色処理の有無が見られる。高坏は脚部において柱状と脚部上半から広がる2タイプが見られる。甕類は、12の小型で口辺部がくの字状を呈するタイプと11の球形の胴部をもつ2種の在地甕及び本遺跡では、各期において客体的な常総型甕の3種が見られる。須恵器坏身は受部径11.4cm、口径14cmで全体にシャープさが見られる。堅牢な焼き上がりである。

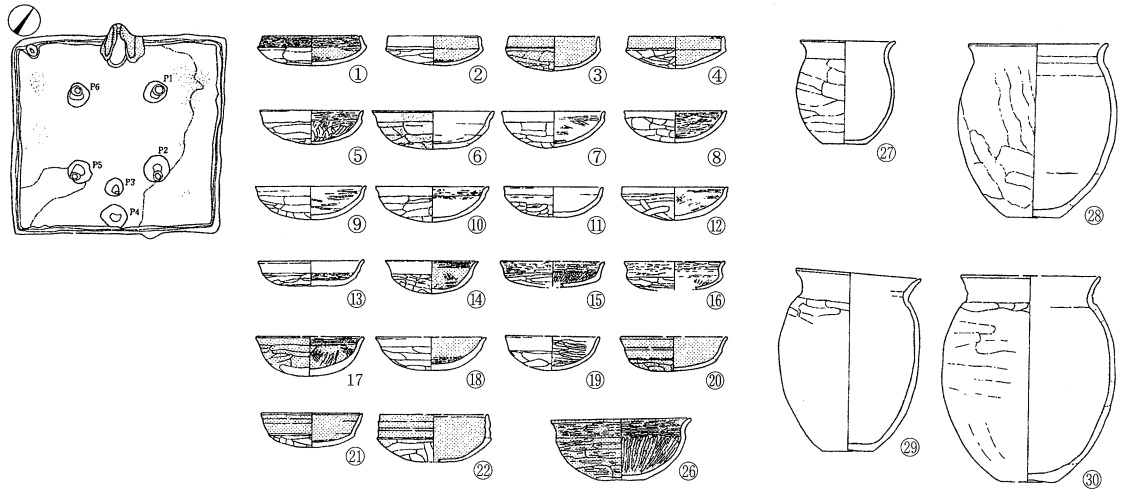
23DはTK209型式併行期～TK217型式で6世紀末葉～7世紀前半に位置づけられる。土師器では、坏、高坏、手づくね、鉢、小型甕、甕で、須恵器では蓋坏が出土している。坏は坏蓋形態のみで、口径13～15cm、黒色処理の有無が見られる。甕類は、8.9の小型で明確な底部を意識せず厚手のタイプと11.12の球形だがやや長胴化し、大型化した在地甕の2種である。須恵器坏蓋は口径11.3cm、器高4.3cmでやや扁平、ロクロ目や回転ヘラ削り調整はシャープさに欠けている。焼成は堅牢で締まっている。

4期 (第39図)

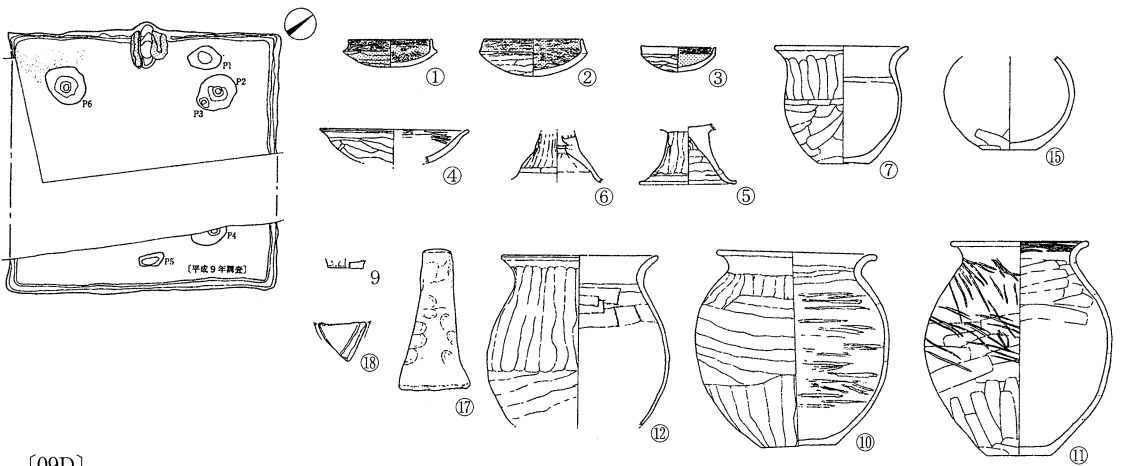
08Dを標準とした。本期の時期は陶邑編年TK217型式以降で7世紀前半以降に位置づけられる。^(註1)土師器、須恵器により構成される。土師器では坏、小型甕、甕で、須恵器では蓋坏、短頸壺が出土している。本跡遺物はほぼ相伴遺物であり、14についてもほぼ廃絶時の遺物としてよい。土師器坏は須恵器蓋坏模倣形態のものは全くなく、碗形態のみである。口径は12～14cmで、器高は4～5cmを測る。漆仕上げと炭素吸着による黒色処理を施す5.7.8.9と未処理の6が混在する。また8.9はほぼ規格品で、体部外面のヘラ削り調整についても、一支点で同一方向に底面を数回削った後に横方向のヘラ削りを行うという製作上の取決めがなされているようである。甕は、口辺部がくの字状を呈する在地甕の13.15と14の長胴甕の3種が見られる。在地甕2種は長胴化が著しく進んでいる。須恵器では蓋坏が坏身、坏蓋のセットとして出土した。坏身は口径10.5cm、受部径9.3cm程度で器高は2.6～3.1cmを測る。坏蓋は口径

2
期

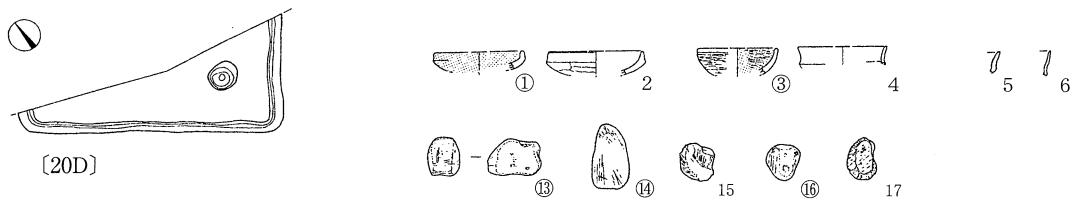
○数字は床面・カマド内出土遺物



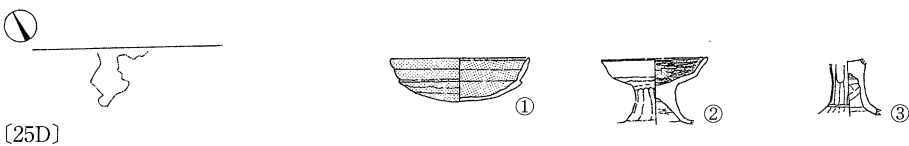
[24D]



[09D]

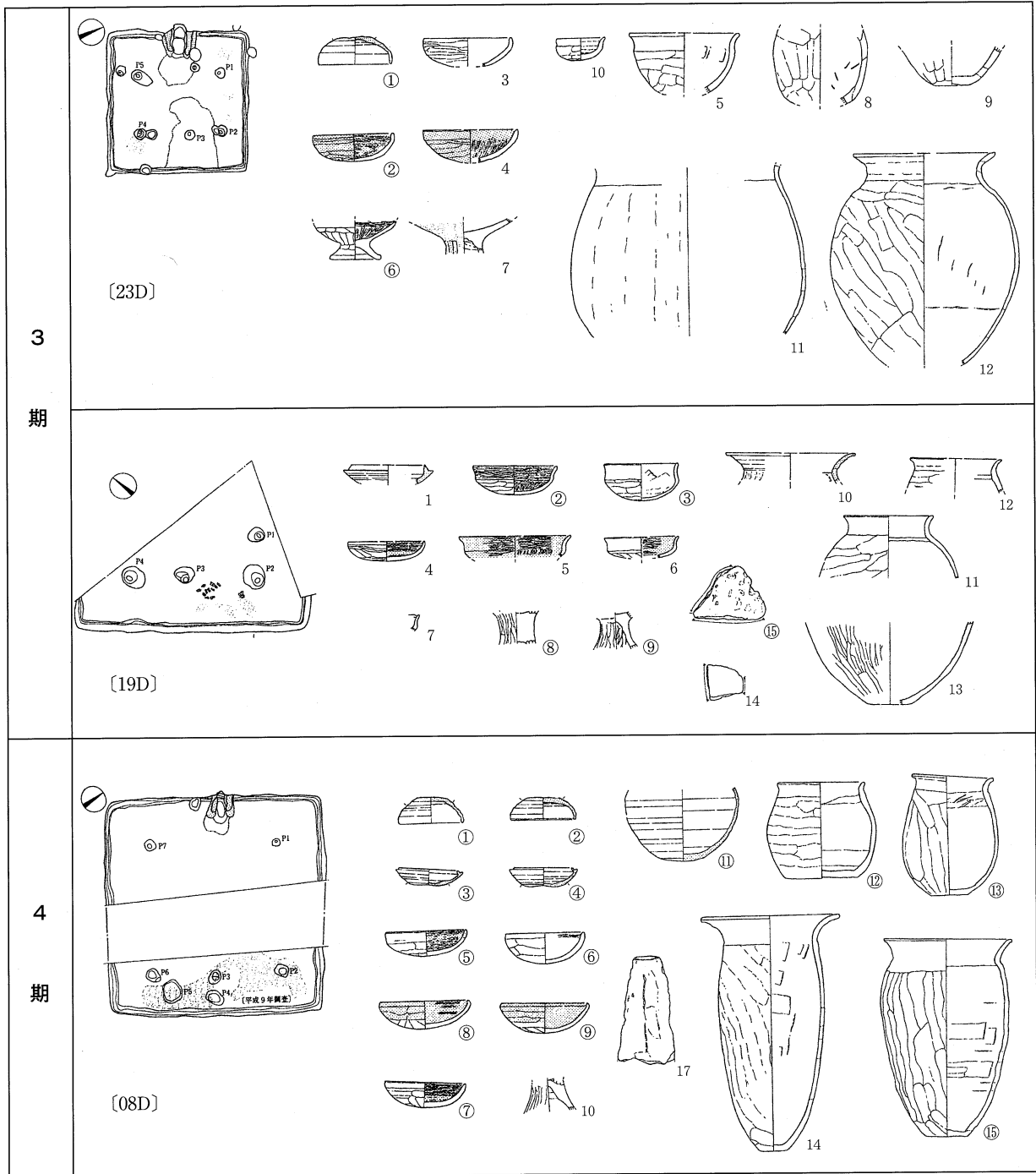


[20D]



[25D]

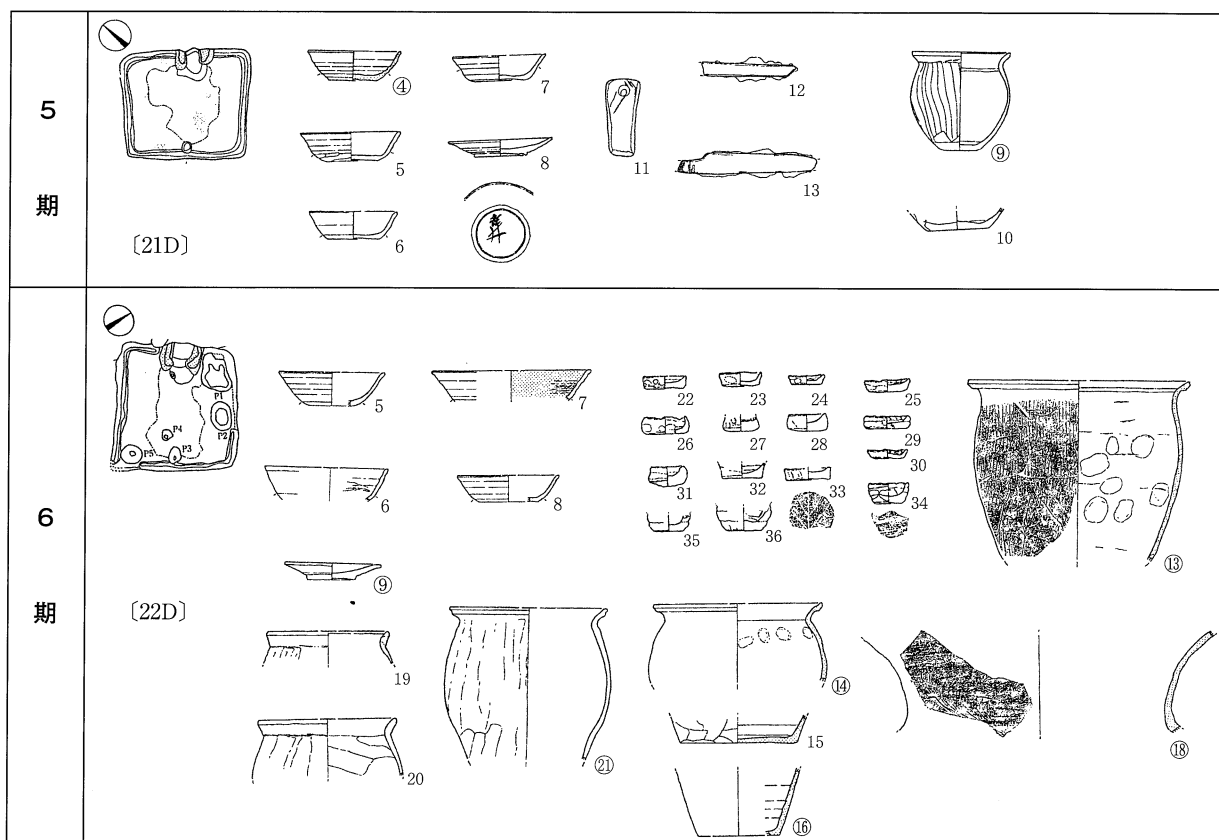
第38図 内込遺跡 b 地点 2 期遺物集成図 (S = 1/200, 1/10〔土器・支脚〕, 1/5〔石・土・鉄製品〕)



第39図 内込遺跡b地点3.4期遺物集成図 (S=1/200,1/10,1/5)

9.9cm, 器高3.6 ~ 4.2cm を測る。坏身の受部径と坏蓋の口径から妥当なセットと言える。11の短頸壺は口辺部~胴上半部を欠失しているため全形が判らないが、底部は回転ヘラ削り調整により丸底となっている。上半部欠失後に坏類の収納用として再利用されている。これら須恵器類は東海産である。

08Dの遺物出土状況(9ページ右側)の中で、P7前の壁寄りの位置に食器類が整理された状態で出土した。二次的使用の短頸壺11中に土師器坏6.9.5と須恵器蓋坏1が、大振りの土師器坏7中に須恵器蓋坏4.3.2が、その回りに土師器坏8, 倒位の土師器甕15, おそらく正位の土師器甕13, 少し離れて正位の土師器甕12が検出された。収納として観た場合、柱の後ろ側を食膳具の整理スペースとして使用していたことがいえよう。同様の空間利用は24Dにおいても見られる(25ページ右側)。こちらはカマド袖両サイド



第40図 内込遺跡 b 地点5.6期遺物集成図 (S = 1/200, 1/10, 1/5)

からで、左袖脇では、正位の甌内に坏7点が収納され、支脚が立て掛けられていた。右袖脇では、正位の甕2点とその間に支脚が立て掛けられていた状況である。

5期 (第40図)

b 地点においては、竪穴住居跡1軒のみの検出である。住居廃絶時の遺物は4と9で、他は混入遺物である。本住居跡は人為的埋め戻しをしており、混入した遺物が住居廃絶時に近い遺物とする5.6.7の坏の形態、8の土師器皿の出現時期を参考に、9世紀第2四半期やや前とすることが妥当であろう。

6期 (第40図)

b 地点においては、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟の検出である。住居廃絶時の遺物は9.13.14.16.18.21でその他は自然埋没による混入遺物である。カマド上出土の9の土師器皿、5~8の土師器坏類の形態を参考にすると9世紀第2四半期に、また16.18を除く須恵器甕類の形態や整形技法として平行叩き目文、手によるヘラ削り、体部内面の当て具痕等を考慮すると9世紀第2四半期~第3四半期に想定されよう。19.20の土師器小型甕もやや後出の形態を持つ。よって、本期は9世紀第2四半期を中心とした時期と想定できる。比較的まとまった手づくね土器の扱いは、住居覆土中に散漫に出土しているが何らかの意図により投棄したと考えたい。

以上、雑駁な形ではあるが、内込遺跡の遺構、遺物についてまとめてみた。古墳時代の遺物については、(財)千葉県文化財センターの田中 裕氏に実見いただいた。氏は現場中にも拘わらず、快く引き受けていただき、記して感謝の意を表したい。また、筆者の力量不足から理解の至らない部分、誤認等の部分があると思われるが、全て筆者の責によるものであることをお断りしておく。

註

(1) 筆者の中では、東海産須恵器蓋坏の年代観、椀形態の土師器坏の主体量としての位置づけや a 地点の同時期住居群の遺物構成の中に須恵器蓋、坏等の新しい段階の遺物が一切見られないことから7世紀中葉を想定している。しかし、東海地方湖西窯跡群などでは合子状の蓋坏形態とつまみ付き坏蓋、坏身形態の両者が同時期に生産されており、時期の特定はむずかしい状況である。

引用・参考文献

第3章第4節

- 朝比奈竹男他1982『千葉県八千代市高津新山遺跡』八千代市教育委員会
1983『千葉県八千代市高津新山遺跡Ⅱ』八千代市教育委員会
1984『千葉県八千代市高津新山遺跡Ⅲ』八千代市教育委員会
高津新山遺跡調査会1990「高津新山遺跡出土品展示会資料」
八千代市史編さん委員会編1991『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』
武藤健一他2004『千葉県八千代市高津館跡 b 地点・本郷台遺跡発掘調査報告書』八千代市教育委員会

全般

- 菱田哲郎1996「須恵器の系譜」歴史発掘10 講談社
森竜哉他2001『千葉県八千代市内込遺跡発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会

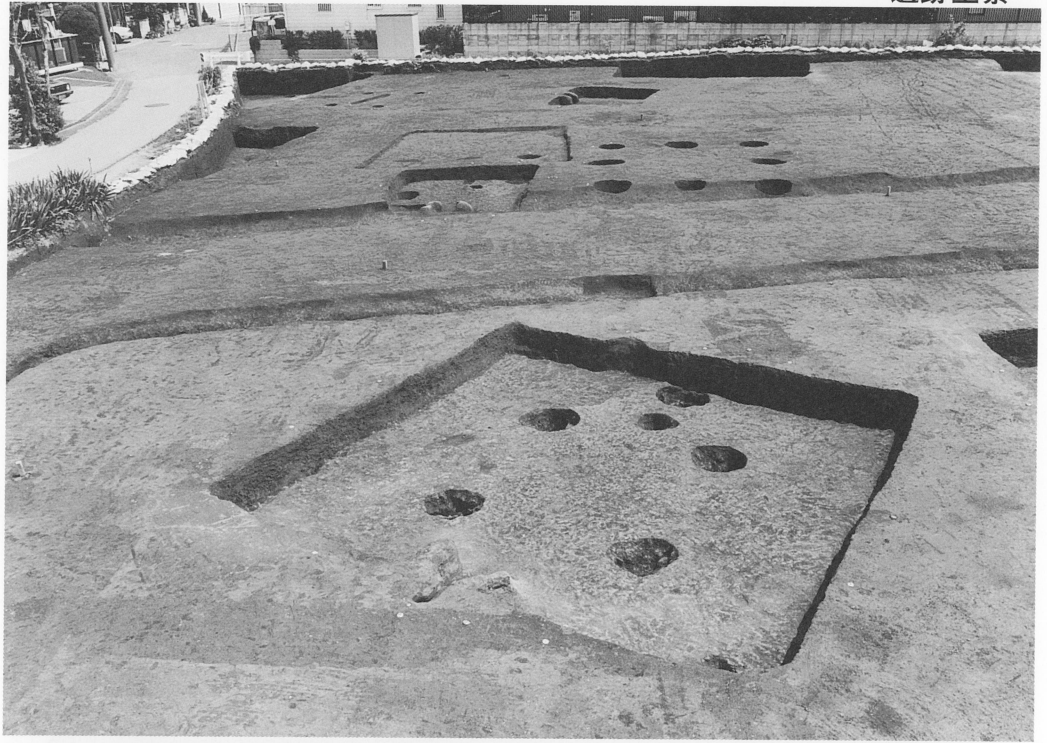
古墳時代

- 中村浩1981『和泉陶邑窯の研究』柏書房
萩原恭一他1988『東金市久我台遺跡』財団法人千葉県文化財センター
長谷川厚1989「神奈川・千葉県地域の赤彩土器・黒色処理土器について」『東国土器研究』第2号 東国土器研究会
田中広明1991「古墳時代後期の土師器生産と集落への供給——有段口縁坏の展開と在地社会の動態——」『埼玉考古学論集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
後藤建一1991「3 須恵器の編年 東海-B 静岡」『古墳時代の研究』第6巻土師器と須恵器 雄山閣出版
長谷川厚1995「東国における7世紀史の意義——土師器の動向からみた東国社会の変革について」『王朝の考古学』大川清博士古稀記念会編 雄山閣出版
小沢洋1995「房総の古墳後期土器——坏の変遷を中心として——」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
田中広明1995「関東西部における律令制成立までの土器様相と歴史的動向——群馬・埼玉県を中心にして——」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
岡田光広他1996『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書』千葉県文化財センター調査報告第276集 財団法人千葉県文化財センター
鶴間正昭1997「関東の7世紀の土器」『古代の土器研究——律令的土器様式の西・東5 7世紀の土器——』古代の土器研究会
渡辺一1999「東日本の飛鳥・白鳳時代の土器について——北武蔵を事例に——」『飛鳥・白鳳の瓦と土器——年代論——』帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会 古代の土器研究会
鶴間正昭2001「関東における律令体制成立期の土師器供膳具」『東京考古』19東京考古談話会

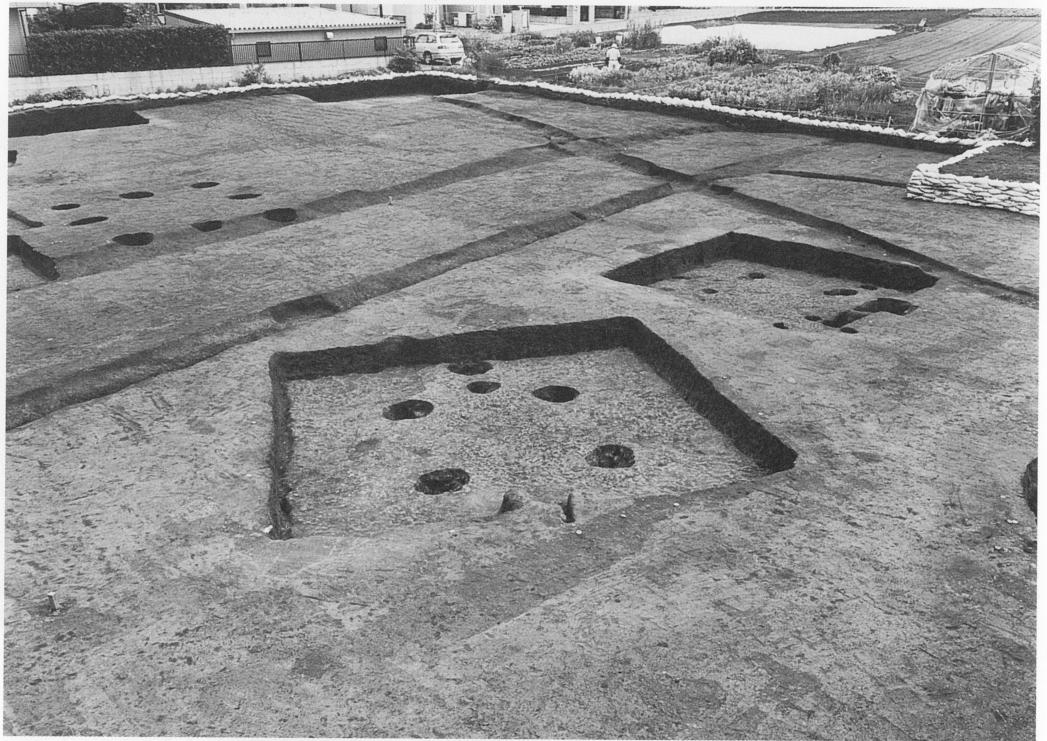
平安時代

- 笹生衛1990「房総における黒色土器の展開と終焉」『東国土器研究』第3号 東国土器研究会
藤岡孝司1990「八千代市萱田地区遺跡群の歴史時代土器」『研究連絡誌』第30号 財団法人千葉県文化財センター
鳴田浩司他1999『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書——印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡——』千葉県文化財センター調査報告第358集 財団法人千葉県文化財センター

写真図版



遺跡全景（西から）手前は 24D 左奥 19D



遺跡全景 手前 24D, 23D 中央奥 09D



遺跡全景



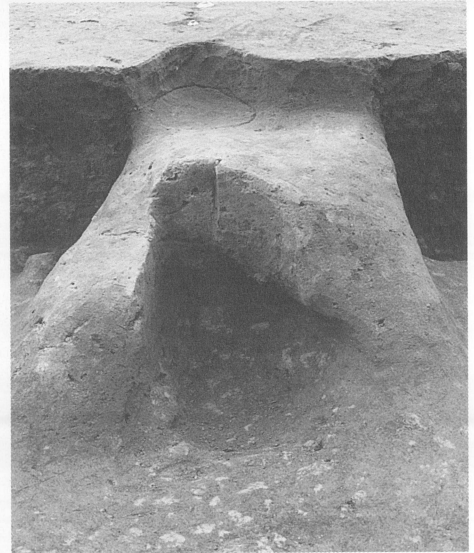
遺跡全景



08D 完掘状況 (奥は 21D)



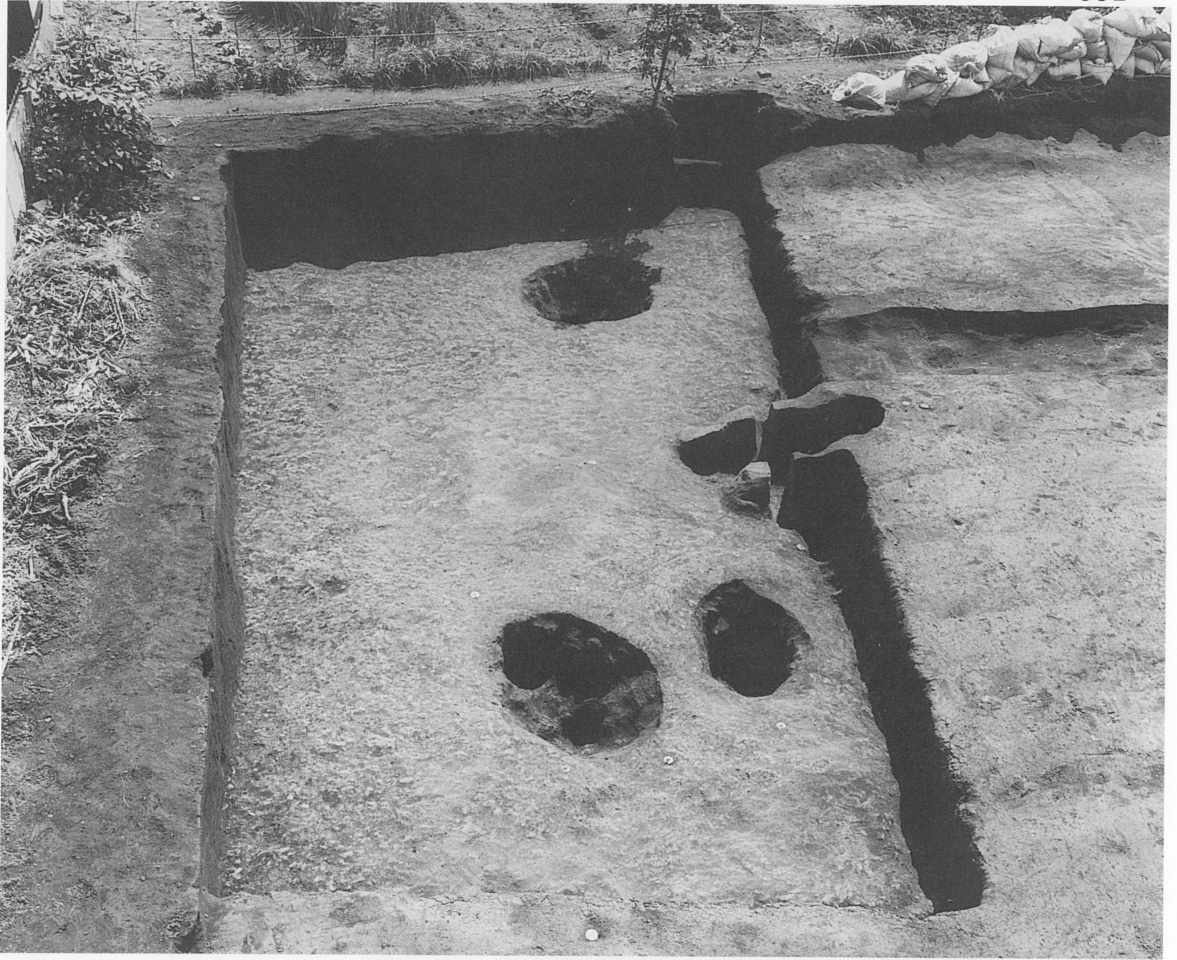
壁際遺物出土状況



カマドの天井部、煙通部がよく遺存している。



拡大部



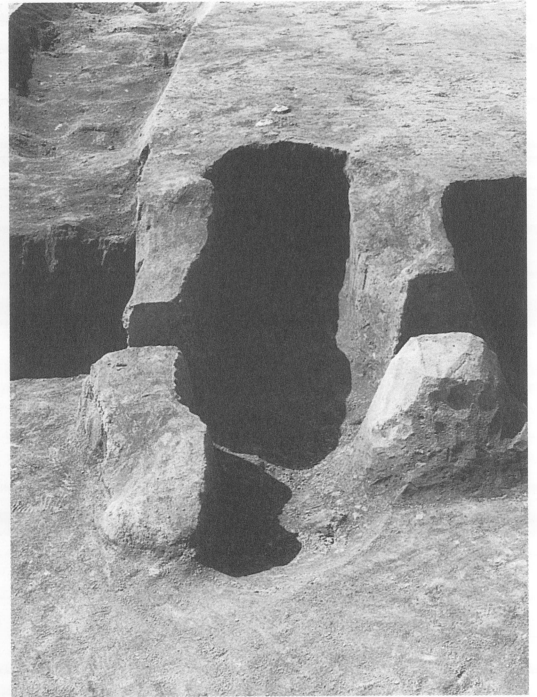
09D 完掘状況



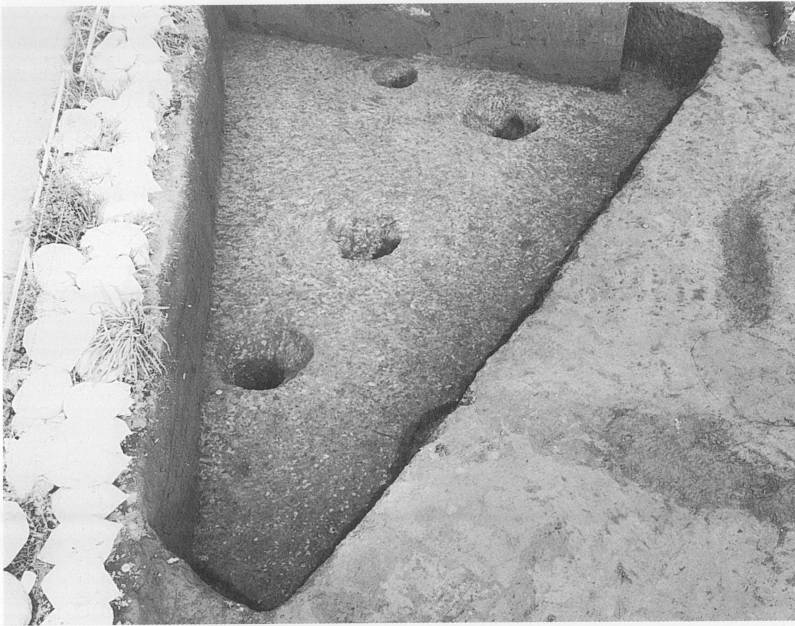
遺物出土状況



09D カマド脇遺物出土状況



09D カマド



19D 完掘状況



19D 遺物出土状況



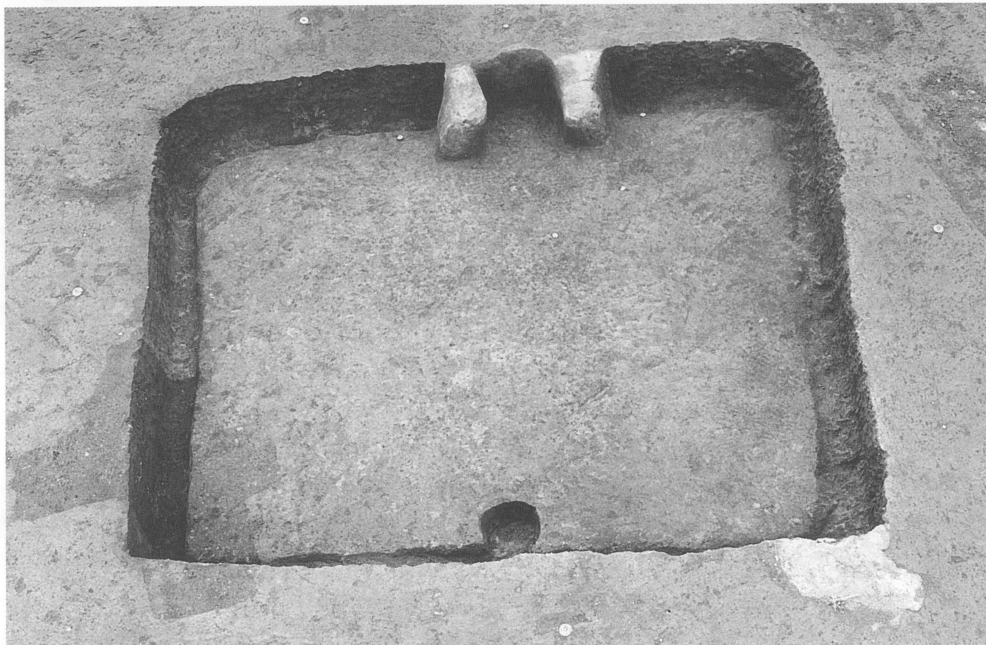
19D NO.2 出土状况



19D NO.3 出土状况



20D 完掘状况



21D 完掘状況



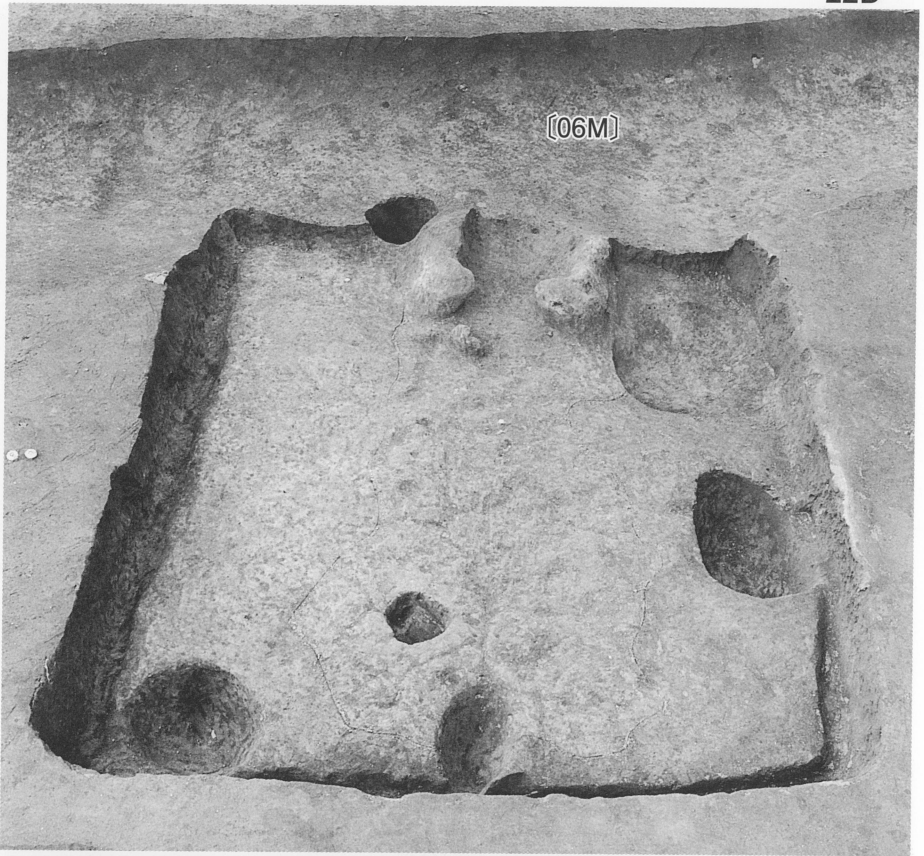
21D カマド



カマド内 No.9 遺存状況



No.4 出土状況



22D 完掘状況
(カマド奥は 06M)



22D カマド



遺物出土状況



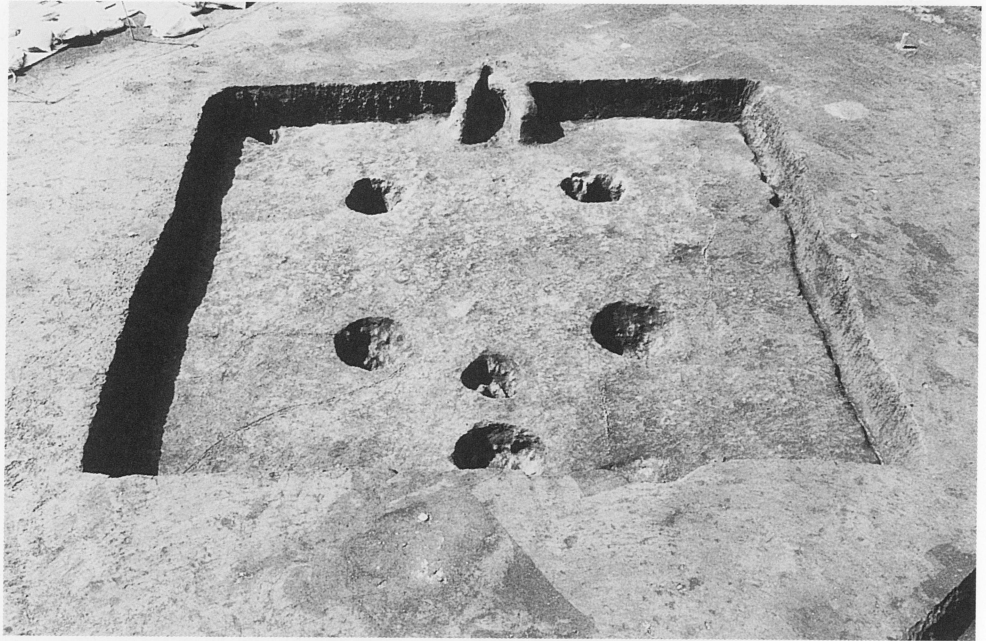
23D 完掘状況



23D カマド



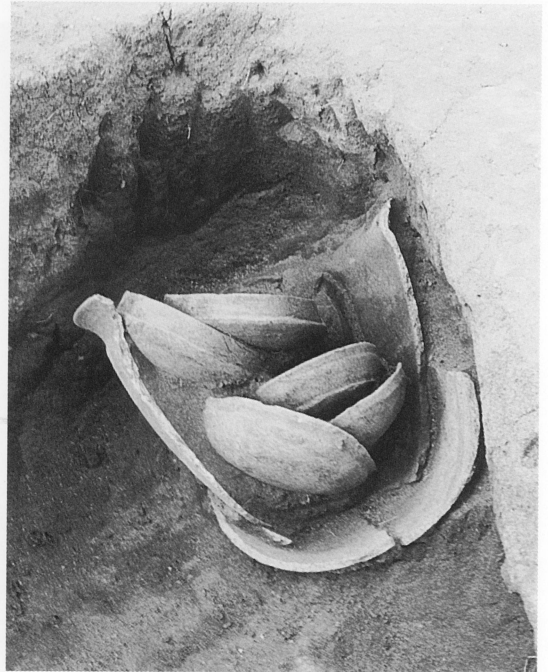
23D 遺物出土状況



24D 完掘状況



カマド左袖脇遺物出土状況



No.31 内坏類出土状況



24D カマド



カマド右袖脇 No.28, 29 出土状況



25D 床硬化面（中央右側）
及び遺物出土状況



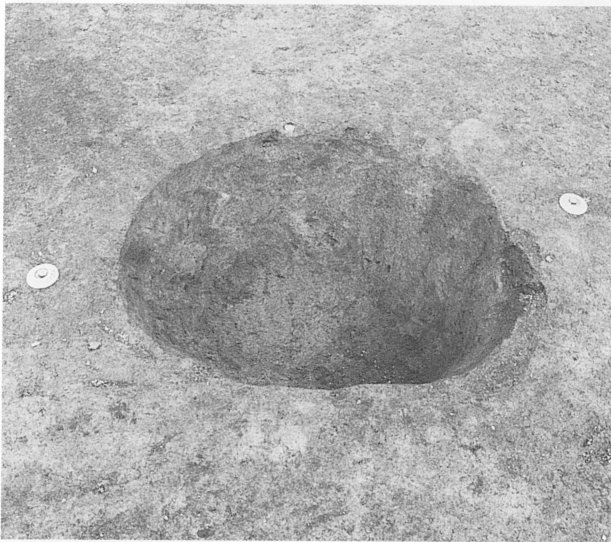
08H 完掘状況
（奥は 22D）



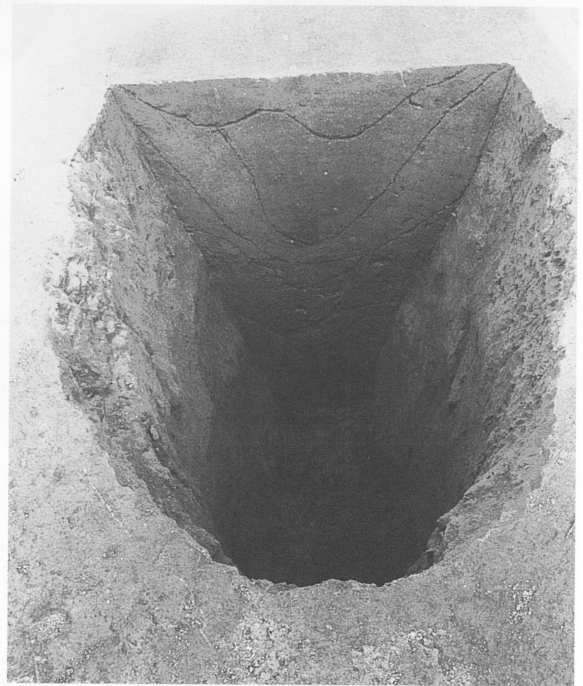
09H 完掘状況
（中央は 204P）



202P 完掘状況



203P 完掘状況

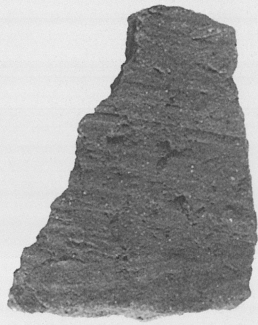


202P 土層堆積状況



205P 完掘状況

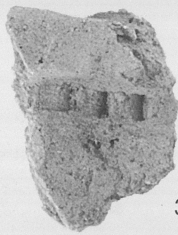
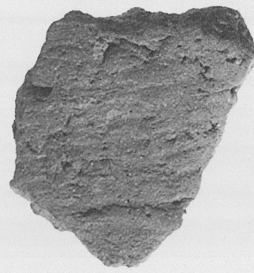
図版12
—縄文時代の遺物—



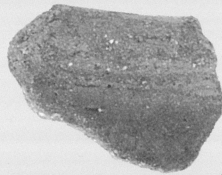
1



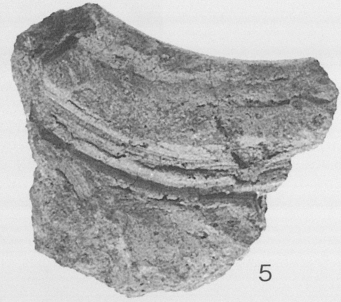
2



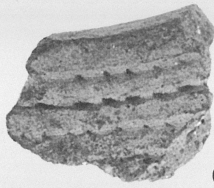
3



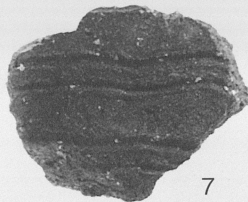
4



5



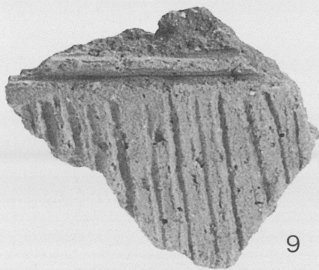
6



7



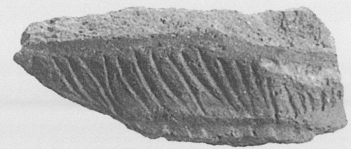
8



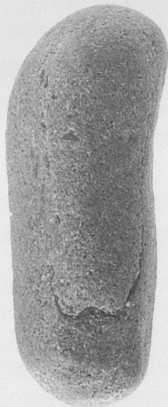
9



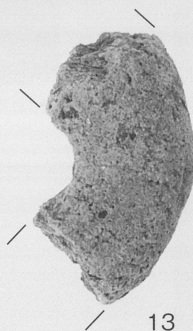
10



11



12

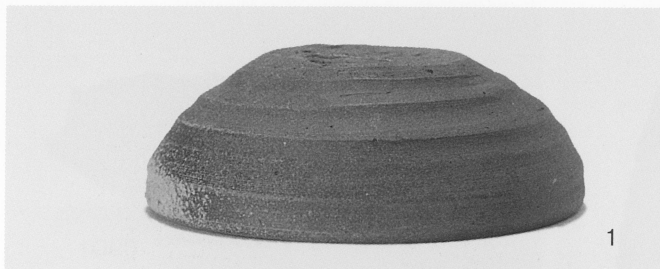


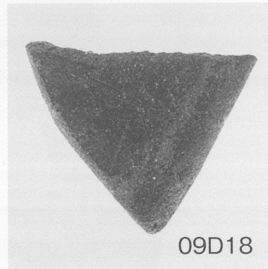
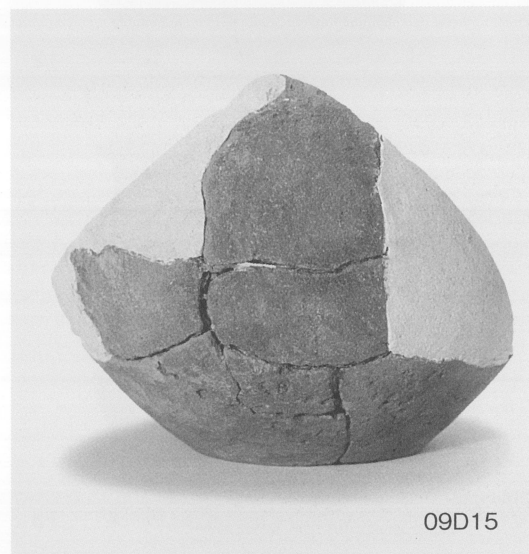
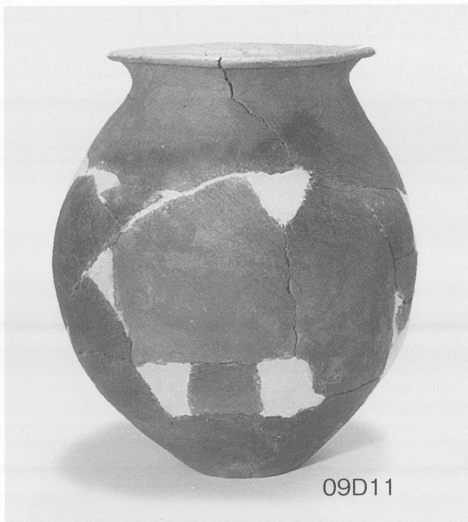
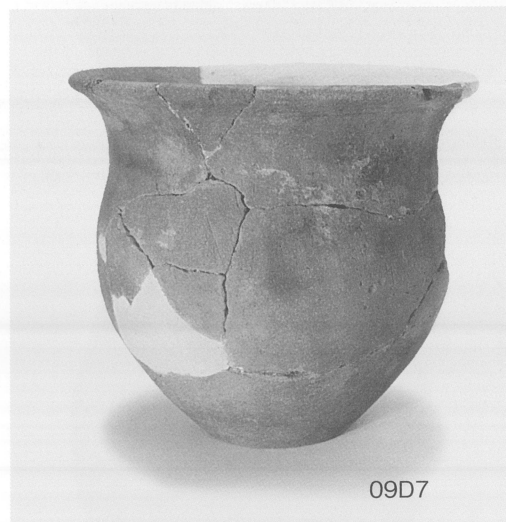
13



14





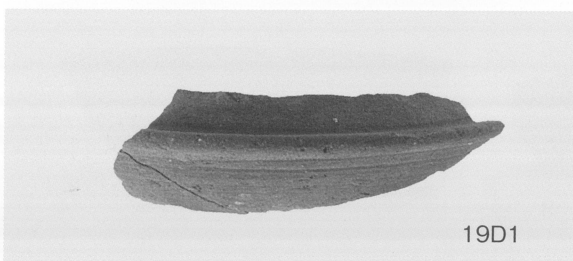




09D12



09D10



19D1



19D9



19D8



19D2



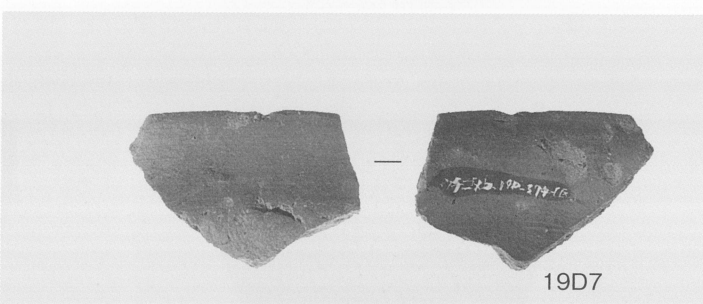
19D11



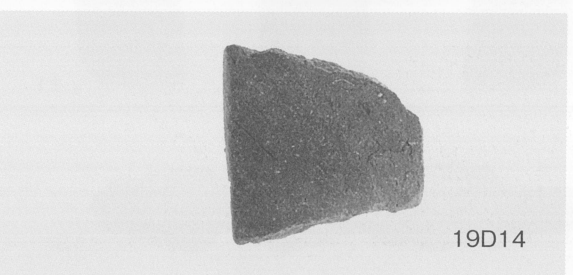
19D3



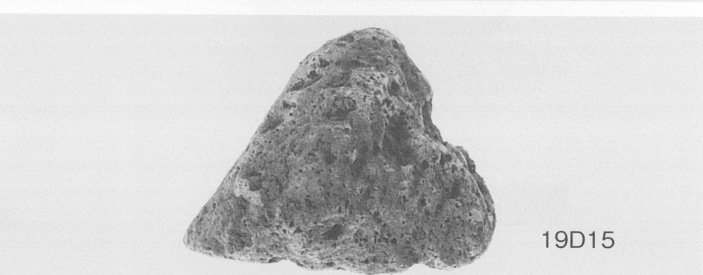
19D10



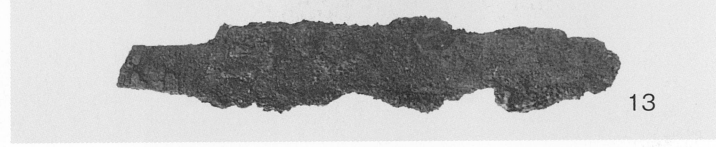
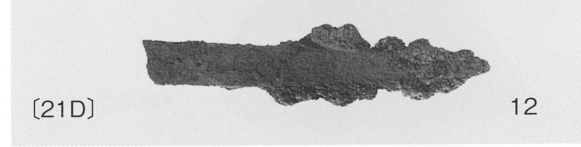
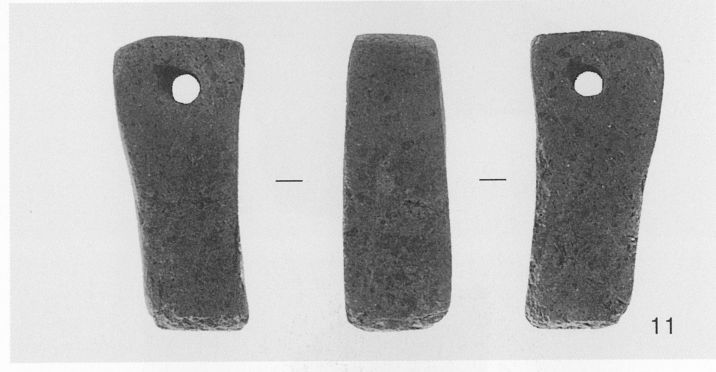
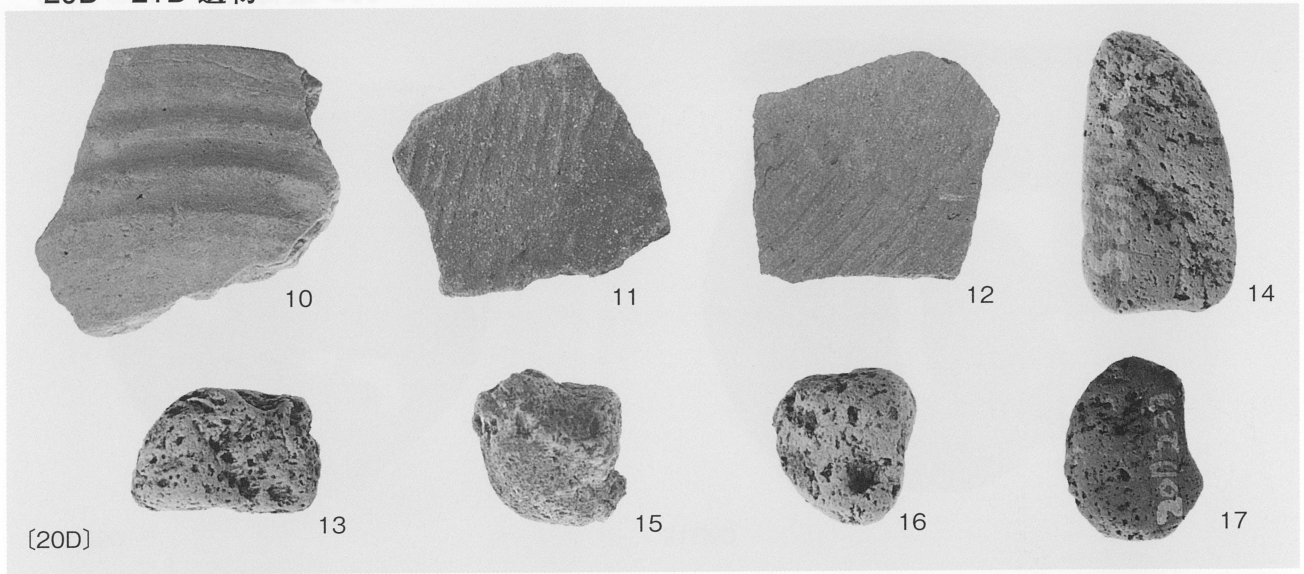
19D7

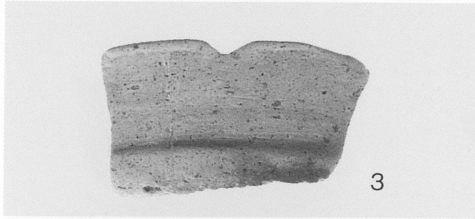


19D14



19D15





3



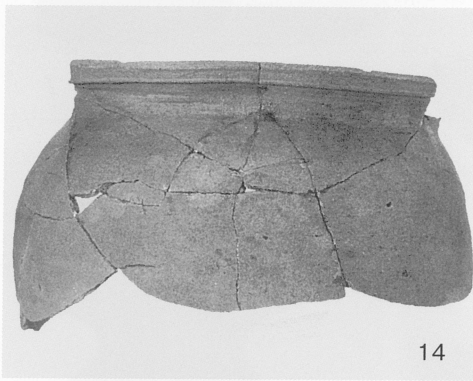
9



24



13



14



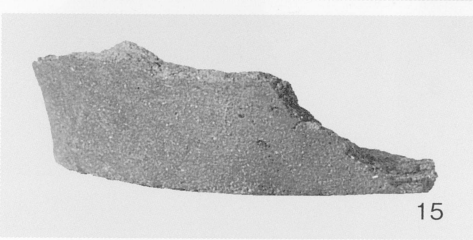
23



35



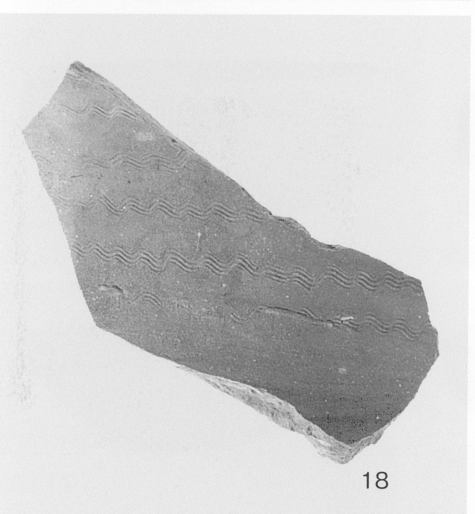
32



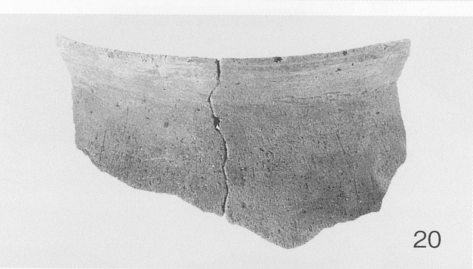
15



31



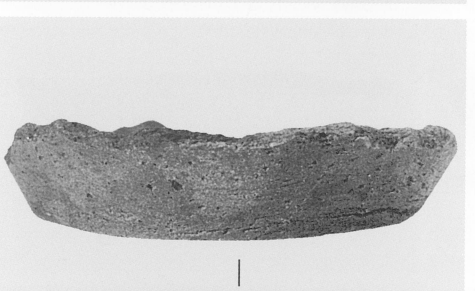
18



20



33



17



21



28

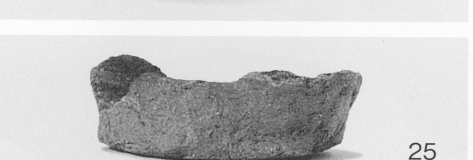


34



[22D]

17



25



27



22

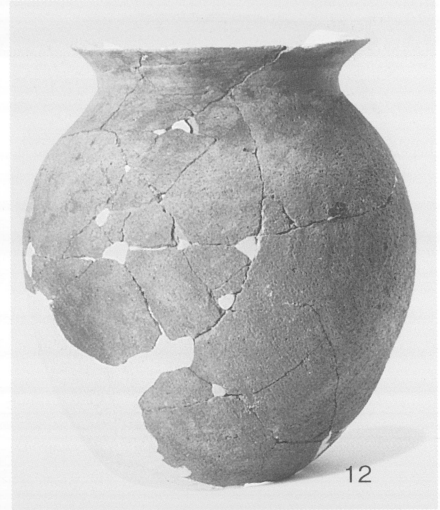
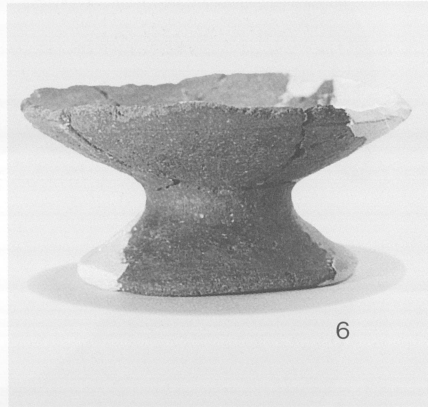


36

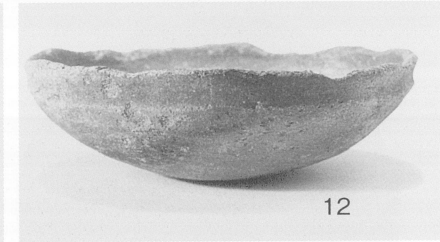


30



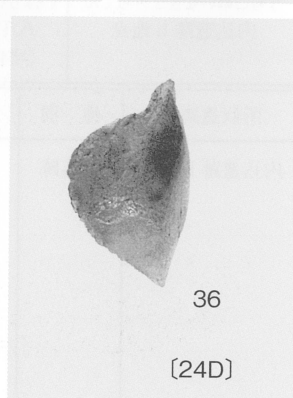
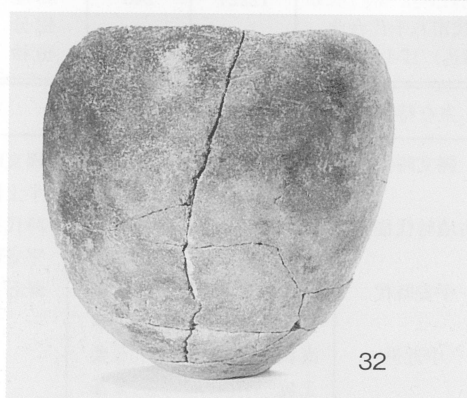
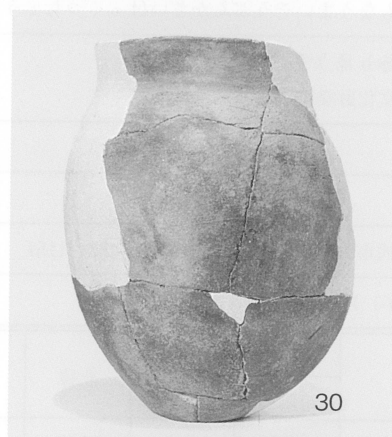
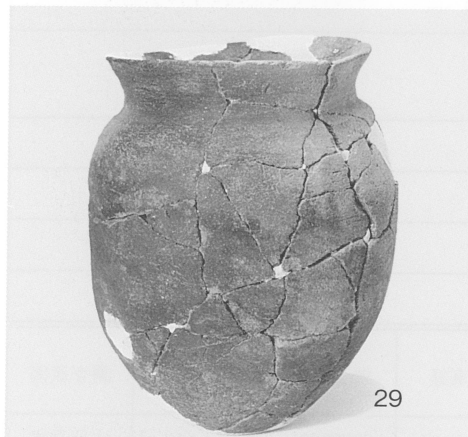


[23D]



[24D]







報告書抄録

ふりがな	ちばけんやちよし うちごめいせきびーちてんはくつちようさほうこくしょ — たくちぞうせいにともなうまいぞうふんかざいはくつちようさ —							
書名	千葉県八千代市 内込遺跡b地点発掘調査報告書 — 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査 —							
編著者名	森 竜哉							
編集機関	八千代市遺跡調査会							
所在地	〒 276-0045 千葉県八千代市大和田 138-2 TEL.047 (483) 1151							
発行年月日	西暦 2003年(平成15年)12月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うちごめいせきびーちてん 内込遺跡b地点	やちよしやちよだいきた(あざうちごめ) 八千代市八千代台北 (字内込) 17-14	12221	246	35度 42分 40秒	140度 05分 25秒	20020201 ~ 20020509	上層 1,500m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
内込遺跡b地点	集落跡	縄文時代 古墳時代後期 平安時代 中近世	陥穴 炉 竪穴住居跡 掘立柱建物跡 竪穴住居跡 掘立柱建物跡 溝状遺構 土坑	1基 1基 7軒 1棟 2軒 1棟 5条 2基	縄文時代早期後半・中期前 半土器片, 石鏃等 古墳 時代後期須恵器・土師器 平安時代土師器・須恵器, 砥石, 刀子等			

千葉県八千代市
内込遺跡b地点発掘調査報告書
- 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査 -
2003

印刷日 2003年12月15日
発行日 2003年12月22日
発行 岩井富久
編集 八千代市遺跡調査会
